
騎士学校の俺と俺だけの姫様

アマリリスーアマガミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士学校の俺と俺だけの姫様

【Nコード】

N4688Y

【作者名】

アマリリスーアマガミ

【あらすじ】

騎士と魔法、少年少女が憧れて入学する学校へフェイトが選んだのは騎士学校だった。

「いつか出逢う俺だけの姫様を守るため」

少年は学び、出逢い、そして探す。

騎士になって姫を守りたい、小さな頃に憧れた物語。その主人公になりたくて。

そして学校に行きながらも自分の姫様を探すために西へ東へ暴走奔走。

果たして理想のお姫様は見つかるのか？

学園ファンタジーラブコメが始まります

序奏

ついに憧れだった学校、騎士養成所として名高い「ナイツオブラウンド」に今春入学した。

15歳で義務教育も終わり、自分の進路を決める時俺は迷わず騎士学校を選択した。

理由？そんなの簡単だ。

俺は、俺だけの姫様を守る。それが俺の騎士道だから。

全寮制で5年間一貫して学べるこの騎士学校は魔法学校と二分して人気の学校でもある。

総じて魔法を選ぶ傾向にある人は知識に優れ、また将来設計まで考えている人が多く、また魔法の扱いの難しさや発現力にどうしても才能という嫌な文字が付きまとうので、魔法学校はようするにエリートが集まりと言い換えることもできる。

一方の騎士学校は単純だ。自身の努力で自分を磨けば将来王国への兵士として入宮もできるし、魔法師の旅に欠かせない相棒として組み、パートナーを得る事もできる。

他にも勿論学問を学び修める道もあるが、やはり少年少女にはカッコよさを求めるのが一番分かりやすい。

そんな訳でついに入學したのだが、

「うそだろ?!なんで今日に限って目覚ましが止まってんだよ!？」

そう、ある種現実逃避気味にこんな回想をしていたのは全力疾走で学校に向かっているからである。

晴れの入学式、クラス発表や新たな友人との出逢い、そんな春の期待に裏切られてしまつては騎士学校デビューは遠くなるどころか、

失敗に終わってしまう。

9時に入学式が始まるが、現在の時刻は8時55分。本当は8時30分には余裕で学校に着きクラス名簿が張り出された掲示板を周りの新人生と一緒にみて、そんな中で新たな出逢い、主に女子との出逢いなんかを期待したかったのに！

学校まで幸いに徒歩で行ける範疇ではあったが、徒歩1時間の道のりを10分で走れというのは中々に無茶だ。というより現実的に無理だ。

今朝奇跡的に目が覚めたのが8時45分、支度は5分で済ませ家を全速力で出立。5分程走ってみたが勿論間に合わない。

「仕方ない、緊急事態だし使うか」

そんな訳で焦った頭も走ってる内に明快になってきたので、頭を動かす。ようするに時間内に着けばいい。そうすれば予定とはちよつと違うが、騎士学校デビューは無事に済むはず。

キツ、と走ってる足を止めその場で息を整えながら精神集中。

「…飛べー！リリアウト！」

飛行呪文を唱えみるみる内に上昇していく。そして加速を思い切りつけ全速力で学校に向かう。

この飛行魔法の速さは術者にもよるが熟練した者が使えばそれこそ飛行機と同じような速度、つまり時速800Km、秒速に直せば200m以上にもなるので後4分しかなかろうが1分もあれば楽々着くのである。

「到着つと」

あんまり目立つといけなかったので校門付近、人氣が少ない通りへと着地する。

もうここまできれば目と鼻の先、間に合った。

そう思い顔を上げると……

こちらを見つめる少女の顔があった。

金のストリートロングヘアはとても綺麗で、まるで絹を揺らしているように艶やかに揺れ人目を引き付けるが、なんと说着ても特徴なのはまるで吸い込まれるような深いエメラルドグリーンの瞳。

意志の強さを感じさせる瞳ではなく、どこまでも純粹な穢れを知らない無垢さがその深さを測ることを許さない。

一瞬、いや数秒は確実に目が合ってしまったがハッと我に返る。そうだよ！始業式！

しかしマズイ事になった。少女の白を基調としたローブ風の制服は恐らくこの付近に存在する全国最大規模の魔法学校のもので（有名なので学生ならば誰でも知っている）、もし自分の飛行魔法を見られていたのだとすればマズイ。

飛行魔法を使えば魔法学校では普通は飛び級どころか、すでに卒業レベルである。

だからこそ目立ちたくなくて使いたくはなかったのだが、緊急事態だったから仕方あるまい。（遅刻が緊急かは審議を掛ける必要がありそうだが）

魔法学校に進学しているのだとすれば、この魔法を習得した人物に対しては尊敬や羨望の眼差しで色々な質問に迫られるのが常。一秒も早く立ち去って始業式に行かないと…

…と思つたが少女は俺から目線を外すと塀の上に居座っている猫に視線を移す。

いや、もしかしたら俺が来る前からずっと猫を見ていたのかもしれない。

ただ、俺はそんな少女の行動が不思議で時間が惜しい中声を掛け、話してみたいと思つてしまった。

「俺の今を見て何とも思わなかったの？」

これではまるで自慢したいがために質問したみたいじゃないか！俺のバカ！！

すると少女はまたこちらに視線を戻してくれて答えてくれた。

「今の？高い所から、落ちて、きたよね、大丈夫？」

俺はこの瞬間会話がかみ合っていないと思った。というよりこの少女は多分天然とか人見知りとかじゃない。絶対に不思議系だ！

それにしても、言葉が所々不思議な個所で途切れるな？

余り関わりたくない、そうは思っても無言で立ち去る等騎士たる者ではないため、改めて言葉を発し会話を適切に終わりにし、速やかに入学式に行こう。

「もしよければ今のは見なかったことにしてもらえると助かります」
じーっとこちらを見つめたまま、数秒。その後には返答はあった。

「分かった。誰にも、言わないよ。騎士さん」

つてこつちが騎士学校の生徒だつてちゃんと分かってんじゃん！不思議系かと思つたらちゃんと知識はあるし。

とはいえ鮮烈な赤を基調とした制服を身につけ、学年毎に色が代わるネクタイをしているのだ。

この鮮烈な赤の目立ち方から言えば学校が分かってても不思議ではないが。

「ありがとう、魔法師さん。それでは俺はこれで」

左足を一步下げ少女に向かって傳く。騎士たるもの当然の礼儀である。

そして魔法師の少女は答えてくれた。

「私は、リード・ロード。よろしく、ね」

手を後ろ手に回し、こちらを覗きこむようにいたずらっぽく視線を合わせてくる。

と、目があった時少女が少しだけ笑っていたような気がした。純粹な瞳に似合うような朗らかな笑顔で。

「俺はフェイト・セーブ。よろしく、リード」

姿勢を戻し握手を求めると、彼女は心地よく握り返してくれた。

もしかすると、これも今日の入学式という日がもたらした出会いだったのかもしれない。

しかし、現実は無常にチャイムが鳴り響きフェイトの遅刻が確定した。

その後リードと別れ、入学式には途中参加して悪目立ちするのもアレなのでクラス掲示板を一通り眺めて時間を潰していた。

「なんか、初日から不良じみてるな」

生徒がホールから出るのに合わせて紛れ込めば、まあ初日でみんな顔が分からないだろうしなんとか入学式に出たということにしておいてクラスに溶け込めるだろうという作戦だった。

一応ぐるっと回ってみたが、教師も、まして生徒は一人もいない。更には入学式ということで上級生も来ていないので、この学校に一人だけ取り残された感じまでしてしまう。

「あー、早く終わんないかなー」

幸い読書に向きそうな大木を見つけそこに陣取り背中を預けていたことで、春の日差しとそよ風を感じるといふ風流なことは出来ているのだが。

入学式は20分程か？そんな事を考えていたら、どこか遠くから鋭い風切り音が聞こえてきた。

周りを見渡してみると、自分に向けられたものではない。それに恐らくこれは遠く恐らく弓によるものだろう。

「そついえば、弓道場もあったかな」

学校案内のパンフレットを流し読みしただけだが、施設は多くあり

弓道場もこの学校には備わっていたはずだ。

「暇だし行ってみよっかな」

そもそも今日は上級生にとって休日だ。そんな中この朝から弓の練習のために学校にくるといふ行動を取る人物にフェイトは興味を持ったのだ。

「どんな人だろ？」

一定間隔開けて耳に届く音は鋭く清廉で、恐らくかなりの腕、的をみなくても実力が分かるだろう。そんな人物だと想像できた。

少し歩いて道場につくと、音は外の方から聞こえる。どうやら道場の外の射的場にいるようだ。

ちなみに、騎士の学校なのに何故か和を取り入れた施設がいくつかあったりする。剣道というのも和であるし、弓道も和である。これらを身につける時は騎士の鎧ではなく道着に袴という騎士？といったくなってしまう格好になってしまいがそれでも剣筋や弓に西洋にない流廉さがあるのが人気らしい。

と、そんなことを思い出している間に目的の人物を見つけ――

「あれ？」

思わず声に出してしまった。

だって、あれだけ綺麗に等間隔に放たれた矢の音、無駄なく最速で的を射抜く技術の極み、そう思っていたが……
矢は一本も的に刺さっていなかった。

「誰?!」

そして思わず声を出してしまったがために、練習していた女性に剣呑な声で話しかけられてしまった。

「あ、えとすいません。誰かが練習しているみたいだったので見学させてもらおうと思ったんですが……」

女性の雰囲気を押され答えが弱気になってしまう。見ると目も怖い。よっぽど邪魔してしまったのだろう。

「今日は登校日でもないし、一年生は入学式よ。…でもあなた制服着てるし、何者？」

何者とは穏やかでない。これは真剣に誤解を解いた方がいいと思い、フエイトは必死に伝わるよう説明してみた。

「いや、新入生で入学式にきたんですけど、あーそのー遅刻してしまいで、それでホールに入りづらくてそれで時間潰してクラスに流れ込もうかと思ひまして、それでその時間潰してる間に弓の音が聞こえたんですから見学させていただこうかなーと思ひまして、そんなんですよ。あ、あのー信じてもらえます？」

ちよつとつかえつつだったのはこの方が焦っていることも、必死なことも伝わるだろうと思つてのことだった。

そしてどうやら、こちらが焦っている様子をみて先輩の方が落ち着いてたらしい。

「そうか、すまなかつたな。驚かせてしまったらう。私は九行なずな、見ての通り弓道部所属の4年生だ」

黒髪ポニーテールで長身のこの女生徒はどうやら上級生、それも自分とは三つ違いのようだ。

切れ長の瞳は挑戦的や不敵とも見えそうだが、この先輩からにじみ出る雰囲気からして普段は温和で面倒見がよさそうな先輩に見える。またスレンダーな体型に似合わずスタイルが抜群にいい。

努力家だろうし、本当睨まれなければファンもいるんじゃないのか？

「自分はフエイト・セーブと言ひます。すみません、集中してるところを邪魔してしまつて…」

申し訳なく謝る、今回の件で悪いのは自分だろう。秘密の練習に土足で踏み入つたようなものなのだから。

「こつちこそ悪かつた、ただサボりは感心しないな」

恐らく場を和ますための冗談なんだろうけど、なんだろう？この先輩に見つめられながらだと、試されているようにしか思えない。

「サボつたつもりではないんですが…まあその、遅刻してしまつた成り行きといひますか…」

ちょっと目が泳いでしまう。ここで軽口を返せるなら大人なんだろうけれど。

「いや、別に責めてるつもりはないんだ。ただ、初日からそれだと学校で苦勞するぞ」

先輩が言っているのは自主訓練のことだろう。今寮にいる上級生の殆どは10日後の始業式まで帰省しているので訓練場にいないが、自宅から通っている生徒も帰省している生徒もきつと早朝から訓練しているに違いない。

入るのは簡単だが、結果を出すのはとても難しい。

早朝から剣を振り、午前は勉強、午後は実習、放課後は部活で訓練、夜にもまた剣を振る。

それは騎士学校ではほぼ当たり前のように行われている暗黙のルール。

そうでなくては王宮への士官など夢のまた夢、ギルドへの加入や魔法師とのパートナーも全て実力がなければ務まらない。

これだけの訓練を積んで尚一人前になれないのが騎士なのだ。

後は稀にみる才能、幼少からの積み重ね、もしくはこの暗黙のルール以上の努力のどれかが必然となってくる。

それを初日から遅刻等という暴挙に出れば先輩に心配もされよう。

事実、退学者は年600名程出ている。1年生が殆どだが、中には体力が着いていかぬ者、周りとの差に諦める者、事故や怪我で騎士の道を断たれた者等も上級生から出ており現在この学校に新入生も含めた生徒数は1281名。

恐らく一月以内に100名は辞めていくだろう。

騎士という華々しさに憧れてやってきた者が、挫折を味わう。それでも少年少女には魅力に映る程の華が騎士にも魔法師にもあるのが現代だ。

「大丈夫ですよ先輩。こう見えても俺騎士を真剣に目指してますから」

ちよつとだけ背伸びをして先輩に答えておく。これが知りあって間もないのに心配してくれた優しい先輩への返事だ。

もつとお互いよく知り合っていたのならば、もつと深い話もできたかもしれないのが悔しい所でもある。

「そうか、なら頑張るといい。…先は長いぞ。良かったらフェイトも弓道部を見学に来てくれ、また何か話ができたらと思う」

そう言つて先輩はまた的に向かい直つて弓を構えた。

…行こう。

九行先輩の集中している姿を見ると、本当に見学して申し訳なかったと思った。

誘発

弓道場を後にしたフェイトは歩きながら時計に目を落として見る。

「お、意外に時間が潰れた。そろそろかな？」

待ちに待った入学式は終わったからクラスメイトとの顔合わせだ。とりあえずばれないよう、さりげなく、さりげなく人波に乗って入学式に出ていないということを隠さねば。

校舎に隠れて少し待っているとガヤガヤとした話声といくつもの足音が近づいて来る。

『焦るな、焦るなよ。もうちょっと待つんだ。』列が膨らんできた所を見計らい急いで忍んで列に割り込む。

『よし！成功した！』これで列に紛れこめたのでこの波に乗ってクラスに行くまでである。

「えーつと俺のクラスは1-Gだから」

ここだな、もうすでにクラスには20人程集まっている。

「おはよー！」

とりあえず挨拶である。無論元気に！知り合いがいないんだ、皆だつていきなり敵を作りたくて入学したんじゃないんだから答えてくれるさ。

「おは…よ？」

あれ？おかしいな？なんで疑問形なんだろう？まあ挨拶してくれたから失敗って訳じゃないだろうけど。

とりあえず一番近くにいた男子に聞いてみる。

「これって席とか決まってるのかな？」

よくみると少しホリが深く特徴的な顔立ちをして、大人びて見えるまあ、同じクラスの時点で年齢は同じなんだが、背丈も筋力も既に十分あるし男子としては羨ましい限りだ。

「いや、決まってるないみたい。どこでもいいんじゃないかな？」

おお、意外にフレンドリーだ。なんか幸先いいかも。

「んじゃ一緒に座ろうぜ、これも何かの縁かもだし。俺はフェイト・セーブ」

「よろしくな、俺はゲイト・ユンだ。寮に入ってる、フェイトは？」
「俺は自宅からかな、1時間位だ」

「いいじゃないか、俺は自宅が遠すぎて寮は半強制的にだ、実家の方が落ち着くのかな」

「まあそういうなよ、寮だつて仲がいいやつが一緒ならすぐ会えるつてメリットもちゃんとあるんだから」

「ははっ、そりやそうだ」

ゲイトは気さくな性格だったため、特に無理に話を繋げる必要もなく言葉がスラスラ出てきてキャッチボールが出来る。

うん、ホントにゲイトで良かった。

「そっぴやフェイト武器は？まさか素手なのか？」

お？ゲイトの目にかすかに好奇心が見える。結構聞きたかったのかな。

「いや、ちよつと事情があつて今手元にないんだ。一応剣だよ」

「そうなのか」

一瞬だが視線を外されてしまった。多分武器は騎士たるもの常に持ち歩くべきという習慣からなのだろう。

事情があるとはいえ、代用品すら持ち歩かない騎士は珍しいというより非常識に分類される。

そんなのを耳ざとく聞きつけるのは、好奇心旺盛か、意地が悪いかのどちらかだろう。

そして皮肉にもフェイトに絡んできたのは意地が悪い方であった。

「代替品も持たずに登校してきただ？お前頭悪いってかヤバイんじゃないねえか？」

ああ、面倒なのがきた。こっちは関わろうとなんて微塵も思っていないだから見逃してくれればいいのをなんで絡む。

どうせここで目立っておきたいんだろうけど、子供か。いや、15

歳は子供か。

「お前みたいなのはどうせ一月も持たないんだから早くいなくなつた方がいいぞ。机の無駄だ」

「言えてる言えてる」

おー取り巻き二人とは何とも古典的な。地元の奴らかな？どっちにしても金魚のフン連れてる時点で、リーダー格の器つて計れるけど。「そういうことだ。まだ入学式終わったばかりで自己紹介もしてないんだ、お前なんか記憶のメモリーを割いてやる必要はないってこと」

この会話自体がそもそもメモリーの無駄では？人間の海馬には忘れるということはない。思い出しにくくなることは多くあっても忘れること自体はない。だからこそこの会話こそメモリーの無駄なんだが、というのはきつと通じないだろう。

と、ここで隣のゲイトが立ちあがる。

「お前らなんなんだ？勝手に絡んで勝手にわめき散らして、子供か」以心伝心とはこの事か、とフェイトが思いたくなくなったが向こうにとつてそれは挑発以外何物でもなかっただろう。

「お前もなんだ？どうせこんな奴とつるんでる時点で負け犬っぽい」が、犬が吠えるな」

「ゲイト、よせ。こんなの相手にしても全く得にならない」

一応子供のわめきということを受け流せなくもないので、努めて冷静に言つたが意外にもゲイトが引つ込まなかった。

「俺が相手してやるよ、ダチを悪く言われて黙つたら男がすたる」

そう言いつつゲイトが自分の武器であるランスを手取る。熱い、熱いよゲイト。いや、騎士学校つて時点で熱い奴が多いのかな？

ちなみにこのランス、2mは超える長さを持ち、騎士の持ち物らしく白銀と光沢を放っており手入れが良くされているようだ。

でもあれ？目の前のこの変な人達は本当に騎士志望？

「あれつてもしかして侯爵家のナイト・ファブレじゃない？」

女子つて情報通多いよなーと無駄な感想を抱いた所で納得。だから

こんなにプライドだけ高いのか。

みんな逆らえないから自分が特別だと勘違いしたまま育つ、親の教育が良ければこうはならないと思うんだけどね。

「3人まとめてかかってこいよ」

ゲイトがもはやカッコよすぎる台詞を口にするが、正直止めた方がいい。侯爵つてことで分かる通り優秀な家庭環境下があればどんなに性格が歪んでいても実力はあつたりする。まして相手が3人ならば上級生対下級生でも軍配がどちらに上がるか分からない位のハンデだ。

仕方が無いので俺も立ちあがることにする。

「俺もやるよ、友達に任せたきりじゃ騎士の名がすたる」

しかし俺は気付かれないよう震えるこぶしを握り締める。

…ダメだ、武器がないとさすがに辛い。そもそもこの状況つて3対2？多分俺が戦力にならないから3対1・5位かも。と、状況分析をしていたら思わぬ所から援軍がきた。

「私はこつちに入る、あんた達こそ出て行きな。騎士たるもの他者に優しく自己を厳しく律する者。騎士の地位だけを狙うハイエナは騎士じゃない」

そういつて双剣の女生徒が自分の隣に立った。

「私。ピア・ハルト、双剣士よ。あなた達は？」

そう言われピアという少女にフェイト達は目を向ける。

彼女も金髪だがショートに整えてあり、深紅の瞳は紅蓮を想わせる意志の強さを感じさせる。

小柄ではあるが、それ故にスピードと連携を重視した双剣とは相性がいいのかもしれない。

さすがは騎士学校、1年生なのに既に自分の得手不得手を把握している。

ちなみに、背が低いのに一部分だけ凄い発育してる。腰回りはキュ

ツと引き締まっているものだから、余計にその豊満さや形の良さが分かってしまったため、健全な男子に取っては目の保養でもあるが毒でもある。目がそちらにいかないよう注意しながら

「俺はフェイト・セーブ、こっちは」

「ゲイト・ユンだ。よろしくな」

これで図らずとも3対3のバトルの構図が完成した。…でもここは教室なんだけどな。つかそろそろ先生くるんじゃないか？

と思った瞬間、

「先生、こっちです！」

「お前ら！何やってんだ！！」

のっぴきならない雰囲気を感じてか眼鏡を掛けた生徒が呼んできた。敵めしいハゲたおっさん、もとい先生が教室に駆け込んできた。

騎士学校の教師だけあって身分は元騎士であつたり、ギルドのハンターだったりと猛者揃いの先生がきたのだからひよつこの1年生が束になつても勝てる相手ではない。

…良かった、無駄な争いは起きなくて済んだようだ。武器もないしホント避けられて良かった。

「決闘やるならもつと早く言え！それじゃHR代わりに全員校庭へ出る！こいつらの模擬戦で講義する！」

…訂正、このおっさんダメだ。

ハゲたおっさん、もとい先生の名はギルバード・カクイというらしい。1年間嫌でも付き合うから覚えておかないと。

そしてこの先生の下校庭にてゲイト、フェイト、ピアVSナイト、ストライク、リーの模擬戦が行われることとなった。

…神様を恨みたい気分だ。

さて、模擬戦開始前に2分間作戦タイムを与えられたはいいけれど、どうするか？

「俺はランスで中距離から牽制できる、ピアは？」

「私は特攻が専門。誰かを守りながらの経験はないから正直個人戦闘が楽なんだけど。フェイトは？」

「俺は……今武器がないから正直相手を引き付ける位しか」

あ、二人の顔が苦痛に歪んだみたいになった。なんとかしてフオローしないと。

「ピア、剣を片方貸してくれない？そうすればなんとか……」

「無理、ないと感覚狂って下手したら大怪我しちゃうし。誰か貸してくれないかな？」

ピアが周りの生徒を試み見るのにつられフェイトも見渡してみるとやはり騎士学校だけあって剣の選択者は多い。

「あ、すみません、誰か剣を貸してくれませんか……」

「それは認められん、自分でなんとかしろ」

ピシャリと先生に言われてしまった。…どうしろと？

「時間がない、どうする？」

「これじゃ3対2じゃない、いくらなんでもキツイわよ」

二人が焦ってきてしまっている。こうなればせめて作戦だけでも立案しないと勝負にならない。

「分かった、作戦を決めよう。相手は弓、重槍、剣とバランスがいから下手したら一方的に打ちこまれるかもしれない。だからこっちは各個撃破をお願いしたい。ゲイトはナイトの相手を、ピアは弓の相手を、俺が重槍の相手をする。相性で問題は？」

一応確認のための質問はするが、作戦自体はもう変更しないし出る時間もない。

「俺は問題ないが」

「私も大丈夫、けどあんた大丈夫？」

ハッキリ言えばキツイ。徒手空拳で近接武器最大のリーチを誇る重

槍を相手にするなど体術が余程優れていないと勝機は0に等しい。

「俺がやるのは時間稼ぎが精いっぱいだ。だから二人を信じる、こんな俺のために戦ってくれる二人だからこそ信じるよ」

フェイトはゲイトとピアの目を真剣に見つめ、自身の覚悟を伝える。そして分かったとばかりにゲイトはやれやれと大きくポーズをし、ピアは頷いた。

「さあ準備は出来たかひよっこ連中？それじゃ行くぞ………始め！！」
ギルバードの確実に面白がっている表情から、開始を告げる声が校庭に響いた。

「駄犬如き10秒もいらねえよ！」

ナイトが先陣を切ってこちらに向かってくる。

…迅い。どれだけ嫌な奴であろうが、やはり実力で裏打ちされている者程厄介な奴はいない。

ゲイトが自分達を守る壁となり、ナイトヘランスを振り下ろす、…が剣で受け流され更に間合いを詰められる。

だが、ゲイトも訓練を積んではきているようでそう簡単には懐に入らせない。すぐさまリーチを戻すためバックステップに合わせてランスを振り払い、追撃させないようにする。

単純ではあるが、ランスの特性を上手く活かして立ち回っている。

一方ピアは重槍士をあつさり迂回し弓兵へと迫る。矢がいくつも雨のように迫るが、ピアの優れた動体視力、卓越した反射神経により当たりそうな矢を全て弾き返して進む。

（俺もこうしちゃいられないな）

重槍士がゲイト、ピアどちらかに加勢へ向かうだけで戦局は一気に傾いてしまう。それを阻止するのが自分の役目だ。

重槍士を引き付けるためだけ、そう言い聞かせ自分に加速の魔法を弱めにつけ、その上で重槍士へ突進。

自身の速さからの体術では勝ちはないが、無視はできない。それ位で十分だったのであえて目立つ攻撃魔法や優秀な補助魔法は使いたくない。

重槍士はこちらを迎え撃つように、そのリーチと重量から有利な一撃を繰り出す、がフェイトは回避。

続けて流れるようになぎ払いが来るのでわずかに射程範囲外に下がり、払い終わりに懷へ飛び込もうと試みる。

だが、勿論許されるがままのわけもなく斜め下よりの重槍の払いが跳躍を阻む形となり、重槍士の懷への侵入は失敗する。

（これでいい）

辺りへ目を配つてみると、見た所ゲイトが防戦一方で騎士剣使いのナイトとの実力差があり、今にも破られそうな程押されているが、ピアは雷光かの如くもう弓兵の目前まで迫っている。
これならいける。

問題はこの後だ。ピアの実力は1年生とは思えないほど卓越しているが、ナイトも負けてはいなさそうだし、はたしてタイマンで勝機を見いだせるだろうか？

ゲイトには悪いが、ゲイトでは直に破られる。その時ナイトの相手を自分とピア、どちらが相手すればいいのが問題だった。

武器さえあれば、自分も戦える。…それが本当に悔しかった。

一応武器ならもうすぐ手に入る、ピアが弓兵を無力化した後、弓をこちらへ持つてきてくれるだけでいい。

だが弓では扱った経験が少なく、ハッキリ言って不得手なため今より牽制がマシになる位にしかない。

本当に今更ではあるが、発端となった自分の愛剣さえ手元にあれば

- - -

頭の中に雑念が数瞬、数刻とよぎり始める。と、その戦闘中に生じた致命的な隙を捉えられた。

「スキありいいー！！！」

真正面から重槍の渾身の突きが飛んでくる。

やばいやばいやばい、直撃したら冗談ではすまない死のレベル。
死神が大きく口を開けフェイトの命を飲みこもうと――

キーン！

目の前の槍が何かに弾かれ軌道が大きくズレた。

おかげで顔の横を突く形となり死を逃れることができた。

しかしなにが？

音がした付近を見ると、深紅の剣。ピアの紅蓮の剣の片割れが地面へと突き刺さっていた。

ピアの方を見てみると既に弓兵を無効化した後のようで、こちらに目を配った瞬間に剣を投げて助けてくれたのだらう。

嬉しくて涙が出そうになる。こんなついさっき知り合ったばかりなのにキチンと見て助けてくれた。誰かを守ったことがないなんて言いながらも。

だからこそ、応えなくちゃならない。

「ピア！ありがとう！！」

ピアの方へ視線だけ向けながら、剣を回収しに地を滑るように走る。
ピアはかすかにだが、安堵したような表情に見えた。なんだかんだでお人よしなのかもしれない。

さあ、応えよう、仲間への感謝を！

剣さえあれば何とかなる。

問題は自身の力、強い魔力を伝えてしまったため並の剣では一撃で碎けてしまう、仲間の大切な剣を壊しては決してならない。

フェイトは地に刺さった剣を握ると同時に振り抜いた。この疾走そのものを、攻撃のエネルギーと変えるような一撃を背後も見ずに確信を持って振る。

そこには既に引き戻された重槍が狙っていたからだ。だが、剣が手

に入った以上もう問題ない。

魔力を加減しながら、それでも絶対に成功させるようギリギリの極致での一閃を繰り出す。

「ハアッ！！」

裂帛の気合と同時に振り抜いた剣は切り裂く感触を感じずに空へと舞った。

もしフェイト以外が同じような一閃を繰り出していたのならば、剣が空を切ったと錯覚するだろう。

しかし感触は感じなかっただけで、現実の事象はきちんと起こされていた。

音もなく中程からきれいに切断された重槍は、もはや見ただけで使えない物にならないと分かるほどのダメージを負い、重槍士の戦意を喪失させた。

そして観客にどよめきはしる。自分の武器さえ持ってきていない非常識な新人生が、騎士顔負けの斬鉄を行ったのだ。

これには先生であるギルバードですら目を瞠った。

「ピア、ありがとう。返すよ」

剣を受け取り易いように投げ返すと、ピアは条件反射で受け取るが目をパチクリさせている。

「ピア！ボーっとしないで！ゲイトを助けなきゃ！」

その言葉にピアは数瞬の遅れを取り戻し、ゲイトを助けるべくナイトへの挟み打ちを決めた。

その後はもう一方的だった。3対1の上で、もともとピアが実力で競っていたためこれにゲイトのランス、攪乱の自分の体術が入れば防戦からの反撃を許さずに勝ち切った。

「勝負あり！」

ギルバードの高らかな宣言により、ここに決着がついた。

友人

「フェイトすごいじゃない！」

模擬戦が無事終わり、ピアがフェイトに称賛をかけてくれた。

「いくらなんでも斬鉄なんて無茶苦茶な技術、一体どこで身につけてきたのよ？」

ピアにとってはそれが一番気になっているのだろう。剣技として斬鉄の難易度自体は高くはなく、早ければ2年生でも習得している者もいる。

ただし、実践で相手の武器を切断するという離れ業は最上級生が最下級生相手に10回に1回成功するかどうか位だ。

「おいおい、フェイトもし自分の剣持ってきてたら3対1でも蹴散らせたんじゃないか？」

ゲイトが気さくに話しかけてきてくれるが、フェイトはあいまいに笑って誤魔化した。

実際の所、斬鉄自体は出来るが、先の斬鉄は厳密に言えば斬鉄ではない。

フェイトは巧妙にカモフラージュしていたが、実際は魔力で切断したのだ。

普通なら金属のすれ合う甲高い音もするはずが、無音で切り裂いたのが何よりの証拠でもある。

原理としては、ピアの剣にはもともと「炎」が宿る剣のタイプであり、フェイトはそれを活性化させて熔解に近い形での切断を行っていた。

剣自体の炎熱と、擦るような摩擦熱を加えて断面が熔解したように見えないよう偽装。

傍からみれば斬鉄だが、実際は溶かして切断した斬鉄もどきの出来上がりという訳だ。

ただし、ギルバード先生には見抜かれていたかもしれない。教師が魔力の発動に気付かない訳がないし、音が聞こえなかった事にも注意を払っていれば原理も見抜かれていただろう。

フェイトが何故ここまで魔法を使うことをひた隠しにしているのかは、魔法技術が高ければ高い程魔法学校を薦められるからだ。騎士、魔法師とどちらも人気があり華もあるが、それでも将来性を期待されるのは魔法師だからである。

国としては優秀な騎士よりも優秀な魔法師の方が欲しいという事もあり、予算も騎士学校より魔法学校の方が潤沢という事実もある。まして飛行魔法が使えるとなれば即実践投入やら、研究所へ送られる等学生とは無縁の活動を強いられてしまう。

それではダメなのだ、自分はあくまでも騎士を志望し自分だけの姫を生涯かけて守ると決めたのだから。

「よし、それじゃHR開始するぞ。今の模擬戦を見ての通りこっち側、あーっとお前ら名前なんだ？」

思わずクラス全員がずっこけかけてしまった。そういえば、自己紹介もなしに校庭に連れだされたら名前なんか分かるわけもないし。

「フェイト・セーブです」

「俺はゲイト・ユン」

「私はピア・ハルトです」

「という訳でフェイトチームの作戦は功を奏した訳だ。一人バカみたいに素手であるからにはよほど策を相手に上手く嵌めないと今見たいな結果は得られないから、気をつけろよ」

何故かダメだしをされてしまった。しかもあきらかに自分の事を言われている。

「一方実力で言えば総合実力が大体同じ位だったから、明らかにナイトチームは作戦が悪かった」

あ、ナイトは知ってるんだ、さすが侯爵家。先生も覚えてくる位大

事なんだ。

「本来であればナイトも中盤に残り2・3でフェイトチーム全員を抑えた上で、弓を活かすのが作戦としては正解のはずだ。それを無視して自身の力を過信し無茶をするからチームのバランスが崩れ結果負けた。お前らもよく胸に刻んでおけよ」

やはり教師だけあって指摘も的確だし、何より解説が分かりやすい。これは当たりの先生だったかな？とフェイトが思っていると。

「負けた方のチームは校庭20周、ほらさっさと行ってこい。休むな」

…訂正、スパルタだ。これは目を付けられたくないな、とクラス一同内心で冷や汗をかいた。

青空教室でのHRも終わり、解散となったと同時にフェイトの側に人垣が出来てしまった。

「ねえねえ、さっきの斬鉄でしょ？もう1回見せて！」

「すごいな！あれだけの剣技は見たことがないよ、君フェイトだった？ここに来るまでは何を？」

「ねえ、そもそもなんであれだけ出来るのに剣を持ち歩いてないの？」

などとすごい有様になってしまった。

邪険にしたくはないが、まずはチームメイトに挨拶とお礼をしたいので何とかかわすことにした。

「斬鉄はまぐれだよ、それに練習だってそこそこだし、剣は事情があつて預けてあるだけだから。つとごめん、俺あの二人と話したいから今日はここまでで勘弁してくれ」

すると質問に答えながら、人垣を泳ぎきるとゲイトもピアも待っていてくれた。

「よっ、意外に早かったな」

「ヒーローインタビューだし、もうちょっとなら待ってたわよ?」

などと軽口を言ってくれるのだからありがたい。

「勘弁してくれよ」

初日からいい友達に巡りあえた。

「そうだ、ピア剣は大丈夫?壊れてない?」

フェイトとしては魔力を加減したので壊していないと思うのだが、それでも心配で尋ねてみた。

「ああ?ブランムルジュなら大丈夫よ。あの後自分でキチンと確認したから問題ないって断言できるわよ」

「良かった。助けてくれた人の剣を粗末にしたらバチがあたっちゃうからね」

言い得て適度に話をずらししているが、本当は魔力による損失が気になっていたので、無用な心配だったようだ。

「しかしあいつ意外と強かったぜ、フェイトが斬鉄した所は見れなかったがピアもフェイトも来てくれなかったら後10秒持たなかったな」

そういつつ右手首を少し気にしているのは、少し痛めてしまったからだろうか?ゲイトには初日から悪いことをしてしまった。

「ゲイト、騎士として礼を言っよ。騎士フェイトの誇りを守りてくれた感謝をここに示す」

騎士学校にいる騎士志望の者が何を大切にしているか?それは騎士としての誇りに相違ない。

誰もが騎士として決して挫けず、心を強く持ち、信念の剣を振るうことを何よりの誇りと思っている。

それを守ってくれたのだから、騎士として一番嬉しい答えで礼をいうのは当然だ。

しっかりと腕を伸ばし胸の前で敬礼する。

「照れくせえ、でも騎士ゲイト・ユン、騎士フェイトの言葉しかと胸に刻もつ」

同じように腕を伸ばし、胸の前で敬礼することでゲイトも感謝に込めてくれた。

「あー男って格好つけたがるわよね…」

ピアが入学そうそう、騎士の礼などという格好つけの儀を見せつけられれば多少なりともげんなりするだろう。

「だってそのための騎士だもんな」

「な」

「ハア……」

悪乗りこそあったが、この感覚こそ騎士を目指すものの誉なのだから、格好つけても何でもやっておきたい。

それに、ピアだって騎士志望で入学しているのだから、表面上はどう繕っていても本心では羨ましかったに違いない。

今日は帰りに時間があったという事で、三人は近くのカフェへと足を運び親睦を深めようということになった。

「ピアも寮なのか」

「そうよ、ここの学校の双剣部凄く強いんだから。女子の最上級生クロ先輩を筆頭に、男子のホライズン先輩、後去年1年生で今年2年生のエース、キャロル先輩と全国TOP3の騎士がいるのよ。それなら寮に入って少しでも多く技を盗みたいじゃない」

「熱心なもんだ、俺は単純な憧れで来ちまったからな。騎士学校の最新鋭ナイツオブラウンドってネームバリューにな」

「だからあんたみかけに反して弱いよね」

「な、なんだとお！」

話している内に思ったのが、ピアは意外とサバサバした性格で物怖じをしないため、熱くなりやすいゲイトといると何かと声が大きくなる。

とはいえ険悪になるわけでもなく、ただ意見をぶつけあったり、考えが対立するだけなので特に問題はないと思う。何より見てる方は面白い。

「んで、フェイトはなんでこの学校に？」

こちらに話題がシフトしてきたようだ、特に隠す必要もないので正直に答える。

「俺は俺だけのお姫様を探すため、騎士になる必要がある。そのためにここに入学したんだよ」

と、やはり予想した通り訝しげな、というより憐憫に近い反応が返ってくる。一応予想はしていたので特にダメージはない。……ちょっとはあるけど。

「姫様を守るため？…まあそりゃ騎士として王道だけどよ…。でもその姫様も決まってるないんだろ？知り合う宛てとかあるのか？」

ゲイトの質問はもつともだろう。現実姫様がいる国は50国に満たないのだ。

それにそもそも騎士になれたとして姫に会えるかは運にしか左右されない。

「いや、宛てとかはないから在学中に学びながら探そうかと思ってるんだが？」

とはいえ、これほどの無計画を話せばいくら気のよい友人でも呆れるため息しか返ってこなかった。

「…うん、そんな街中歩いてたら姫様がいて、偶然助けて偶然知り合えてお近づきになって、そして私だけの騎士様になって！というストーリー。……そんなラブコメみたいな話あるわけないでしょ！」

ピアに盛大に突っ込まれてしまった。

おかしいな、自分としてはなんとなく会える気がしているのだから、やっぱり運命ってあると思うし。

「フェイト、敢えて聞くがその会いたい姫ってやっぱり『グランドプリンセス・ユキ・アヴァロン』か？」

「グランドプリンセス」、この世界で誰もが認める至上の姫の事を

指し、その美貌は男ならば敵意を持つことも許されず、女性ならば同性としてただ恥いるばかりとまで言われている。

国の行事にも積極的に関わり、いくつもの国政に発言をし纏めてきた有識者でもあり、決して差別を行わず常に弱者の女神として味方してきたといわれ、良い所を枚挙するに1時間は固い。

ただ、フェイトも勿論知ってはいるが、別段彼女に会いたいとは思っていないかった。

「いや、グランドプリンセスにも勿論会ってみたいけどさ、彼女の側には既に騎士王がいるだろ？多分そこに割り込むって程無謀はしないし、割り込んだら悲しませちやいそうだし」

そう、この至上の姫にはもう仕えるべき忠義の騎士がいるのだ。

騎士王アルト・アヴァロン。名前の通り既にグランドプリンセスと婚姻を交わした正式な夫でもある。

騎士時代から当時の王に重宝されていたアルトは、自然ユキと親しくなりユキの心の支えとなり、彼女を裏で支え続けている。

さらに御前試合でも無敗を誇り、ドラゴン殲滅の討伐軍指揮も採ったと言われ、一人でドラゴン10匹を打ち取るという離れ業を成し遂げ、味方の危機を何度も救ったのだとか。

そして王家への忠誠は微塵の揺らぎなく誓われ続け、宝剣エクスカリバーを承継したと言われている、まさに騎士王だ。

「騎士王アルト様。憧れるわよねー、私も騎士志望だけどあの方が自分に忠誠を誓ってくれるなら私も姫になりたいわー」

あのサバサバしたピアにすらここまで言わせるとは騎士王、恐るべし。

いや、ピアが乙女に興味ないって前提で話してるから、ここまで言わせるって考えはかなり失礼なんだけどね。

「ふーん、ってなると本当に街中で探すのか？本当に宛てないのかわ？」

ゲイトはゲイトなりに心配しているのだろう。

事実フェイトの言葉を白昼堂々言っていれば唯の頭の痛い人に違い

ない。今日会った友達だからこそ言葉を選んでくれているのだろうが、一歩間違えればバカだろ、で一蹴されそうでもある。

「一応面識はないけど、調べた限りだったので宛てといえは宛てはあるよ」

ピアも妄想の世界から丁度帰ってきてくれたので、二人は同時にフエイトに注目する。

「まず、至高き音色の歌姫・ディーバ、氷上の舞姫・ユキ、ファッシオン界の姫・マリア、巫女姫・シキブ、それに魔法学園プリンセス・レナ、騎士学校騎士姫・アマリス。この位かな」

とここまで一息で語ってみたのだが、隣と対面にいる二人からはポカンとした表情がこぼれ落ちていた。

「…どうした？」

不審そうにフエイトが問うと二人は顔を合わせこちらに言葉を出す。

「「おまえバカだろ」」

結局その後、フエイトが二人に抗議する形で様々な話を織り交ぜ聞かせたが、二人はさしたる興味も示してくれずしばらく後に解散となった。

二人は決してフエイトを否定した訳でも、これまでの縁だと見限った訳でもなく、フエイトの節操のなさ、そして無駄に特化した情報網、そしてその中の数人は世界的に有名だったりするため、単純な高嶺の華に無謀に挑む功を焦ったバカにしかみえなかったためである。

一人自宅へ帰る道には既に夕日が射しており、少し屈んだ背に一層の哀愁を感じさせる。

「はあ、無謀だって思うよな」

確かに挙げた人物の中に一人として知り合いはいない。そもそも多忙なため世界中を飛び回っている人も多く、居場所の見当すらつかない人もいる。

「でも俺にとつては夢であつて、人生なんだ。…誰になんと思われよう、絶対諦めないからな！」
そう誓いを新たに、フェイトは明日から行われる新入生レクリエーションの事を考えながら帰宅した。

レクリエーション

家に帰ると自分より小さな、でも自分と同じ新品の革靴が玄関にあった。

「ただいまー」

この時間帯で返事が返ってくるとすればただ一人。

「お帰りーお兄ちゃん、学校楽しかったの？今日帰り遅いよー」

パタパタという可愛らしい足音とエプロン姿で出迎えてくれた女の子は、妹のアイリス・セーブだ。

鶯色のショートヘアーが兄妹としての共通点でもあり、実際は二卵性でもあることから目鼻立ちが似ている？と疑問符を付ける程でしか似ていない。

ちなみに小柄な背丈に違わず顔も幼い。

「ああ、初日から仲の良い友達が出来てな、模擬戦までやったもんだからその後話していたんだ」

よしよし、と頭を撫でてやると妹は嬉しそうに微笑む。

背は小柄な方で170cmちよつとのフェイトからでも、手を伸ばせば丁度頭が撫でられる高さでもあり、自然と頭を撫でてしまう。

妹のせいだと思うが、妹が小さい時から撫でているのが癖で自分より小さく可愛いと（猫とか犬とか子供とか）つつい手を伸ばして撫でたくなってしまうのだ。

…癖とは恐ろしい。

ただ、撫でられている途中で気づいたのか、妹はこちらに質問を投げかけてくる。

「お兄ちゃん、なんでいきなり模擬戦なんかやってるの？うちの学校そんな血気盛んな人、一人もいなかったよ」

妹とは双子であり、フェイトは騎士学校、アイリスは魔法学校とここで初めて進路が分かれたのだ。

小学校、中学校共に同じ学校、同じ学年で一緒に過ごしてきた2人

だからこそ初めての別学は兄であるフェイトですら少し不安になった程だ。

それでも妹は騎士学校に行く事を嫌った。
ちなみに理由は、「騎士みたいにバカげた体力なんかないから」だった。

学力はそこそこ、幸いにも魔法の才能もあつたみたいで入学試験は中の上程の成績で入学できたそうだ。

得意魔法は4大属性の内の水魔法と炎魔法。本来逆の属性のものは苦手なハズなのだが、両方とも得意という珍しい型でもある。

強いていうならば、血液型がA B型のRh⁻、そして利き腕が両利きという所だろうか？

ただし珍しい型でもあり、実践も出来ている方だが学力が及ばなかったため成績は中の上ということだ。

本人曰く、「理論じゃなくて、感じるの！」だそうだ。

「こつちだつてトラブルに巻き込まれたからだ、他のクラス、他のクラスメイトは断じてやっていない」

「それ自慢にならないよ…」

大人しく撫でられたままであるが、アイリスは少し呆れているようだ。

手をどけてやると、こちらを見つめまた話しかけてくる。

「今日の夕飯当番は私だからね！期待しててね！！」

ビシッ！という擬音を立てる位の勢いで指をこちらに突きつけるが、特に相手せずスルーして通り過ぎる。

「さて、コンビニ行つて買つてくるよ。父さん達の間も買ってきた方がいいよな？」

「お兄ちゃん話聞いてた！？」

憤慨の意を示し、瞳が怒りと涙で染まっている。

それでもいつものことと、フェイトは全く持つて取り合わない。

「じゃあ三人分だな。金は…げっ無い」

ポケットから財布を取り出し中を確認すると、お札がなく小銭のジヤラジャラした重みだけが財布の大半を占めていた。先ほどのカフェで結構使っていたようだ。

…しかし問題だ、自分の部屋にある積立貯金を切り崩すべきか？もしもの時のために貯めてきたお金だが、今日、今この日この時こそ、その迫る時なのかもしれない。

「はーなーしーをー聞けえー!!」

と、ここまで大声を出されては無視するわけにもいかない。やや諦めた表情で振り返ると、既に怒りよりも、涙しか見えない苛められた小動物の瞳になっていた。

「ごめんごめん、意地悪してる訳じゃないんだ。世界一愛している妹を苛めるなんてことはしないよ。でも今のは苛めてるんじゃない。て事実からさりげなく遠ざかり、自身の生命の危機を回避するための…」

「だから聞いてってば!!」

言い訳(?)もそこそこに話を切られたので、アイリスの話を素直に聞く。

「今日は確かに当番だけど、入学式で疲れてるだろうからお父さんがシチュー作ってくれて、タコのサラダももう出来上がってるの。だから当番っていつでも温めるだけだから大丈夫!」

そこまで聞いて、ようやくフェイトは息をつくことができた。

ここまでの流れから分かるように、妹は超絶的な料理オンチである。カーボンを作るのは当たり前、ゲル化したものや虹色に輝く料理を食卓に出された時は顔が恐怖で引きつった。

普通そこまでいけば才能が欠如というより凹んでいると諦めるものだが、意外な所で負けず嫌いを発揮し、その結果料理の挑戦を続けるという最悪なパターンに陥った。

既に2年、週に1回だけ当番として料理を作っているのだが、一向に上手くならない。いや、それどころかドンドン独創的になってき

ている。

塩化ナトリウムとクエン酸のコーゲン煮込みは名前こそ直訳すれば塩レモンの豚肉煮込みという平和（？）な名前だが、実際は水酸化ナトリウムと硫黄の豚足煮込みであつたため、食わずに廃棄した。
- - 豚さんごめんなさい。

臭いを通り越して異臭、異臭を通り越して激臭を放ち、意識を保てたのが不思議な位だ。

：ちなみにどこで調味料が化学薬品に変わったのかは、追跡調査を試みても判明しなかった。

「じゃ温めるだけだし、俺がやるよ」

「なんで！？聞いてなかったの！？当番は私だよ！」

涙目ながらに訴えてくる妹、既にこのやり取りは何度目だろうか？

「アイリスはお皿を出して盛り付けて。それだけでいいから、というよりそれ以外やらないで」

兄の懇願について根負けしたアイリスは、不承不承ながらも承諾し、

「じゃあお皿並べてるから、早く着替えてきてね」

そう言つてようやく今日の夕飯の安全は守られたのだった。

両親がまだ帰ってきていないため、二人きりでの夕食だったが共働きが珍しくない現代では特に寂しがることもなく、チャキチャキと後片付けまで済ませ2階の自室へと戻る。

部屋で特にやることもなくノンビリしていたが、トントン、という規則正しいノックにより静寂とだらけが適度に散らされていく。

「お兄ちゃん？ちよつと練習に付き合ってくれない？」

魔法学校に入る時からおなじみとなつている魔法のトレーニングには、いつもフェイトが付き添っていた。

可愛い妹が事故に遭うのが怖くて付き添ったのが最初で、それ以来アイリスは一人では瞑想以外やらなくなっていた。

もう十分に一人立ちも出来るのだが、結局はその奥にあるコミュニケーションの機会と、兄に甘えたいという心が見えているので、フエイトは付き添いを辞めることはなかった。

「分かった、先に庭に出ていてくれ」

ハーン、という可愛らしい声と共に階下へ降りていく足音が伝わってくる。

フエイトは雑多な気持ちを切り替え、ジャージを羽織ると甘えたがりな妹が首を長くして待っているだろう庭へと向かった。

「今日はどうする？」

「あのね、今日は飛行魔法をやってみたいなって」

これにはフエイトも面を喰らってしまった。

確かに練習自体は誰もが通る道だが、それでも通常はもつと経験を積んでからである。

厳密に言えば魔法学校の最上級生である、5年生になってからだ。

いくら魔法学校に入学したからとはいえそう簡単に許可は出せない。

「だめだ、お前にはまだ早い。他にも色々あるだろう、例えば炎と水の出力調整とか、土、風魔法の練習とか」

「だって魔法学校に入学したんだよ？それに実技だったら私結構自信あるもん」

いつもにはない珍しさで食い下がってくるが、断じて認められない。「だめだ、そもそもアレは実技もそうだが理論を理解していないとなおさら難しい。俺だって最初から空が飛べた訳じゃないんだぞ？空気中の元素の理解、風の機嫌、何より高い魔法出力と精密なコントロールが求められるんだ。お前には出力以外足りているとは思えん」

妹の場合火属性と水属性が得意なため、魔法出力において飛行すること自体は難しくないだろう。

だが普段の練習を見る限り、コントロールはまだ荒いし学力も乏しい。

飛行魔法の練習は魔法師の資格を持つ者が指導に当たるのが本来望ましい程のレベルなのだ。それは妹だって理解しているはずなのに

――

「もういい！勝手にやっちゃうから！……エイツ！！」

そう掛け声を発すると共にアイリスの体が地面から浮きあがり、フエイトが手を伸ばした瞬間には目の前にいたはずの、小さい妹は加速して宙へと上昇してしまったのだ。

「アイリス、バカ！やっぱり制御できてないじゃないか！」

本来最初からあんなに加速する訳がない。それは想像力と精神の未熟さ故出力だけが先走ったせいで、加速に比重が大きく乗ってしまっているのだろう。

「……くそっ！飛べっリリアウト！！」

自分も最大加速で飛ぶが、思ったより妹の加速が早い――距離が一向に縮まらないのだ。それに焦っているせいでアイリスは風のバリアも張っていない。夜になって昼よりも寒い上空では体温が急激に冷え、何より酸素も薄いためいつ意識を無くしてしまうか……

何より酸素も薄いためいつ意識を無くしてしまうか……

「アイリース！！！」

まだ自分より上にいるアイリスだが、飛行魔法による加速が落ちてきたため上空で捉えられると確信した。

しかし、それは同時にアイリスの意識が混乱してきてしまっている証拠だろう。

「アイリス！意識はあるか！？あるならまず呼吸を整えろ！」

まだアイリスと距離があるため手が届かない。それまでに0.1秒でも早く苦しみから解放してやりたいため、言葉だけでもアイリスへ届ける。

……と、言葉が届いたのかアイリスの不安定だった姿勢も戻りつつあり、風のバリアも未熟ながら形成されてきている。

態勢さえ整えてバリアにより外気を遮断できれば、ひとまずは安心だ。

すぐに追いつき、妹を抱きかかえる。

そして急ぎ妹の表情を確認すると

「えへへ、お兄ちゃん私飛べたよ」

そう満面の笑顔でこちらに答えたのであった。

一瞬、ほんの一瞬だけ褒めてやるうかと思った。

だが、フェイトは容赦ない拳骨を妹の頭へと躊躇なく振り下ろした。

「い……いっつたーいーいー！！お兄ちゃんヒドイ！！」

なんと言われようが、妹が悪い。確かに最後自力で僅かだがコントロールできたのは褒めてもいい。

ただどその前から見ていれば命を落とす寸前でもあったのだ。むしろ拳骨で済ませたのはまだ穏便だと誇ってもいい。

「無茶ばかりだ、お前はここ一週間の魔法訓練を禁止する！」

何とか無事に妹の救出にも間に合い、フェイトは地上へとゆっくりと高度を下ろしていく。

だが、腕の内に収まった妹からは文句が嵐のようにとんでくる。

それは全て風の鳴き声のように耳からすり抜け、フェイトには届かなかった。

「うう、ごめんなさい」

結局地上に無事戻った後もフェイトによる説教が20分程続き、アイリスの方から折れた。

「分かったか？飛行魔法はとても難しい上に俺はお前が心配なんだ。だからこそその厳罰なんだ、ちゃんと理解したか？」

同じようなことを既に10回以上も聞けばそんな念押しが無くてアイリスには分かる。

「ごめんなさい、お兄ちゃん。ちゃんと約束は守って一週間訓練しないから……一週間経ったらまた訓練に付き合ってくれる？」

寂しげに、そして不安が入り混じった瞳でフェイトを見上げるアイリスに、フェイトは優しく微笑みかける。

「当たり前だ、お前は俺の大切な妹なんだから。お前が望むんなら

多少の無茶以外は聞いてやるさ」

多少の無茶に飛行魔法が含まれない事は重々分かったので、アイリスも素直に兄に甘えなおした。

「ありがと！あと、さっき助けてくれたのもありがとう」

入学式という大変有意義な1日は、家に帰ってからイベントを巻き起こしたようだが、ようやくその長い1日にも夜闇と星屑が回り、終わりを迎えたようだった。

翌日新入生である自分達は学校へと向かっている。上級生はまだ春休みのため学校に顔を出している者は極僅かであろうが、新入生である自分達には通称洗礼と呼ばれる程のしこきが待っている。

まずそこで先生方は生徒の実力を測り、個人個人に合わせたトレーニングやカウンセリングにのっとりして実力を伸ばしていくのだ。基礎体力が欠けているようであれば、素振りの時間等を大幅に減らされひたすら走り込みをやらされたりする。

反射神経が劣るならば近距離ノックを受けたり、電流を流されたり等理に適ったトレーニングが選択されるが、稀にどれもが平均的であつたり全てが突出しているような生徒がいるとそれは教師陣から注目の的となる。

将来的にどれだけの大輪を咲かせられるかが教師に問われるからだ。平均的であればどれもが伸びる可能性があるのですが、これからの成長幅次第で優秀な騎士を排出することも、そして突出した天才や秀才がいるならばその才能と努力を殺さずに伸ばさなくてはならない。

これこそが教師の質が問われる物で、この洗礼と呼ばれるデータ測定的全データは教師陣ならば誰でも閲覧できるし、その成長が悪いようならば教師人生が絶たれてしまうことだつてある。

ナイツオブラウンドは私立であるからこそ、生徒にも教師にも結果

が求められる。

だからこそ、この後者の部類に属してしまうと、普段鍛錬の質が厳しくなりがちである。もっとも厳しくして辞めたとなった場合は教師の責任ではない、という暗黙のルールが占めているのでスパルタの温床になりやすい。

話を戻すと、フェイトは魔法こそ使え剣技も拔群だが他の体術や体力、敏捷性に反射神経に動体視力等は良くも悪くも平均的である。目立ちたくないので剣技をやや控えめにしていた所、この洗礼による計測データは平均値に近い値を示してしまったのだ。

例えではなく、丸1日ばかりで計測という名のしごきを受けた1年生全員は、明日の登校を拒否したがるものが全体の9割を占めていると言ってもいい。

何故なら教室に置いてある荷物を取りに行こうと考えても体が動かないのだ、疲労過多で。それもクラス全員というより今いる1年生ほぼ全員が校庭で倒れたまま動けなかった。かろうじて側にいたゲイトにフェイトが話しかけてみる。

「なあ、これ知ってたか？……洗礼」

ゲイトは体力には自信があるらしく全体から数えても優秀な位の人数の割合で倒れてはいない。だが、そんな彼でも立つことは出来なかったようだ。座ったまま目を虚空にさまよわせて答える。

「……ああ、噂でな。初日の洗礼が終わって家もしくは寮に帰れた人物は学年で1人いればいい方だつてな。そして立つことが出来た生徒もそりやすばらしい努力か才能を持っているとか」

ゲイトとしては悔しい所だろう。体力に自信があったため最低でも洗礼終了時に立っていたい、そう思っているハズだが足は石がコンクリートにセメントでガチガチに固定されたかの如く張り付き、例え今この場で暗殺者にナイフを振り下ろされようと、決して回避できない位精神力を振り絞っても無理だった。

「足に50kgの重しを片方ずつ、計100kg。それで砂丘ゾー

ンの制覇が第一課題。その後と同じ条件で水泳を10km。それが準備運動だっけか？」

思い出すだけでも恐怖で意識が遠のきそうだ。何せ小型だがサラマNDERが後ろから追っかけてきたり、獰猛なホオジロザメが解き放たれる等下手したら命にかかわる所業である。

現に今日で病院送りになったものが100人は超えたはずだ。他には騎士を廃業せざるを得ない怪我を負った者も数名でたとか。

教師もフォローに入るが（当然だろう）カバーしきれずやむを得ない状況で後ろから追いつかれ、食われたり焼かれたり。

もつともそういう危険を本当に解き放ったからこそ、走破しなくては自分がそちら側になったかもしれないのだ。

だからこそ本当はフォローが間に合ったのかもしれないが、わざと犠牲者を出した、とも考えられる。

勿論推測だが、そういった下の下を切り捨てても上を目指さなければならぬのが騎士でもあるからだ。

みんな仲良くゴールは出来ない、持って生まれた才能と環境、そして決意をした時からのたゆまざる努力こそ今日この日の準備運動の結果であらう。

「んで、準備運動が終わったら闘魂注入だっけ」

教師によるストリートパンチである。避けれるならば避ければよし。避けられないノロマはそれこそ喝をいただけるのである。

……ちなみにこれもきちんとした計測の一部に含まれているのである。

「次は植物モンスター園か」

もうそろそろ思い出さなくなってきた。

恐らく数百体はいるであろう食人植物の中からターゲットの植物モンスターを見つけ、ペイントしてくるのである。

鬼門だ、何が難しいかと言えば回りがモンスターだらけ、それも同種族だから見分けが付きにくいから判断力と集中力、それに記憶力

や仲間との連携等が試される。

「次はアースクエイクか」

端的に言えば力試し、だが基準値に満たないものは何度でもやり直させられるので地獄だ。最初に決めないと体力を使うし力も落ちてくる。

ただし何でもありなので屋上からダイブして力を底上げたバカもいたらしい。

これだけの苦行でもまだ午前中だから驚きだ。

ゲイト、ピア共に午前中のうちは言葉少なになりながらも一緒に回る元気もあつたが、午後からは既に亡者だかゾンビだか分からないような状態で這いまわらされた。

ピアともゲイトともその内にはぐれて、今終わって教師陣に放り出された所偶然ゲイトが傍にいたのだ。

「……とりあえずお疲れ、よく生き残ったお互い」

「……ああ、ピアも最後の方に1回見かけたから、多分今この校庭のどっかにはいると思うが」

首を動かして辺りを伺うゲイトだが、ピアらしき人影は見当たらなかったようだ。

「俺もう寝るわ」

そついい残しフェイトは眠りに落ちた。

気絶に近かったのかもしれないが、ここが校庭でシート一枚ないことも地面が砂地であろうと構わなかった。とにかく疲れた、その一言に尽きる。

「そつだな、俺も……起き上がれねーし、寝るわ。おやすみよ」

仲のよい2人はそう言い残して、深い深い眠りについた。

「これは驚いた」

そう言った教師の1人が見ているデータは、とある1年生のものだ。

「ほうほう、自力で歩いて寮にまで帰れたのか、いや大したものだ。前年も前々年も出なつたのだが」

こちらの少ししわがれた声の教師はいつになく面白いものを見つけ
たように、ひょうきんな声でこたえる。

「ああ、何故私のクラスじゃないのかしら。私とならきつと息がピ
ツタリでしょうに」

妖しく唇を舌で舐める女性教師に、少し震えながらも男性教師が答
える。

「い、いえ、規則ですのどうか落ち着いて」

そんな気弱な男性教師を横目に、黒衣の教師が言を発す。

「俺のクラスとは運がいい。……飛び級させてやるさ」

妖しさを超えた闇に近いような声音はその場にいた教師陣の1人を
除いて、戦慄におののかせていた。

「分かつちやいねえな、本当の有望株は……」

筋肉質の男性教師は今年1番の成績の生徒には全く興味を介さず、
ある1人の生徒だけを見つめていた。

「フェイト・セーブ、お前は何物だ？」

騎士学校

翌日校庭で目を覚ましたフェイトは鉛のように重い身体を何とか起こしてみた。

「う……つてえ。足も腕も全身が力チコチだよ」

うつかり伸びをしようものなら筋肉がみしみしと嫌な音を立て、体中を激痛が走る。

「なんとか、立てそうか、な。よつと」

まだ全身が悲鳴を上げそうだが昨日の立つことすらできない状態に比べれば随分まともになったとも言える。

まだ空は白み始めたばかりだが、回りも朝練を欠かさない人達が多かったらしく目を覚ましている人物は思ったより多い。

とはいえ、誰もが立つのがやつとで少しばかりは歩けるのだろうか素振りを出来る元気が残っているものはいないようだ。

と、隣を見るとゲイトも目を覚ましたようだ。

「ん……もう朝か。ふわぁまだ眠いし痛いぜ」

自分と同じようにまだ寝ぼけていそうな友人に声をかける。

「おはよう、俺より少しだけ寝坊だな」

気安い笑いだだが特に気にする風でもなく、よお、と手を上げて応えるゲイト。

「体はつと、うん動くな。朝練は無理そうだが」

そう言つて立ちあがるゲイトはフェイトよりも幾分余裕がありそうだ。

「んー！つとさてどうするか？まだ学校が始まるまで時間があるけど？」

体を伸ばしながらこちらに目をやるゲイト。訂正、こいつやっぱり体力あるわ。

「俺はとりあえず教室に戻るかな。教室までいけば替えの服もあるし空調も効いてるだろうし」

「だな、なら行くか。フェイト歩けるか？」

ゲイトの言にフェイトは不遜な態度で応える。

「余裕だよ、行くか。…… っとどうせならピアも見つけて行こうぜ」
一歩程先を進んでいたゲイトも思い当たったかのようにこちらに振り向いた。

「そうだな、あいつも回収していこうぜ」

そして広い校庭を二手に分かれて探しているとゲイトの方がピアを見つけた。

ピアはまだ体力が戻っていないらしく、これだけ回りが起き始めているのに眠ったままだ。

「ったくよ、やっぱ女子にはキツイだろうによく耐えたもんだ。やっぱすげえんだなお前」

全体の3割程が女子だが、女子だからと言って洗礼が軽くなるわけではないのだ。

成長期であれば体力に差はつき始める頃なので、まだ男子の上位に混じれる女子も少なくはない。

とはいえそれは一般的な話なので、同じ騎士を目指している者達の中で女子はやはり体力的に劣っているものが多い。

それなのにこの友人は一丁前に昨日のしごきに堪え切ってみせたのだ。

まだ体力が回復しきっていないこの状態をみれば、昨日は本当に最後の最後まで強い精神力で乗り越えたのだろう。

「無茶しやがって」

少しまだ体に負担がかかるが、よく眠っているピアをゲイトは起こさないよう背負い、フェイトに合流するため歩き始めた。

「お、ピア見つけたんだ。……で、ゲイトおぶってきたと」

これは女子をおぶった状況が羨ましいとかではなく、女子とはいえ一人を背に担いで歩いてこれた基礎体力と体力回復速度に心底驚い

ただけだ。

「ああ、ピアも教室に連れて行ってやろうぜ」

「……いいけど、悪いが俺交代は出来なさそう」

既に自分が歩くだけで精一杯のフェイトはそれだけ口にして、ゲイト、ピアと共に教室に向かった。

「お、一番乗りー」

明るいい声ではしゃぎつつもフェイト達は教室に着いた。

「よつと、この辺りに下ろしてやるか。フェイトなんか敷くものとかないか？」

そう尋ねられたフェイトはバスタオルを自分のカバンから取り出し床に敷き、ゲイトはその上にピアを下ろした。

「用意がいいな」

からかい混じりにゲイトが問うと、

「シャワーを浴びるためだよ。もつともそんな余裕はなかったが」
これだけ歩いてきてもピアはまだ目を覚ましておらず、余程疲れているのだとみえる。

「んーじゃあ俺らもシャワーでも浴びにいくか？」

「おい、俺今タオル無いっての。それにどっちにしても今お湯なんか当てたら筋肉が悲鳴上げそう」

みつともないが正論でゲイトをかわし、

「なら俺シャワー浴びてくるわ。ピアをよろしくな」

そういつて元気な友人は自分のカバンを持ちシャワー室へと行ってしまった。

「全くあいつときたら。……でもピアもよく頑張ったよな」

そつとピアに優しい視線を落とす。意志の強そうな紅蓮の瞳も目を閉じていれば、スヤスヤと眠る同世代の女の子でしかない。

それに眩しいばかりの金の髪、同世代の女の子としては発育してい

る胸周り……とここまで考えた瞬間思考を振り払った。

「いかん、何を考えているんだ。ピアは友達……」

「それが友達？友達っていうよりは足手まといじゃなくて？」

ふと後ろの方から声がかかりフェイトは慌てて振り向いた。

教室の入り口に立つピアと同じ眩いばかりの金の髪、そして紅蓮を想わせる意志の強い瞳。何より背格好こそ違うが良く見ればピアと同じように整った顔立ちや鼻立ちまでそっくりだ。唯一違うとしたら、腰まで届く流れるような髪の長さと、それに似合うようスレンダーだが痩せすぎと見えない凛々しい体格、そして何より胸周りの残念さだけだろう。

「あなた達が今日初めて校舎入りした1年生よ、だからほんのちょっとだけ興味を持って追いかけてきたけど、期待はずれね」

初対面から随分な言われようにフェイトもむっとしてしまう。目の前の女性は騎士剣を腰から提げ自分が間違ったことを言っていないと確実に思っているような人物だ。

「あいにくあなたがピアの肉親だろうと、他人だろうと俺とあなたには全く関係がない。用が無いなら放っておいてくれないか？」

第一印象は間違いなく最悪なハズだ、入学から3日だというのにトラブルに巻き込まれるのはこれで2度目か。……そう思っていたら、

「ああ、ごめんごめん、自己紹介しましょうか。私はレイ・ハルト、お察しの通りピアの双子の姉よ。武器は見ての通り騎士剣、よろしくね」

名乗られたからには名乗らねば騎士ではあるまじき不遜になってしまふ。フェイトも尋常に名乗りをあげる。

「俺はフェイト・セーブ。ピアの友達であなたと同じ1年生だ。武器は今手元に無いが剣を使っている」

普通ならここで武器なしという愚行や暴挙に目を丸くでもしそうだが、レイは特に何も反応を示さずにこちらに握手を求めてきた。

「よろしく、妹からあんたの事聞いてるわ。斬鉄をぶちかました非常識な剣士として、ね」

あ、納得した。ピアが事前に話していたからこそ剣が無いと知っていたし驚きもしなかったのだ。

だが、逆に疑問に思うのは何故ピアからそんな話を受けるほど信頼されている姉が、妹を足でまといと蔑むのか？

「あんたにはまだ話す時じゃないと思うから何も言わないけど……少なくとも1つだけ言えるわ。あんた妹とは関わらない方がいい、この子じゃ有事の際本当に足手まといになるから」

結局握手が交わされることはなく、レイは教室から出て行ってしまった。

……一体なんなんだ？確かにピアとは会ってまだ3日目だし家庭の奥深くまで聞いているわけではない。

でもあのレイという女子はあからさまにピアにだけ侮蔑をぶつけている。よくない話だ、姉妹で争うなんて。

フェイトはピアの側にしゃがみこみ、そつと髪を撫でる。

「ピアは友達だよ。……でもお姉さんとも仲直りできるといいな」

そうこうしているうちに教室には人が増えてきた。ゲイトも丁度いいタイミングで戻ってきたが、まだピアは目を覚ましていない。

すでに時刻は9時の10分前だ。後10分したら教師が来てしまう。「しょうがない、起こすか。出ないと身だしなみを整える時間もないだろうし」

ゲイトがここまで女子に気遣えるという長所を持っていたことに驚いた。ゲイトの見た目からいって女子に気遣えるような性格に見えない（失礼）ので大変驚いた。

そういえばきちんとおぶってきたのも彼だし、もしかしたら自分より女子に手慣れているのかもしれない。

「んじゃ起こそうか、ピア起きろ」

耳元で声を出してみるがうーんと、口からくぐもった声が少し聞こえただけで起きる気配はない。

「ピア起きろ、朝だぞ」

ゲイトも隣から声を出してみるがそれでもピアは起きる気配がなく、それどころか

「あ……あ、うーん」

などと寝言を言ってくるので少しドキドキしてしまった。これではまるでこちら側が悪いことをしているようだ。

「仕方ない」

そう決意すると、フェイトは最終作戦とでもいうべき強硬策に打って出た。

「起きろー！えいっ！！」

そしてピアの鼻を摘んだ。妹のアイリスが起きない時等はよくこうやったものだが、友達とはいえ女の子に、それも人前でやるにはいささか常識がかけていたらしい。

それはピアが教えてくれた。

「……………うーうーうー！ぷはっ！！」

息が出来なくなりついに起きたピアが周りを確認し、ここが教室で俺とゲイトが寝顔をずっと見ていて、しまいにはフェイトが自分の鼻を摘んだということまで意識が回り。

「バカアー！！」

右頬に鉄拳を打ちこまれたのだった。

「もう、起こすなら普通に起こしてよ」

まだ怒っているピアをゲイトがなんとかだめてくれつつ、フェイトがひたすらに謝っていた。

ちなみにクラス的女子からも男子からも集中砲火を喰らっていた。

「あれはないな」「サイッテー」「妹とクラスの女子の区別も付か

ないの?!」などだ。

「フェイトも悪かったって言うてるし、それに最初は普通に声かけたりゆすったりして起こそうとしたんだ。それに時間が時間だし急いでいたっていうのを汲んでやってくれ」

ゲイトがピアに献身的なフォローを重ねてくれたため、ピアの怒りも大分収まってきているようだが、ゆすったりはしてないんだけどな。いや、ホントみかけによらず頭の回転と口が達者だったぜ。

「ま、いいや。運んでくれたのも2人でしょ？熟睡してた私も悪いしおあいこつてことにしときましょ、ありがとゲイト、とフェイト」おっとまだ棘が抜けきっていない。もう1回謝っておくことにした。そして席について間もなく教師であるギルバードが教室にきた。

「さて、ではHRを始める、うちのクラスから脱落者は3人だ、1人は退学届を出すだろうが、もう2人は病院での治療後に復帰する予定だ。とはいえいつ退学するか分からんがな」

教師が口に出す言葉はクラスを黙らせるには十分だった。入学3日目で脱落者1人、そして2人もおそらくは退学になると告げてきたのだ。これに動揺を隠せないのは当然だと思う。

「今年は前年、前々年でなかった帰宅者が1人出た、他クラスだが発表しておくとな前はレイ・ハルト。騎士剣使いの正統派騎士候補だな。皆も見習うように」

クラスが今まで以上の緊迫感に包まれた。自分達はこの洗礼を苦難を乗り越え仲間達との話題にするレクリエーションの一部だとしか考えていなかったのだ。

だが、現実にはそれを踏破し、騎士として自分達よりも確実に1つ頭が抜けている存在はプレッシャーの他ならなかった。

「あの自信……偽りじゃないって所か」

確かに双子で一方は帰宅者、一方はつい先ほどまで眠っていたのだ。明らかな差がついている。

ピアの実力も高い方だとは思うがやはり女子だとも思えるものが残る。だが、レイならば恐らく同学年では誰も寄せ付けず上級生にも

混じって訓練に参加出来る位実力があるのだろう。

「さて、では授業を始める。まずは校庭で腕立て腹筋背筋を300回ずつ、そして各々の武器の素振りを1000回。これを午後までにやること。出来なかったものは居残りだ」

冗談、ではないようだ。あれほどのしごきの後でも訓練を欠かさないとは。

騎士というものの高みの一端を知る思いだ。今年入学者がおよそで800人、そして現在の最上級である5年生はわずかに40人。同じようにこの洗礼を乗り越えた2年生ですら110人。恐ろしい倍率だ……

これはふるい落としなのだ、今日これで居残り成し遂げたとしても明日も待ってはくれない。ひたすらに高みだけを目指し崖を昇っていくようだ。

立ち止まることは許されない、俺達は子供でありながらも子供ではない尋常な選択を選んでいかななくてはならない。

「さあ、準備ができたものから校庭に出ろ。別に職員室でも構わんぞ？」

不敵な笑みだけを残し教室から去っていったギルバード。発破をかけたつもりか。

ならやってやるよ、少なくともこいつらは俺と同じクラスなんだ。見捨てて騎士になりたい訳じゃない。出来るなら俺の周り関わった奴は夢を叶えるなり、幸せになるなりして欲しい。

……だから俺がやってやる。そう決意して俺はギルバードに代わり教壇に立った

「みんなー元気かー？元気なわけないよな、俺も骨がみしみし言うてきついし正直寝不足だし」

クラス中が不思議そうな顔でこちらを見てくるが、それでいい。

「注目！俺達は騎士になるためにここに来てるんだ！みんな努力も決意もしてきてたと思う、ならさっきの脅かされただけで不安になるな！俺達は既に覚悟をしてきているんだ！！」

「まだだ、まだ皆の心は不安のまま、焦燥に駆られたままだ。もっと引き込まなきゃ！」

「それでは発表します、この後校庭は他クラスも出て行って場所取り合戦が始まっちゃう！そうしたら時間を浪費して昼飯が食べない！！みんな朝飯だって食べてないだろ？なら昼飯は、『全員で』、食べようぜ！！」

「皆が俺に目を向けてくれた。……ははっ、みんな不安だっただけじゃん。」

「そうと決まれば早速校庭に行くぞー！ノンビリしてたら他のクラスだって昼飯食えないことに気づくからな、善は急げ！！」

そして俺は教室を出ようとする。

すると背後からは席を立つ音や、肩を叩く奴ら、それに俺の直ぐ後ろにはゲイトとピアが来てくれていた。

「行くか！飯は大事だもんな」

「私さっきのHRでお腹なりそうだったのよ」

そんな俺の冗談に付き合ってくれる最高の友達がいた。

町

あれから数日、妹の方は洗礼という荒行事もなくつつがなく授業をこなしているようだった。

学校に泊まり込んだ夜は、教師から親に連絡が行っていたようで普通にお帰りといわれてしまった。

もっともその後どんな事があったのかという武勇伝はご飯の間には語りつくせない位多かったため、アイリスには食事後も色々話してやった。

他にも洗礼後の午前中の訓練は、うちのクラス1-Gは全員やり遂げ全員で昼飯を食べた。

もっともナイト・ファブレ御一行とは会話もしていないので、クラス一丸と言っているのか疑問は残るが。

しかし、他のクラスは朝になっても疲労がとれずそれなのに訓練をさせられることを不満に思い、退学した生徒も決して少なくないとか。

……良かった、うちのクラス、目の前にいる奴だけでも救えて。

ちなみに、最優秀だったレイ・ハルトは誰より早く訓練を終えた上に自主訓練までこなしたそうだ。

もはや人間のなせる技ではないと語り草だ。

そして筋肉痛も治ってきて、訓練は個別プログラムに移行した。

ピアはその技術に瞠るものがあるが、筋力、体力に難ありとされそちらをメインにトレーニングが組まれている。

逆にゲイトは有り余る体力は長所だが、戦闘訓練によつての技術習得や、ランスを扱う際必要となる体裁きなどがトレーニングだ。

一方の俺は

「なんで最優秀のレイ・ハルトさんと同じメニューなんですかね？」
「私の方こそ聞きたい。フェイトはデータ上平均値グループだろう？」

そう、レイとは魔法抜きでぶつかれば恐らく負ける程強い。それはデータ上もそうだし、自分でもそう思っている。

だからこそおかしいのだ。自分は平均グループに属するはずが、天才型グループに入れられているのだ。

そしてこの教師同士がもはや目も当てられない程相性が悪い。

筋肉ガツチリのいかにもギルド上りの教師ギルバードが俺を天才型グループに推薦しねじ込んできたのだ。

それを闇騎士と現役時代に呼ばれたまま引退した教師がレイを受け持っているのだからとにかく相性が悪い。

闇騎士とは堕ちた騎士ではなく、騎士であるのに国のため国の暗部へと対峙した尊き騎士の称号だ。

普通騎士にまでなれて暗部を受け持つものは殆どいない。皆晴れやかな舞台を望み、光を望む。

だが、誰かがやらねばならない事を理解し、日の光よりも国を大事に思い、守ってきた騎士は偉大だ。

だからこそ闇騎士とは揶揄ではなく、れっきとした称号なのだ。

引退の際だけに授けられる王からの全ての感謝の念、人生でただの一度だけ日の光を浴びれる瞬間。闇騎士として責務を全うした者が全ての責務から解き放たれ、ようやく騎士と名乗れる儚い希望の光。

とは言っても目の前の闇騎士は暗部にいるうちに少しだけ、いやかなり性格がねじ曲がってしまったのだろう。

過程には微塵も興味がなく、訓練メニューに休憩は本当に最低限だ。

一方ギルバードは熱血、以外にもメニューはスパルタだがまだ常識の範囲内で訓練メニューのすり合わせが本当に目も当てられない。幸い、レイは常識人だし俺にも気を使ってくれる等友人として付き

合いたい程いい奴だったので、目下の悩みはこの教師陣の対立である。

「ハア、本当はギルバード教官のメニューじゃぬるいんだが、それならフェイトと話せる機会が増えるからな」

レイが気にしているのはピアだけであり、個別メニューに入ってからピアともゲイトともロクに会えない日が続くとレイは本来の性格であろう優しく面倒見のよい姉の顔を見せるようになっていた。

とはいえ、同い年でもあるし、家に帰れば手のかかる妹がいる兄として言わせてもらえば姉として振舞われても戸惑ってしまう。

こちら一番上として育ってきたので接し方の距離感が掴みにくいのだ。それはレイも理解しているようで、無理に追いかけてはこない。

ちなみに呼び方はお互い名前で呼ぼう、とレイから提案されたものだ。

「いい奴なんだけどな」

大岩相手に連撃を繰り返しながらフェイトはぼんやり呟いた。

そして夕方、ようやく1日の訓練から解放された時レイから声をかけられた。

「フェイト、この後時間あるか？」

一緒に訓練してから初めての放課後のお誘いだった。

「あるけどどうしたの？レイ？」

別段男女として意識することはあまりないが、放課後の誘われたのであれば男女として意識してしまうのは困ったものだ。

「実は町に出てみたくな。寮ばかりでは毎日が味気ない、それにフェイトはこの辺り詳しいんだろ？」

実際町に出たことは数える程だが、女の子にここまで言われては詳しくないとは言えない。

「任せとけ！」

そう見栄を張ってしまう。……だって男の子なんだもん。

「じゃあシャワーを浴びたら校門で待ち合わせよう、手早く15分位で集まってくれると嬉しい」

そう言い残しレイはさっさとトレーニングルームから出て行ってしまう。

「15分って……移動時間とか含めたらメツチャ急がなきゃじゃん」とはいえ、女の子を待たせる訳にもいかないので、フェイトも駆け足でトレーニングルームを後にした。

「お待たせ！」

校門について1〜2分もしたらレイが走ってこちらにやってきた。

あ、シャンプーのいい香りがする。レイはピアと違って凛々しい感じがするし、今まで女の子らしさを感じたことが無かったからこれはドキドキしてしまう。

「ごめん、待った？」

うわっ、反則だろ！？こんなの言われたら意識してなくてもデートとか思っちゃうじゃん！

こう、急に無防備な顔を見せるのは反則だー！

「いや、俺も今来たところ。んじゃレイ行こっか」

何自然と振舞ってんの！？決して慣れてるわけじゃなく、むしろデートとか人生初だし。

ってかこれデートじゃないし……

と多少混乱しているとレイがクスクスとこちらに笑いかけてきた。

「大丈夫、そんな緊張しなくても。フェイトデートとか初めて？なら私がリードしてあげるから」

そうとびっきりの笑顔で迫られるとクラクラしてくる。うわっ本当に同年？！レイ可愛い。。

と思っていたと、レイの耳が赤い気がする。いくら夕方とはいえこの色合いは違うと思うし、なら、

「レイ？レイこそ初デートじゃないの？緊張してない？」

そう切り返してみると、とびっきりの笑顔から一転、非常に驚いた顔に早変わりした。

「……なんでバレちゃったかなあ、ちよつと最初の言葉からわざとらしすぎた？」

どうやら最初の方は計画通りだったようだ。……意外と策士だな。でもなんで？

「違うよ、耳。赤くなってる。結構無理してたんじゃない？」

そう言われレイは自分の耳に手を付け覆い隠すようにしている。

「見ちゃダメー！全く、ちよつとからかってみようと思ったのにとんだカウンターだったわ」

今度はそっぽを向いている。ちよつとわざとらしい感が残っているのはきつと何かの本を読んで覚えた仕草だからだろう。

変な所まで勉強家のレイの意外な一面が見れた事が、少し可笑しかったし嬉しかった。

「あんまバカやってないで行こう、日が暮れちゃうって」

学校から歩くこと15分、繁華街と呼べる場所までやってきた俺達道中くだらない話ばかりしていたが、意外にも退屈も話題が途切れることもなく話が續いていたのはひとえにレイのおかげだろう。

話題を振ればドンドン話を膨らませてくれるし、逆に話の途切れ目にはちゃんと次の話題を用意してくれたりと本当に上手だ。

だが、道中町についたら何をするか？という事は2人とも会話に出さなかった。

それは暗黙の了解だったのか分からないが、レイは実際に町を見てから見て回りたいもの、やりたいことを決めるつもりだと感じていたからだ。

さて、町についた俺達が向かった先は――

「見てみて！この装飾のついた剣、綺麗！」

武器屋だった。いや、別に色のある話を期待してたわけじゃないんだけどね。

レイも勿論愛剣と呼べる剣は持っているが、それでも魅かれる剣があれば欲しいと考えてしまうのが剣士の性でもあろう。

実際自分もそう乗り気ではなかったが、レイと一緒に見て回るうちに好みの剣を見つけていたのだから見事に同類であろう。

「そういえばフェイト自分の剣まだ持ってきてないよね？代替品でもいいから持ち歩きなよ、騎士としていざというとき困らない？」

もしかしたら、これが今日の目的なのかもしれない、と思いつつも既に気分が乗り気であるため悪い気はしない。

レイとしても折角一緒のクラスになったのだから、フェイトにも騎士らしくして欲しいのだろう。

「んじゃ俺これにするわ、えーつとこういう時のためのカードつと」
両親から一応預かっているキャッシュカードだが、実際に使ったのは今日が初めてだ。

裕福な方ではないが、元来物を欲しがらない性格と両親の物づくりの好きさから完成品を買うことは少ない。

実際家も父親が立てたというから驚きだ。ちなみに職業は科学者である、決して大工ではない。

そんなわけで初めてのカードでの買い物に少しドキキしながらも買い物を済ませると、意外にもレイも武器を買っていた。

「あれ？それってダガー？」

そう、店内あれだけ剣を見てはしゃぎまわっていたにも関わらず買ったのは剣ではなくダガーだった。

「そうよ、騎士とはいえ剣1本で戦場には立てないからいつか買お

うと思っていたの。思ったよりいい買い物が出来たわ。――フェイトは騎士剣？」

ちなみに俺は『ホークル』という騎士剣を買った。

使っている鉄鉱石が魔力を貯蔵するタイプだったので買ったのだが、実際の強度や切れ味等は他の騎士剣に劣るため結構安く買えた。

「ああ、デザインと重さでこれに決めた」

本当の理由を話せば好奇の視線は避けられないため、無難な答えでレイを撒く。

「ま、好みならいいけど。さてじゃあこの後は遊ぶ？それともお茶でもする？」

今日はついていくかもしれない。レイは連れて歩くには勿体ないほどの美少女なのだ。ちょっと胸周りが……とはいえ他はパーフェクトに近い美少女とデートみたいなものが出来る俺は今日限りなくっている！

そう思いながらレイの選択に迷っていると、ふと視界に入る見知ったような少女。

あの金の髪、それに制服は……

「あっ！」

思いだした瞬間走りだしていた。

「えっ？なによ、フェイトどうしたの」

レイもフェイトの後を追うが、フェイトがどこに向かっているのか分からない以上フェイトについていくしかなかった。

「おい、リード」

フェイトに呼びかけられ振り向く金のロングヘアーの少女。

「こんにちは、フェイト。今日は普通に走ってくるんだね」

と、いきなりこちらを牽制するのだから困ったものだ。おそらくこの少女なりのコミュニケーションなのだろうが、誰かに聞かれてもしたら困るようなことを引き合いにだすのは止めて欲しい。

「ああ、ってリードは相変わらず猫と遊んでる最中か」

言われた通りリードは通りの脇で黒猫と遊ぶようにしゃがみこんでいるため、非常に目立っていた。

「フェイト？その子知り合い？」

レイが追いついてきてこちらに問いかけと回答を促す。

「ああ、入学式の時たまたま知り合っただ。紹介するよ、こちら魔法学校多分制服的に『エンシエントスベル』の1年生リード・ロード。逆にこっちが俺と同じ騎士学校の同じく1年、レイ・ハルトだ。2人とも仲良くな」

「初めまして、フェイトから紹介された通り1年生のレイ・ハルトよ。あなたはリードさんでいいのね？」

「うん、リードでいいよ。その代わり私もレイって呼んでいい？」

「勿論」

「よろしく」

さすが、女子同士はコミュニケーションが早いな。

リードって人見知りの感じがするけど、案外そんなことないのかな？

「ところでリードは何してるの？」

そう聞かれリードはちよつと考えた後、こう答えてきた。

「猫語の解読。猫の言葉が分かる魔法が欲しくて」

その答えを聞いて俺達は絶句するしかなかった。

動物だろうがモンスターだろうが竜だろうが、人語を解せないもの達との意志疎通は何年も連れ添ってそれで何となく分かる、と言った程度のハズだ。

それなのに、猫限定とはいえ猫の言葉が魔法で分かるようになるならば……天才的発見となる。

それをきっかけに他の動物やモンスターの研究に及ぶことは容易く理解できるし、何より需要がすごいだろう。

とはいえ、魔法学校の1年生がそんなことをやり遂げてしまったならば、世界中の研究者の9割は裸足で逃げて謝らなくてはならない事態になるだろう。

「今はまだ4割位しか完成してないけど、2年以内には完成させたいし」

……やばい、本気だ。っていうか天才だったのか。というか飛び級してもおかしくないぞ。

レイがこちらを肘でつついてくる。説明を求めているようだが、むしろ俺が知りたい。

レイという騎士の天才少女に、リードという魔法師の天才少女、なんという人との縁だ。

これはもう一生分の縁の力を使っただけと言っても過言じゃない気がしてきた。

「な、なありード？お前って1年生だよな？なんで1年生なんだ？」至極当然の疑問だが、口から突いて出てしまった。

するとリードは不思議そうに首を傾けながら答える。

「1年生だからでしょ？同い年じゃないの？」

……負けた、本当に負けた。これが天才ってやつか、恐るべき！

「……まあいいじゃない、もし良かったらこの後時間ある？一緒におしゃべりとか遊んだりとか……」

ドゴォン！！！！

そんな平和なやり取りは近くから聞こえた爆音によって、一瞬でかき消されてしまった。

俺達も、通りの人達もこの平和な町で何が起きたのか理解するのに数秒以上かかってしまった。

だが、それが間違いだった。

ドォン！！

更に続く爆撃、考えたくない最悪な予感が頭を横切る。

レイもその可能性に気付いたのか、こちらに不安が隠せていない瞳で訴えかけている。

「テロ？」

そして嫌な想像は現実となっていました。

ガン！ガン！パラパラララ……銃声が響き、そして

「きゃあ！」「うわあああ！」「がつ！た、助けてくれ！！」

町は突然の侵攻によりパニックに陥った。

パーティー

「どうする?! すぐに避難しなきゃ - -」

レイもさすがに焦っているが、俺はそう思わない。

「違う、俺達是一体どこの学校に通っていると思っっているんだ? 騎士学校だ、俺達こそ町の人達の避難にあたらなきゃならない騎士なんだ。逃げちゃダメだ!」

フェイトの強い意志と、冷静な状況判断にレイも落ち着きを幾分取り戻したのか、素直に頷く。

「じゃあ私達は分かれて避難にあたしましょう。私とリードは一緒にこっちの道に行くわ」

リードは魔法師とはいえ、パートナーがいなくては魔法の価値が十分に発揮できない。

それに戦いに不慣れだった場合でも、結局は避難させなくてはならない対象だ。レイはそれを引き受けてくれた。

「なら俺は騒ぎの中心に行くか、リードを頼んだぞ」

フェイトはそう言い残し、銃声が鳴り響く通りの方へ全速力で駆けだしていた。

「ちよつと!? いくらなんでも無茶よ! 私達はまだ騎士じゃない -

」

「大丈夫」

フェイトを引き留めようとするレイを止めたのは、意外にもリードだった。

「大丈夫って……騎士が強いのは地獄の鍛錬を超えた者だけよ? でなければそもそも銃を持った相手に勝てるかどうかだって - -」

「大丈夫、フェイトはきつと大丈夫だから」

妙にフェイトを信頼しているのが気になるが、もうフェイトは人ごみに紛れてしまい追おうにも追えなくなっていた。

出逢って僅かの同い年の少女だが、こんな所で死なせるわけにはい

かない。

「行きましよう、私から離れちゃだめよ？あなた戦闘の経験は？」

「攻撃魔法は苦手……」

「分かったわ、なら絶対に離れないで。それと町の人達を避難させている最中敵と出逢ったら私は殿として止める覚悟で臨むから、その場合は町の人と一緒に逃げて」

「……」

「いいわね、約束よ。さ、急ぐわよ」

そうして2人は町の人達の避難へとあたるため、フェイトとは別の方向へ駆けだした。

「くつ、まだこんなに人が……」

銃声が聞こえた方を目指しているが、そちらから避難してくる人物の方が圧倒的に多くとてもではないが中心地に辿り着けない。

「緊急事態だ、リリアウト！」

騎士学校の制服のまま飛行魔法を使うなど後で搜索対象にでもされそうだが、人命には替えられない。そのまま人ごみを飛び越して進む。

「見つけた！」

裏通りからライフルを携えた男達が4、5、6、……いや、10人は超えまだ続いてくる気配がある。

「幸い空に気は配っていないな、なら！」

フェイトの右の掌に炎熱を込めた熱球が形成される。

「建物ごと埋めて進路を断つ！エクスプロード！」

ゴウツ！と勢いをつけ熱球を建物目掛けて投げつける。そして爆音と共に通りの建物の瓦礫で通路を埋め、男達の進路を断ち後続が合流し辛くする。

「なんだっ！？いや、あそこだ！上だ！上にいるぞ……！」

さすがに一撃で存在はバレてしまうが、十分だ。後続が後何人いた

のかは知らないが、通路を抜けだしたのは20人弱、それに進軍してしまつた奴らを除けば今フェイトに相對しているのは10人にも満たない。

「相手してやるよ」

フェイトは急降下しつつも右手に剣を構え、左手からは氷の魔力を解放させ大きめの氷柱を6本具現化させている。

「時間が惜しい、出し惜しみは無しだぜ？」

そして銃声と魔法が激しい音を立て交差した。

反対側の道を走っていたレイとリードだが、あまりの人の多さに少し戸惑っていた。

そもそも初めて来た町で地理が把握できていないのに、後ろからは途切れることなく人が駆け足でこちらに合流するように流れてくる。今この先頭にいる人達の道行きによつてこの人波は全て同じ方向に流れていくだろう。だからこそ先頭が道を間違えてしまえばそれだけで大渋滞と混乱になってしまう。

せめて町から出れば安全ならばいいが……

そんな事を考えていると、リードがレイの袖をクイクイと引っ張っているのに気付いた。

「どうしたの？」

すると今まで見えていた底なしのエメラルドグリーンの瞳に、どうしようもない恐れという感情が見えた。

「……ダメ、外に続くゲートからも悲鳴が聞こえる。それにフェイトが向かった方向に広場があるけど、そこから召喚獣の反応」

リードが告げた言葉にレイは言葉を無くした。どうやったのかは分からないが、リードは恐らく魔法で索敵したのだろう。

恐らく集音や、気配探知等を組み合わせた高度な魔法術式を編み出しサポートしてくれたみたいだ。

その才能の深さに驚きたい所だが、真に恐怖すべきは召喚獣の存在

だ。

「嘘でしょ？なんでそんな大掛かりなものがこんな辺境の国に……」
レイの絶句は当然のものである。召喚獣とは、その名の通りこの世界に遍く存在を呼び寄せたり、高度なものになれば次元を超えこの世界にいないものさえ呼び出せる術だ。

一般にスキルとしていうならば、大国に1人が2人いればいい方、という程レアな存在だしその軍事力で計るならば、強力な召喚獣は騎士と魔法師の大隊で討伐出来るか否か、といったレベルでもある。仮に普通程度、もしくは弱めの召喚獣であってもこの国でならば正規のギルドか騎士団と魔法師の連合を結成し討伐に当たるべき存在だ。

だが、この騒ぎが伝わり討伐隊が結成される頃には、この町は跡形もないだろう。

そうなれば結論はただ1つ。

「ゲートに展開中の部隊は恐らく住民を逃がさないためのバリケードね。突破するしかない！」

リードもそう結論付けたのか、頷きで返してくれる。

「まだ避難している最中の人には悪いけれど、私達は戦える方に部類するのだからゲート突破に力を注ぐわよ」

強く頷き肯定してくれるリードは、なんだか頼もしく将来的にパートナーを組みたいと思える程安心感があつた。

「じゃあ行くわよ、ゲートがあつた方の道案内をお願い」

「分かった」

言葉少なに2人は速度を上げ駆けだした。

「後続は放っておこう、さて、奴らの目的は」

そう、彼らは明らかに何かを追っていたのだ。

町の人達を無為に射殺するわけでもなく、人質に取るわけでもなく

ひたすらに何かを追っていた。

それがこの町にいるトラブルメイカーに違いない。

「探すか、リリアウト」

どうせ何を探しているかは吐かないと確信していたので、戦闘において容赦はせずに屠った。

銃弾が数発衣服や皮膚の表面を掠めたが、傷はその程度だったのでフェイトは気にせず先を急ぐ。男達が向かっていた先を目指しフェイトは空を飛んでいく。

少しすると広場近くに男達数人が集まっているのが見えた。……そして無残にも殺された人達の亡き骸も。

「ひでえ……」

とりあえず男達も屠っておこうと思い今度は雷撃のエネルギーを溜めていたが、違和感が突如として空に、地表に表れた。

「！？なんだ、この高密度の魔力の集束――魔力自体がここまでのエネルギーを持つなんて……まさか！？」
嫌な予感がフェイトの背筋を凍らす。

ここまで大規模な魔力の集まりで考えられるのは大規模魔法か、なんらかの儀式、そして召喚魔法だけである。

「嘘だろ……？なんでこの国に召喚士が来てるんだよ？何が目的なんだよ？」

魔力が更に重なり束となり、これはもう予感では済まなかった。もはや自分が首を突っ込んでいい事態ではない、国に頼るべきレベルだ。

「――くっ！隠れなきゃ的だ――！」

急ぎ離れつつも通りに隠れ、見つからないようにしようとしたその矢先――

1つの薄暗い通りの中に男女が1人ずつ隠れているのを見つけた。

「申し訳ありません……私が外に出たい等と言わなければ」

上品な言葉使い、そして身に纏う空気そのものがこの町に合わない高貴さや気品を纏っている女性が、彼女の隣に守護するよう立ちただかる男に話しかけていた。

「こちらこそ申し訳ない。何があっても貴女を守り抜くことは誓っているが、それでもこの町の住人を守れなかったことは口惜しい」男は腰に提げた剣に右手を添え、辺りを警戒したまま女性に言葉を返す。

「さすがの私も不意を突かれた、――いや、そうなるように仕向けられていたのだろっな。綿密に練られた計画なのだろう、これほどの事を構えられるとなればどの国が仕向けたのかは絞れそうだが」男はこの状況でも動じず、ただひたすらに隣の女性を守ることだけに全神経を集中させていた。

時は少しだけ遡り――

「この町で少し羽を休めたら、騎士学校へ急ごう。大分予定が押している」

通り沿いのカフェにて男女が向かい合ってお茶を嗜んでいた。

ただそれだけだが、この2人があまりにも美男と美女であったために通りからは余計な注目を集めていたし、この少しだけレトロな作りのカフェの外観にも相まってまるで絵画の一部のようにも見える。男性の方は端正な顔立ちに栗色に近いブラウンの髪が、絵画のモデルとさえ思わせる程の魅力を引き出している。

女性の方は男が100人いたら、100人ともが綺麗と答えるであろう程の美貌。それは美の女神ヴィーナスと言われても信じてしまいう程だった。

そんな彼女の蒼き瞳はサファイヤですら輝きで霞み、サファイヤで

すら下品と感じてしまう程にどこまでも澄んだ莊嚴なる蒼。

彼女の髪は金とプラチナで出来たシルク、が例えるならばもっとも近く、その例えですら遠いと誰もが思いなおすほど美しく光沢を放ち、毛先に到るまで全てが純然とただ風に流れていた。

これ程までに完璧な美貌は魔性と言われてもおかしくはないだろうが、実際にはそんな事はなかった。

彼女はこれらの魅力ある外観よりも、太陽のような中身の全てを表すようなとても柔らかく、暖かみを持つ笑顔を持っていたからだ。

外見だけならば羨望と共に嫉妬や妬み等負の感情もぶつけられそうだが、この太陽のような笑顔を前にすれば負の感情を持つとうという気すら起こらない。まるで闇を照らす光かの如く。

この女性を前にした時に、比肩に値する女性は果たして世界にいるかどうか。

とはいえ、この目立ちすぎる2人の周りに立つことは気後れしそうな程だが、意外なことに客らしき姿はある。最も決してただの客ではないが。

実際はこの男女の護衛であった。どこに行くにも護衛を外すことは許されず、このノンビリしたお茶の時間でさえ公務と公務の僅かな合間なのだ。

出されたお茶も護衛が毒見をする等、万全の態勢を整え普段の力フエを知っているものからすれば緊迫感溢れる有様だろう。

「ねえ？それにしても珍しいわ。いくら騎士に縁を有するとは言え学校です、それに異国の。貴方が出席を決めるなど珍しいです」

女性の方はこの話題について興味深く待っており、彼の真意を計りたいと思っている。付き合い自体はとても長く、信頼出来るものだが何を考え基準にし行動しているかはパートナーとして知っておきたい部分でもある。

あるいは彼に対する独占欲といったものなのかもしれない。

「何年も前から誘いは受けていたんだ、校長は知人でもあったしそ

れに今年は都合がなんとかついたこともある。それに興味深い生徒についても紹介してもらえみたいだし、今となつては騎士王として後見も努めていかないかね」

やはり彼は彼らしい理由で一切の妥協も打算もなく、常に正しく清廉の鑑として決断をしていたのだ。

「でも、本当は――」

彼は私だけの騎士、とても優しいから。公務で疲れた私の羽休めに大義を付けてくれたというのも本当は知ってる。

だけどそれは私の心の中だけの秘密、彼に知られでもしたらきつと気を使わせてしまうから。

「いい旦那様よね」

そうとても小さな声で呟き、同時に心の中だけで苦笑とも微笑ともいえる微笑みをもらすのだった。

「まあ、もうそろそろ行こう。さすがに夕刻を押してまで訪問したら貴方にも迷惑になってしまうだろう――」

その瞬間、風が、地が、光が、音が、全てを撒き込み押し流すような爆発がテラスで起きた。

「なっ！！？」

あまりの出来ごとに思考が一瞬刈り取られるが、それでも思考力を持ち直しさらに一瞬後に妻である、ユキ・アヴァロンを抱え脱出を試みるが――

その光量の中、自分の護衛についていた1人の騎士が姫に向けて剣を突きだすのが見えた。

『バカな！？まさか……これは仕組まれた？』

さすがに二重の動揺を誘う罠には驚いたが、それで易々と命を取らせる程騎士王の名は伊達ではない。

宝剣エクスカリバーにおいて裏切りの騎士の剣を弾き、追撃は諦めすぐに爆発圏内から逃れようとしたが――

爆音でこれ以上ない程音が充滿しているこの空間に向けて、爆音に負けない程の多量の銃声が混ざった。

『そんな……』

これには騎士王と言えども捌ききれない。銃弾の雨、裏切りの凶刃、強大な爆発、この三重にしくまれた悪意によってついに騎士王は部下を守りきることが出来ず、自身も手傷を負ってしまった。

それからは逃げる途中に確認したことが、同時刻爆発が同時に起きていたため無差別テロという見解が強く、更に街中に突如現れた武装兵団によって町の警備機能は完全に沈黙していた。

さらにここから考えられるのは、あのテラス以外にも立ち寄りそうな、いや立ち寄るように仕向けられていた個所全てに爆弾が設置しており、その結果多くの関係の無い命を巻き込んでしまったということだった。

だが、後悔しても遅い、それに後悔するにはまだ早い。

彼が抱きかかえ走る腕の中には愛する妻、ユキ・アヴァロンがいるのだ。

奇跡的にも彼女は無傷で救い出すことが出来たが、これは彼女と自分を狙った暗殺に間違いはない。

一刻も早く町から離れ態勢を立て直したいが、ユキ・アヴァロンを連れているため強硬策が取れない。

敵の人数は未だ未知数、敵の戦力に到っても未知数。

その状況で守りながら戦い、活路を拓くには荷が重い。何より銃弾をかわしきれずに数発受けてしまっている。

いくら騎士王と呼ばれようが私は人である。銃弾を受ければ痛みを感じるし、死に至ることだってある。

ドラゴンを何体討伐しようが人である以上限界があるのだ。

幸いにも追手については何とかかわしきれたようだ。薄暗く細い路地に彼女を庇うように立ち、通りに注意を凝らす。

「申し訳ありません……私が外に出たい等と言わなければ」

- - - - -

彼女の謝る言葉は本来であれば聞きたくはない。

彼女が悪いのではなく、悪いのは彼女を狙い世間の混乱をつき私利私欲のために蔓延る人間達なのだ。

そんな口惜しい思いすら抱くが、現状の打開策は浮かんでこない。このまま隠れ続けていてもいずれは見つかってしまうだろうし、それならばいつそのこと打って出たくもなる。

そんな時だった。不意に魔力の流れが急速に高まり、空が悲鳴を上げ、大地が震えあがったのが。

「まさか……召喚魔法だと!？」

連中の本気の度合いが計りしれる。召喚士まで用意してくるのならば確実に私達を葬る算段なのだろう。

例え町1つ消滅させようと、それが証拠として提出されようと全て私達がいなくなれば薦められる、そう本気で思っている。そんな浅慮で短絡で、例えようのない悪賊が。

「アルト様、アルト様だけでもお逃げ下さい。私を連れてでは逃げ切れませぬ、どうか……どうか貴方様だけでもご無事で」

彼女が決死の想いでこちらの身を案じてくれているのは、痛いほど、身が引き裂かれる程痛く分かる。

だが、それに頷くわけには絶対にいかない。

「私は騎士王である以前に、ユキ・アヴァロンの騎士です。王という身分すら本来は欲したものではない、私にはただ貴女がいてくれればいいのです。ユキ、分かってくれ」

これ以上彼女を不安がらせてもしょうがない。召喚獣などこれ以上ない位状況を悪化させてくれたが、苦難ならいつも立ち向かい乗り越えてきた。

此度だって

「走るぞ、絶対にこの手を離さず着いてきてく……」

言葉途中でアルトは空中から近づく何かに気付いた。

この風切り音は、飛行魔法？連中は魔法師まで用意していたのか。

と、内心で臍を噛みしめたいような思いだった。だが冷静に対応する。

抱きかけたユキを降ろし、剣に手を携え迎撃の構えを取り、上空からの相手を視認すると

「学生？」

紛れもない、間違いようもない。

今日訪れるはずだった学校に所属する者の証である、すなわち騎士である証明の鮮烈な赤色の制服に身を包んだ少年がこちらへ降り立ってきたのだった。

裏通りでの邂逅

スタンツ、と中空から着地したフェイトの前には上空から見たとおり2人の男女が隠れていた。

この魔力の流れは例え一般人で魔力について分からなくても、単純に嫌な空気が渦巻いていると近くできる程圧倒的なものだ。

ただ隠れているだけでやり過ぎ事は出来ないと思い、この2人も逃がそうと思つて着地したのはいいが――

隙がなかった。腰に提げた剣や装備しているマントを見るからに男性はおそらく騎士かそれに近いものであるのが分かったし、その奥に庇うように隠されている女性はきつとこの男性にとってとても大事な人なのだろう。

『気配の探り方が尋常じゃない。』

かつてどんな相手と対峙した時にも感じなかった戦慄が、この目の前の男性から発せられているのだ。

緊張に緊張が重なり、声の掛け方を忘れてしまったように喉が震え、唇は張り付いてしまったかのように決して開かない。

何故こんな圧倒的なオーラを持つ男性がこんな所にいるんだ？疑念は留まる事を知らず肥大化していき、焦燥だけが募る。

と、そんな折、向こうから声を掛けてきた。

「その制服を見るからには君は騎士学校ナイトオブ라운드의生徒だと思ふのだが、間違いないな？念のため聞くが飛行魔法まで使い私の目の前に来たという事は君は敵か？味方か？」

男性から発せられた鋭い問いかけに、フェイトは驚きを通り越して絶句してしまった。

制服が有名なのは分かる、だがこの男性の問いかけではまるでこの騒ぎの中心が自分達である、と言を裏返せば言っているようなものだ。

本当に一体この男性は何物なんだろ――

フェイトはそこまで考えた上で警戒を持ちつつ、薄暗い通りに佇む男性を注視した結果、

「ま、まさか……アルト・アヴァロン？」

その答えに辿り着いた。

アルト・アヴァロンは騎士王として世界的に有名だが、それでも顔を知っていたのは一重に騎士としての憧れに他ならない。

騎士学校の生徒はおおよそ騎士王アルト・アヴァロンを崇拜しているが、それでもフェイトの崇拜具合は他生徒を凌駕する。

何せ幼い頃より焦がれていた理想の人物、絵本の中で夢見た理想の騎士、フェイトが目指す遥か遠き理想という名の目標。

その全てを集約し、過去未来全てを含めた上で世界最高と呼べる騎士がアルト・アヴァロンなのだ。

そしてフェイトの驚愕に満ちた表情や、その言動から敵であるという可能性が極小まで減り向こうも警戒を緩めてくれた。

「いかにも、アルト・アヴァロンだ。内密の公務によりこの地に来ていたが、この通り巻き込まれて、いやむしろこの町を巻き込んでしまった。すまないが手を貸してもらえないか？」

あの騎士王が自分に手を貸してくれ、と言っているのだ。これは国の騎士隊に任命されることよりも、ましてや国王の護衛を拝命するよりも高貴で名誉あることかもしれない。

フェイトは一にも二もなく膝を付き頭を深く垂れた。

「ハッ！不詳フェイト・セーブ、騎士王アルト・アヴァロン様の命を我が全霊を懸け尽くすことをここに誓い、我が身拝命致します！」
運命というものがあるのならば、運命の神に感謝をしたい。

騎士学校の一生徒の身分である自分が、任命されたのだ。もはやこれは家訓として後の世まで受け継がせたい程の誉れだ。

「あまり固くならないでくれ、ここは戦場だ。礼よりも皆が命を大切にする場合だ、だからこそ力を尽くしてもらいたい」

「ハッ！申し訳ありません！」

「……」

アルトも後ろにいた女性もやや呆れ顔でため息をつきそうになったが、その瞬間、膨大なまでに高まっていた魔力が一条の光となり天と地を繋ぐ柱となり広場に顕現した。

「ついにきたか」

「あれが……」

「召喚獣ヘカントケイル、ですね」

召喚獣ヘカントケイル、最大の武器はその巨大さであり、歴史上確認されたものは200mを超えるものもいたと言われる巨人族だ。もつとも、今回召喚されたものは過去最大規模のものではなく50m程と最悪は免れているが、それでも50mである。

一般に大きいと言われるキリンの全長はおおよそ3・5m、巨大と言われるモンスター類ではボツカという大口竜が10m程、ブラキオレイドスと呼ばれる古代種が25m程と現在確認されている大型族でもこの巨人と比べれば半分程でしかない。

その巨大さに見合う剛腕や、踏みつけられればひとたまりもない巨足も全てが武器であり、防具であるとも言える。

あの巨大さと構成される筋肉のぶ厚さは、厚鋼ですら話にならない程固いであろうし巨人族は魔法が使えない代わりに、魔法に対する抵抗力を神族としてのステータスにおいて底上げがされている。

巨人族が何故神族に分類されるのかというのは、一説には神の忠実なる僕であつたから、と言われている。

召喚獣の名に恥じない化物を呼び出してきた相手は、紛れもなく一流だ。

やはり、召喚前から判っていたことだが勝てる相手ではない。

正式にこの御2人をこの町から無事退避させることこそが、任務であり最上の策でもある。

この2人が町から離れれば、ヘカントケイルもこちらを追わざるを得ない。

そのため町の復興等はこの際二の次で、ヘカントケイルを一刻も早

く町から引き離し、町の人の命が半数以上助かればまさに全霊を賭した結果とも言える。

そう覚悟を決め、召喚獣ヘカントケイルからアルトに視線を戻すと既にアルトはフェイトの方に視線を戻していた。

「時間がないから手短に作戦を伝える、私が囹になり時間をかせぐからその間にフェイト、君はユキ・アヴァロンを飛行魔法を使いなるべく遠く、出来れば国の保護を求められる地まで護衛し、然る後討伐隊の編成を直訴、この事態の鎮圧に向けてくれ」

やはりと言ふべきか、アルトの後ろに隠されていた女性はユキ・アヴァロンその人だった。

グランドプリンセスと呼ばれ、姫の中の姫と世界から羨望を集める神秘と清純の象徴。

その圧倒的カリスマは彼の聖母マリア、聖女ジャンヌダルクと比較される程尊き存在なのだ。

「ではアルト様は？貴方は本当に無事に帰ってこれると思いますのですか？」

アルトは無言を貫き、それが肯定を示すことは明白だった。

国を挙げて討伐すべき存在なのだ、いかに彼のアルト・アヴァロンとはいえたった1人では勝機すら見えない。

それにユキの悲痛な叫び、それはアルトが負っている傷のことだ。自分を庇ったがために負った銃傷は、まだ治っていないどころか止血すらしていない。こんな状況では普段の力の半分が出せればいい方だろう。

それでもアルトは揺るがない。その意志、その在り方、その雄姿、その魂の全てが彼を戦場へと駆り立てる。

『王女を守れ』と

「作戦は今言った通り変更ないし、異論も挟ませない。では時間だ、……フェイト君、ユキを頼んだぞ」

そう言い残し絶対の信頼という呪いに近いような宣告を残し、アルトは通りを抜け召喚獣ヘカントケイルを迎え撃とうとする。

――だが、俺は、間違っている！そう叫んだ。

「予想以上に数が多い、100……は絶対に超えているわね」

ゲート前に先回りしたレイとリードはゲートに立ち塞がる敵を一樣に観察し、純粹に戦力を測っていた。

敵兵は積極的に町の住民を攻撃はしないが、ゲートに近づく者に対しては容赦のない銃撃を浴びせるため、町の人々はゲートから距離を取りつつも外に逃げだすことが適わなかった。

敵はあくまでも住民には興味はなく、ターゲットのみを逃がさない構えなのだ。住民の列の後方ではきつとパニックが広がっているだろうが、それでも前方は前に押し出されたら銃弾にさらされるのだ。命の綱引きであれば、絶対に前に出ようとはしなかった。

だが、リードが察知してくれた召喚の気配は今も濃厚に高まってきている。先までは気付きにくかったが、今では気づける程に。

それは時間が残されていないことでもあった。ゲートは四方東西南北に存在するが、フェイトが向かった西方面は残念ながら手が足りないし、そこにいる住民を逃がすことはできない。

同じように南北のゲートも自分達のように騎士候補生や魔法師候補生、もしくは軍隊やギルドの人達がたまたま町に来ておりゲート解放に向かってくれていると信じる他はない。

今、東のゲートには私とリードしかないのだ。

「レイ、レイ。私中規模範囲の地表荒削隆起魔法『アースクエイク』なら使えるよ」

と、隣から思ってもみない言葉が飛び出してきた。

先ほど攻撃魔法は苦手、と言っていた彼女からどんな心変わりでの言葉が出てきたのか心情の変化を察するには余りあるが、今の状況で言えばその攻撃魔法は救世主とも言える程逆転を狙える。

「分かった、詳しくは後で聞かせてもらうから今は魔法の説明だけして。発動までのラグと問題点は？」

レイも有名な魔法についてならば基礎的な知識を修めてはいるが、それでも自身が魔法師ではないため詳しくは知らない。

アースクエイクが本来上級魔法に入ることも、それが範囲系魔法でみれば威力に優れていることも分かっているが、発動手順、発動秒数、リスク等については知識がない。

「この呪文は魔力をたくさん使うから多分こっちの存在に気づかれる。それで銃を撃たれたらドッカン。ゲームオーバー」

やっぱりリードは天才でもあるだろうが、それに際してなのか言動や行動が幼い感じが見受けられたりする。

これからも付き合いがあるのなら、熟知しておいた方がよさそうな性格だ。

「それで？」

「だから完成までの20秒守ってくればあの門の前にいる人達は、全員バツコンバツコンと倒せるよ」

20秒、詠唱に集中しているリードを守れば勝ちだ。

……しかし20秒でもある。おそらく5秒は魔力集束のため敵も見つけられないからおよそ15秒が本来のタイム。

しかし、15秒間敵100人以上の銃弾を捌ききる等不可能だ。

ゲートが見える位置で発動しなければ最悪ゲートごと倒壊させ本末転倒になり得るし、かと言って詠唱中に動かせば集中が途切れまた1からやり直しだ。

そうなればここから導き出せる作戦は1つ。

「私が囿になって引き付ける、だからあなたはなんとしても詠唱を完成させて殲滅して。――そして出来れば町の人の避難を手伝ってあげて」

そう、レイが覚悟を決めるしかなかった。

「いいの？」

それは当然の問い、だがリードも深く反対しているわけではないので形式的な問い、というのが本当の所だろう。

それ以外に手段がないならば、それが騎士を目指した少女の覚悟ならば、それに答えるのが魔法師である。

騎士と魔法師が積み重ね、今では数多くのパートナーが結成されている騎士と魔法師の関係。

騎士が守ってくれるから、魔法師が力を振り絞れる。

魔法師が決めてくれるから、騎士が命を懸けられる。

それは騎士が姫に、主に忠誠を誓う事とはまた違う次元の、忠誠にも似た信頼という絆。

今、彼女達の間には熟練したパートナー達が辿り着く極みのような場所に身をおいていた。

「任せた」

「任せられた」

それはどちらが先に言葉を発したのだろうか？だが、どちらが先でも同じ言葉が紡ぎだされ、繋がれたことだろう。

そして騎士たる少女は敵に向かい鮮烈な赤を刻むべく駆けだした。

「フッ！」

先制の一撃でまず敵の意識をこちら側に全て向け、他方面の意識を刈り取る。

懷から今日買ったばかりのダガーを鋭く投擲し、喉をかき切る。

突然の敵襲だが、敵の修練度もさしたるものでレイに視線を向けるや否やすぐに迎撃の構えへと遷す。

この間僅か3秒、まだたったの3秒しか稼げていないのだ。完成にはおよそ7倍、後17秒かかる。

攪乱したため魔力集中しているリードを見つけ出すのに多めに見積

もって5秒と踏んでもあと12秒は自力で稼がなくてはならないのだ。

それなのに――

こちらに向けられた銃口は無機質に、そして残酷な死の運命を告げる悪魔の武器でしかない。

その数は100以上となれば運命の女神と奇跡の女神を連れてこなければ話にならないだろう。

だが、レイはそれでも焦らない。焦りは過剰な緊張や余分な力を生む元ともなるし、何より自分には運命の女神よりも奇跡の女神よりも信じるべき自身の血の滲む修練の積み重ねがある。

例えばあと12秒の時間が必要だろうと関係ない。今、自分が出れることをやるだけだ。

「土竜！」

レイは自分の騎士剣を地面へと強く突き刺し、その勢いにより土砂を巻き上げる。

銃弾数発ならばこの土砂の盾により一時的に凌げるし、何よりこの土砂により相手からの目を少しの間だけ眩ますことができる。

今は恥も何もない、もとより騎士とは泥に塗れるものなのだ。現実と理想は違っていると認識しているからこそ泥に塗れることにもレイは躊躇しない。

「どこだ！」

そして目論見通り敵の視界は奪った。……だが、まだ10秒以上ある中絶望的に足りない。

レイは次策以降も持てる力の全てを発動し続けなければ生き残ることは到底適わないのだ。

「閃昏一擲！」

土砂の盾を左に迂回し、今度は騎士剣を高速で振り抜くことによる空気中の衝撃波、すなわち鎌鼬を生み出し敵を襲う。

まだレイでは臂力が足りず、剣の振り抜き後に硬直が残るがそれで

も騎士として剣を扱う者の中では貴重な遠距離技だ。

レイがまだ騎士学校1年とはいえ、卓越した剣技をもつ事は本人の努力の集大成であろう。

敵軍は鎌鼬を受け確かに態勢を崩したが、それでも全体を襲うことは出来なかったため無傷の部隊は尚もレイを銃口で狙い続ける。

「まだまだ！風神」

レイは騎士剣を右手で持ちその場で大きく、そして高速で回転し始める。

その剣によつて真空の渦を作りだし、たった今放たれた弾丸を弾き飛ばす。

だが、風の力によつて弾き飛ばしてはいるものの、弾丸が当たる度に風の防御膜は薄くなるし、全部を弾ける訳でもないのでこの2秒程の間にすでに十数度は弾丸がレイを掠めている。

そして1つは左の腿へと貫通し、回転は長くは待たずに終息を見せ始めていた。

ここまで稼いだ総合計時間が9秒、まだ、まだ足りない。

だが、もうレイは限界だった。足に銃弾を受け走ることは叶わない。さすれば銃弾を弾くしか道はないが、秒間100発は下らない銃撃の中生き残れる程もう体力はない。

ならば、最後の技を放つ他選択は残されていないかった。

「……っ、雷神……！」

そしてレイが放った技とは、風神により加速、遠心力を増していた自らの分身とも言える騎士剣を敵目掛けて全力で投擲した。

その破壊力は手榴弾にも相当するエネルギーが詰まっており、剣が敵地を貫いた瞬間、ついに敵陣を崩すことに成功した。

「これで12秒……ああ、後3秒足りなかったな」

確かに敵陣を崩すことに成功はした、だがそれでも一部の兵はまだこちらに銃口を構えたままだ。

そしてその引き金に力が入り、弾き絞られる様をレイは遠く、ゆっ

くりとした時間の中眺めていた。

『なんでこんなにくっくり見えるんだろう？あんなに敵が引き金引くのが遅いなら私全員切り倒せ……違うか、これが噂で聞く走馬灯ってやつなのかな』

人は死の間際あらゆる時がゆっくりと流れ、それでも意識だけははつきりしているためこの時間は生者に残された最後の時間、とも言われている。

人によっては無限にも感じ、人によって過去を思い出す等様々な事象が報告されているが、どれにも共通しているのは考えている、ということだった。

記憶を思い出していることも、無限の時間を使い自らの想いを纏め上げることも全て自らの脳が限界まで性能を引き出した思考力の他ならないためだ。

そして、レイが考えたことは、

『死にたくない、……死にたくないよ！私はまだ騎士になってもいないし、ピアはもっともつと騎士には遠い、守ってあげなきゃいけない妹なんだから……？ああ、そっか、ピアへの本当の気持ちって守ってあげなきゃいけない、そこから始まったんだっけ。……いつからかな、いつからすれ違っちゃったのかな？……ピア、ピア！……ごめんね、こんなお姉ちゃんに本当にごめんね……』

そして、無限は終わりを迎え無慈悲な死神の銃弾がレイの意識を刈り取った。

生命

東ゲート前、アルト・アヴァロン、ユキ・アヴァロン暗殺を目論むとある国家が仕向けた兵隊によって占拠されていた個所だが、つい数秒前までは突如として現れた騎士学校の女生徒により隊列を崩される活躍が見られた。

しかし、その女生徒の活躍むなく、およそ10秒程でその若き命を散らしてしまった。

――誰もがそう思った瞬間だった。

少女へと降りしきる銃弾を全て槍にて撃ち払い、その颯爽とした身のこなしにおいて少女を戦闘区域より脱出させる男の姿が見られた。そのあまりの早業に見る事しか出来なかった町の住民、そして少女に銃を撃っていた兵達の誰もが呆気にとられていた。

迫りくる弾幕のような銃弾の雨霰でさえ彼を打ち取ることは適わず、少女を抱きかかえ尚建物の屋上へと軽々跳躍する様は騎士ではなく、槍を極めし流浪の旅人を想わせる装束を身に纏っていた。

そして、その誰もが活目した寸劇の間を惜しみ、時間を稼いでくれた少女の意志を継ぎ今ここに大規模範囲魔法を完成させた少女がいた。

「我が呼び掛けに答え、立ちほだかる愚かな者に正義の鎚を！アースクエイク！」

瞬間、ゲート付近の地面は突如重力に逆らい、まるで意思をもったかのごとく捲れ上がり、隣のアスファルトも土砂にも手を繋ぐかの如く次々と肥大化し敵を飲み込む。

敵兵にとってこの魔法は既に避けられる範囲ではなく、よしんば避けられる範囲にいたとしても寸先までの少女騎士との戦闘、謎の男の乱入によって統制を失っていたため為す術なく土砂流へと飲み込まれ、押し潰され、そして引き裂かれた。

ついに東ゲート前のバリケードは破られた。

まるで激しい爆撃を受けたかの如く地面は捲られ、大きな陥没痕を残していたがそれよりもまずはこのゲートが開いたという事が大事だった。

自分が見せた魔法に酔いしれる事もなく、リードは淡々と声を出す。

「皆、逃げて」

それまで騎士と魔法師の活躍により金縛りのように観客とかがしていた町の住民が、また息吹を吹き返したかのように皆一様にゲートから外を目指した。

「レイ、どこ？」

だが、リードは避難するでもなくレイを探す。

先ほどまで自分を信じ守り抜いてくれたパートナーを見捨てて逃げる事は、リードには出来ない。

それにレイは死んだ訳でもないのだ。誰だか分らなかったが、とにかくレイは助けてもらっている。

だから後は自分が探すだけ……と、思っていたら。

「おや、お譲ちゃんがさっきの魔法を使ったのか」

そう背後から呼びかけられた。

突如として沸き上がった気配リードは驚き、急ぎ振り返るが、そこには果たして探し求めていた人物がいた。

「あなたね？さっきレイを助けてくれたのは。どうもありがとう」
ペコリとお人形のようにお辞儀をし、旅人装束の男に礼をいう。

「なーに、間に合ってよかったぜ。南ゲートは既に解放しておいたし、それで順に東、北、西って回ってただけだ。それでも格好良かったぜ？騎士を目指している女の子の凛々しさはよ」

どこことなく人を喰ってかかるような性格のようだが、腕は確かなようだ。

見た感じダークブラウンの髪がツンツンに立っており、その性格が反映されているようで少し面白い。

だが恐らくは、この東ゲートとそう警備の質は変わらない南ゲートをたつた1人で解放してきたのだ。

それに何よりレイをあゝの状況から救い出せたのだから実力の程は疑いようもない。

「レイとはいっぱい約束してたから。それでレイは？」

リードが小さく小首を傾げるとその方面に興味がある人間からすれば、まさにお人形のようにしか見えない程可愛い。

トーンがゆっくりしていることも相まって、男は脱力させながら答える。

「あのお嬢さんなら、ほら、俺の背中でごっすり」

男の軽口の内、ごっすりというのは気絶していることなのだが、それはこの際言及しない。

丁寧にレイを下ろし、リードは地面に座らされたレイの手をギュッと握りしめる。

「何があっても離すなよ？命を懸けて結ばれるパートナーなんざこの世界にだって数える程しかない。そんな巡り合わせに感謝して、何があってもその手は離すなよ？」

そう、とても寂しげにリードに語りかける男のサファイヤブルーの目には透明な雫が奥に隠されていそうだった。

今という名の孤独を背負う槍使いの旅人は、そんな姿を見せたくないのか直ぐに後ろを向いて顔を背けてしまう。

「縁があつたらまた会おうな、出来ればお譲ちゃん達が素敵なレイになつた時位にな。んじやな」

それだけいい残すと槍使いの旅人は、建物の屋上へと飛び移り、屋根と屋根を道にするかの如く跳躍を重ね北ゲートを目指していった。「行っちゃった。孤独な旅人さん、また会おうね」

色々な事が重なり、レイを失うかとまで思ったが、2人は無事に町を脱出することに成功する。

一方

「今、間違っていると、そう言ったか？」

アルトが作戦を断定し、そして自身が生涯を懸けて守り抜くと決めた姫を一時的にはいえ託すと決めた騎士から出てきた言葉は、反発だった。

「言いました、貴方は間違っている」

既に召喚獣ヘカントケイルが顕臨し、一刻の猶予もないというのにこの少年騎士は異論を挟んできた。

「フェイト、今の言動見逃してもらえと思うな。答え次第では諸君を切り捨てねばならない」

アルトが放つのは殺気に等しい。重濃なプレッシャーはこちらを射るように棘があり、その鋭さと重みはとても間違った答えや冗談では済まされないだろう。

だが、フェイトはそれだけのプレッシャーにも全く怯むことなくアルトへと吼える。

「俺が知っているアルト・アヴァロンという騎士王はどんな状況でも誓いを立てた姫を守り抜き、どんな困難でも乗り越えてきた騎士の鑑だ。ならばこの場での最善策は、『フェイト・セーブが囷となり、アルト・アヴァロン、及びユキ・アヴァロンの撤退の援助』が至上のはずだ！！」

そう、本来であればこれが最上。いかに召喚獣とはいえ飛行魔法を使いこなす騎士、となればよほどその辺の魔法師や騎士よりも役に立つと考える。それに飛行魔法が使えるのならば、時間を稼ぐ役目も十分に果たせるであろう。

しかし、アルトは自分の手傷を計算にいれ、飛行魔法はユキをこの死地から逃がすための手段とし、愛し守ると誓ったユキを手放し、自らは死地に殉じると言っているのだ。

フエイトにはそれが許せなかった。

「……確かにもつともでもある、だが私は君の能力を知らないし知る時間もない。なればこそ安全策を取るべきだ。少なくとも私ならばあの召喚獣にも対抗出来よう」

だが、アルトの結論は覆らなかった。フエイトの正論すらアルトには届かない、フエイトの力はアルトに及ばないまでもそこの魔法師よりも、騎士よりもあるというのに言葉すら届かないジレンマ。だからこそフエイトは、

「アルト王、傷を見せて下さい、何を言っても聞き入れていただけないのならばせめて治癒魔法だけでも掛けてからお臨み下さい」

これにはアルト、ユキ共に驚いた。

治癒魔法は飛行魔法と違って才能さえあれば誰でも使えるものだ。

しかしその才能こそ希少と呼ばれる類でもある。

治癒魔法はその根源が違うのだ。

「生命」という種としての運命を背負った、素質ある者にしか治癒は行えない。

どの四大元素でも治癒を行えないのは人という種族が複雑な体組織、遺伝子という名の魂という存在にまで辿り着いたためだ。

かろうじて水の魔法系統では肉体の再生という事が出来る、といった報告もあるが『再生』と『治癒』では効果が違うのだ。

例えば血を流していたとして『再生』ならば傷を塞ぐことができる。確かにそれでも十分に思える。

だが、『治癒』は傷を塞ぎ、失った血液すら元の状態へと戻し、体力と一般的に認識されている生命エネルギーそのものも回復させる。よって高度なものになれば瀕死の人間を『治癒』することも可能なのだ。

そして、フエイトは『再生』魔法ではなく『治癒』魔法と言を出した。

アルトもユキも、もうフェイトを疑うような事はしない。騎士として誇りを懸けているだろう目の前の少年はまず間違いなく、天啓と呼べる程の運命を背負って今ここにて巡り合ったのだと。

「今度ゆつくり時間をとって話したいものだ。――治療を頼む」

そしてアルトは今なお血を流し続けている傷口を、躊躇せずフェイトに託してくれた。

「お任せ下さい」

フェイトはすぐに治療魔法をかけ、あっという間に治療をおえた。

「さて、相変わらず時間はない。ヘカントケイルは西ゲートを潰し、後は手回り次第に破壊の限りを尽くすだろう。そこで、やはり私が奴の討伐を請け負おうと思う」

結局の所治療魔法をかけた所でアルトの結論は変わらなかった。いや、結果は変わってくるのかもしれないが。

召喚されたヘカントケイルは、現在こちらには気づいておらず、ひとまず西ゲートの方に行ったようでアルトが今後の行動まで推測していた。

「本来ならば君程の騎士がいれば戦力に数えたい所だが、ユキを1人にする訳にはいかない。改めてだがユキを頼む」

アルトとユキから信頼の眼差しを送られ、フェイトの気持ちはかつてない程高ぶっていた。

「任せて下さい、召喚獣でもなければ遅れは取りませんよ。――」

「アルト王、ご無事で」

「うむ」

「アルト、此度は私と少年2人が帰りを待っているのです。――無事帰ってきて下さい」

「勿論だ、私は君の、君は私のパートナーなのだから」

そしてついにパーティーは解散し、アルト王が召喚獣ヘカントケイルの討伐へ、フェイトがランドプリンス・ユキを護衛することになった。

「姫、急ぎましょう。飛行魔法は確かに早いですが、今飛べば我らの居所を相手に教えるだけになります。ご不便をおかけ致しますが、私が前を預かり決して姫には手出しさせませぬので急ぎこの場を離れましょう。何卒どうかご安心を」

クスクスと笑いながらこちらに手を差し出すユキは、まるで少女のように朗らかで、つい見惚れてしまう程でもあった。

年上の少女、それがユキを表すには最も近い表現だと思った。

「信頼します、アルトが選んだ小さな騎士。あなたにも神の御加護を」

もしかしたら、とフェイトは少しだけ思った。グランドプリンセスと呼ばれるこのお姫様は、本来もつと快活で少女のような人なのではないか？そう思った。

この笑顔、小さなと付けた何気ないジョーク、どれもが責務によって少女としての自分を捧げ抑えつけてこなければ本来の快活な素顔が見れたのでは、と思える程には人格が見えていた。

「行きましょう、貴女の誉れ高き騎士アルト・アヴァロンを信じて」
そしてアルトに僅かばかり遅れ、フェイトとユキも路地から飛び出し、町の外へと脱出を試みる。

剣撃開幕

裏通りから表の通りへ出て、フェイトとユキは駆け抜けようとしていたが、やはりというべきか敵の待ち伏せ部隊によって見つかったしまった。

向こうもバカではないらしく、西ゲート付近は全てヘカントケイルに任せ部隊を他方面に散らしたらしい。

もつとも、西に部隊を展開した時点で単純にヘカントケイルの巻き添えになるだけ、というのが正解かもしれないが。

そんな状況のため、アルトは敵兵に戦力を削がれはしないだろうが残った部隊全てはこちらに集中してしまうのだ。

「鬱陶しい！ ライトニング！」

簡易な雷撃魔法だが、利点としては詠唱も攻撃速度も最速に位置する便利な魔法だ。

その分威力はスタンガン程度に留まり、4人を気絶させることも出来ずただの時間稼ぎにしか用いれない。

「まいった、予想以上に敵が多いみたいです」

背後に控えるユキに対してそう告げ、自分の状況判断の甘さを悔いた。

「いいえ、事前に私達への襲撃の規模を情報として統合するのを怠った私が悪いのです。どうぞ、よしなに」

と、護衛対象の姫様に謝られてしまったのはフェイトの立つ瀬がない。

「いえ、申し訳ありません。ではこれより飛行魔法にて町を抜けます、私は絶対に離しません。が姫も何卒しっかりとお掴まり下さい」

そう言つて、ユキはフェイトの懷まで近づき手を回してフェイトの腰にしっかりとしがみついた。

『う、うわー』

フェイトは言葉に出来ない感想に詰まっていた。

とてもじゃないが、ここが戦場ということを忘れそうな程いい香り

が懐から立ち昇るし、豊満で柔らかでマシユマロみたいな胸が、胸がどうあがいても健全な男子には抗いがたく蠱惑的でもあり、そのピッタリと張り付いた感触を手放す事は余程の強靱な意志が必要に思える。

というか自力で離れて下さいとは絶対に言えないように思えた。

「どうか致しましたか？」

と、ユキから尋ねられたのはフェイトが誤魔化しきれないほど硬直して、耳まで真っ赤にしていたからだ。

そんなフェイトの反応にユキはクスクスと笑いを漏らす。

「私を守って下さるのでしょうか？小さな騎士さん」

あ、分かった。半分わざとだ。だって更に密着度が上がって意識が飛びそうな程クラクラする。

こ、この人は今が緊急事態だって本当に分かっているのだろうか？

「どうか致しましたか？それとも私をアルトの手から攫いだすと？」

一瞬、ほんの一瞬だけ、このユキという女性が自分の将来まで誓い合えるパートナーだったら。……思ってしまった。

……だが、すぐに頭を振って邪念を叩きだす。アルト・アヴァロンとユキ・アヴァロンの絶対の信頼関係こそが理想なんだ。その理想に己が欲で牙を剥いてどうする、と。

「失礼致しました。それではこれより飛びますので本当に悪ふざけはお直し下さい。では飛びます」

「はい」

それからユキはからかうことをやめ、普通程度にギュッとフェイトに掴まった。

「ロックブラスト！」

フェイトが空を飛びつつ魔法を使うのはこれで5度目だ。飛行魔法と併用するにはよくて中級魔法まで、上級魔法はその集中力と創造力から飛行魔法とはとてもではないが併用することはできない。

もつとも、魔法は使い方次第で下級魔法の方でも十二分に威力を発揮することだって可能だ。フェイトは魔力の消費を抑えるために下級魔法で人以外を狙うようにしている。

建物を崩したり、地面を捲って動きを制限したり、今のように石つぶての嵐を高い場所から放つことにより威力を底上げし、敵兵を牽制したりと様々な魔法と戦術を1つとして同じものを見せずに戦場を切り抜けていく。

「フェイト、其なたは本当に魔法師たらんと言うのか？」

ユキの疑問ももつともだった。フェイト程の魔法センス、魔法力の高さ、魔法の種類があればとくに天才の名を欲しいままにしている。

フェイトはまだ15歳、本来であれば魔法学校の生徒であつても1年生なのだ。

「本当ですよ、俺は騎士です。……こんな魔法を使ってしまうのだから何度も魔法師を勧められましたよ。――誰も俺の夢なんか見ていなかった、皆才能しか見てくれなかったんだ」

フェイトに初めて射す昔の暗き影。ユキはそれが触れてはならないものだと知って、素直に謝った。

「すまぬ、其なたにも事情があつたのだろう。どうか愚明な私を許して欲しい」

「いえ、こちらの一方的な感情でしたから。こちらこそ申し訳ありません。……っと、フラッシュ！」

話している最中に敵に見つかったため、フェイトは火と水を同じエネルギーで作りだし合わせる事により、発生したエネルギーの消滅を目眩しの光とした。

もちろんその光によって敵から逃れ、また空を加速し逃げる。

「さぞ苦労したであろう。私には其なたの苦しみを分かち合う事は叶わぬが、それでも一言だけ」

フェイトは周りを警戒しているため、視線だけをユキに向けその続きの言葉を待つ。

「今我らを救っているのは間違いなく其なたの魔法の力だ。今まで苦しみながらも生きる努力を怠らず、騎士を目指し博愛の精神を身に付けた事、全ては自らの夢を叶えるため必死に殻を破り磨き続けたからであろう。ありがとう、フェイト」

フェイトはハッと驚き、知らず目頭が熱くなっていた。

ユキは、フェイトの夢を詳しくは知らないはずだ。 - - それでも、フェイトが何故騎士に憧れ、騎士を目指しているのかを理解しようとしてくれ、認めてくれた。

認めてもらえた、…… たったこれだけで、心は救われるのだ。

誰もが子供の頃に夢見た己の甘美な物語、だが子供は成長する毎に現実を知り、己の限界を知り夢を追わなくなる。

フェイトはただひたすら純粹に夢を追った、だが周りは理解をしてくれなかったし子供が子供でなくなってきたても夢を追う姿はどれだけ憐れに見えていたか。

ユキは違った、認めてくれた。例えユキはグランドプリンススという地位でなくても、ユキが認めてくれればそれだけで心は満たされた事だろう。

フェイトはユキを抱えていない方の左手で、ユキに見えないようそつと涙を拭った。

「ありがとうございます、ユキ。おかげで吹っ切れました」

ユキは驚いたように口を開け、こちらを穴があくほど見つめている。「私を呼び捨てにしたのは両親とアルトを除いて、其なたが初めてです。とても名誉な事ですょ？」

そのことか、とフェイトは思った。

先のユキからもらった言葉の内、最後だけはきつと姫としての言葉ではなく、ユキとして向けてくれた言葉だから、フェイトもこの一瞬だけはユキをお姫様扱いしなかったのだ。

「打ち首は怖いのでこれからはユキ様と呼ばせていただきますよ？」
フェイトはあえてユキの挑発に乗り、そう切り返した。

ブツ、とユキから笑いがこぼれたことから、これがきつと正解だったのだろう。――そう思い戦場の中、小さな花を愛でた。

「ハアアー!!」

裂帛の気迫と共に上段から振り抜かれる宝剣により、ヘカントケイルに傷を増やす。

あれから数十合切つては払い、時には十撃以上切り込んだ場面もあったのにヘカントケイルの動きは鈍くもならない。

迫りくる巨腕を加速をつけ範囲外に離脱、回避しアルトは初めて息を吐いた。

「さすがは召喚獣、これは歯ごたえがある」

もつともアルトにもまだまだ余裕の笑みがあり、勝負の行方はまだ分らない。

『治癒魔法が効いたな』

銃傷を治したのは勿論、今までの戦いによって少しずつ失われていた生命の気も回復していたのだ。

まるで全盛期に前線で剣を振るっていた時の如く力が溢れてくる。

「フツ！」

瞬速の歩合いにより敵との距離を一瞬で縮め、その勢いのまま振り抜く逆袈裟切りは並のモンスターや鋼の鎧であつても粉々に粉碎するであろう威力を放ちヘカントケイルを切り裂くが、既に似たような攻撃を数十度受けきっている巨人は何事もなかったかのように平然と反撃を繰り出してくる。

アルトは間合いを詰めたのとは逆に飛び退り、ダメージを受けることなく巨人の攻撃を掻い潜る。

「キリがないな」

力を込め切り裂いても動きを止めず、剣を埋める程に突き刺しても

骨格には届かず、連撃においてダメージを稼いでも顔色一つ変えない。

アルトは今まで2度召喚獣と剣を交えたことがあるが、その時は部下がいたし魔法による援護もあった。

防ぎきれない強大な灼熱の炎を吐く竜も、それぞれ独立した意思を持つ首でこちらを苦しめた地獄の番犬も、攻撃を続けていくうちに相手の体力を確実に削ったと分かったのだが……

この巨人はどれだけの体力があるのだろうか？今が1割削ったのか、それとも半分削ったのか、それとも――1%も削れていないのか。それすら判別がつかない。

「最大の武器はこの巨大さか」

底なしに見える体力こそがこの巨人の武器ならば、自分も体力はともかく精神力で負けるわけにはいかない。

「破壊を尽くす巨人よ、貴様は確かに強いが私には帰りを待つ妻、国の民、そしてこの遠き異国で巡り合った少年騎士が待っている。

私が勝つまで付き合ってもらおうぞ――」

そしてアルトは再び戦場を黄金の剣と共に、駆け抜ける。

異変は突如現れた。

今まで自分達は空を飛び、地上からくる銃弾にさえ気をつけていれば町から逃げ出し、安全圏へと向かえると思っていた。

だが、非情にもそんな甘い予想は碎かれた。

――ヒュン

突如何か熱い者が頬を掠めた。

「……？姫！危ないからしっかりと掴まっていて――」

返事も待たずにフェイトは急激に軌道と高度を変え、あたかもそこ

が狙われていると確信するかの如く回避行動にでた。

直後、紫色に光る可視化された熱エネルギーの塊であるレーザーが、一時前まで自分達が飛行していた場所を寸分変わらず埋め尽くした。

「レーザー兵器?! 一体どここの国だ!」

先に受けたレーザーは恐らく溜め無しで撃ち当たれば儲けもの、位で発射されたのだろう。

だが、次に来た極太のレーザーはチャージ音が空気を伝わりこちらに届いてきていたので、フェイトは回避に移ったのだ。

「助かり申した、しかしレーザーとなれば召喚獣を持つあの国とは思えない……いや、むしろ敵兵が兵器を中心とした部隊であることを顧みれば……」

「姫、詮索は後です。今は敵を退ける事を考えなくては」

「……そうですね、恐らく敵は飛行型独立軍事兵器、アトミック・レイを用いてきたのでしょう。まさか、そんな最新鋭の兵器までつぎ込んでくるとは」

フェイトも薄々感じていたが、フェイト以外にもこの空を切る翼の音、つまり何かが空を飛び追ってきたのだ。

「信じられないような兵器ですね。独立して動く機械頭脳自体まだ進歩途中だというのに、それが軍事兵器で空まで飛んでくるとなれば」

フェイトはちらりと後ろを見ると、フェイトの飛行魔法の速度に張り付くように飛行兵器、アトミック・レイが後ろを飛んでいた。

「姫、このままでは狙い撃ちされていずれこちらが墜とされます! 姫を一旦どこかの屋上に下ろしますので、そのまま身を伏せてお待ち下さい!」

勿論身を伏せていようが、敵が爆弾を乱撃すれば危険はあるだろうが、少なくとも同じような高さから狙われない限り銃の死角となる場所に下ろせば危険は減る。

「あそこに下ろします! お願いですからじっとしていて下さい」
コクン、とユキは力強く頷き了とした。

「すぐに決着をつけてきます、しばしの間側を離れることにお許しを」

いくら敵兵の銃から死角でも、空中兵器からすればここは格好の的になる。別れの言葉すら満足に交わせずフェイトは迎撃に向かう。

「信じていますよ、フェイト。あなたの未来を」

今度はフェイトはコクンと頷き、再び飛行魔法で飛びあがりアトミック・レイを迎え撃つ形で立ちはだかった。

「俺はフェイト・セーブ。アルト・アヴァロンの命によりユキ・アヴァロンの命を預かるものなり！堂々と参られよ！！」

フェイトは腰にさしてある、今日買ったばかりの騎士剣『ホークル』を抜いた。

その瞬間、まるで人間のような四肢を持った兵器の左手に当たる部分からレーザーが放たれた。

「のわっ！」

慌てて避け何とか事なきを得るが、騎士の名乗りの最中に問答無用とは本当にこの兵器のプログラムは心がない。

「ただで済むと思うなよ？俺は今名乗りを邪魔されて不機嫌なんだ。鉄槌を下してやるぜ！！」

フェイトはライトニングを素早く発動させたが、アトミック・レイの胴体に当たる部分から電磁シールドが展開され、雷撃魔法が霧散した。

「何だと！？」

最速を誇る魔法がこうもあっさり防がれるとは、どうやら防御等のカウンタープログラムの反射速度がかなり高いようだ。

お返しとばかりに向こうの右手から放たれる実弾が、無反動マシンガンとして次々と襲いかかってくる。

「ふざけやがって、ウインドガード」

風のバリアを3重に張り全ての弾丸から身を守るが、

「ビックリ箱かよ」

敵の足の部分が開閉したかと思ったら、ホーミングタイプのミサイルがフェイト向かって飛んできた。

「風のバリアじゃ防ぎきれないな……ウォーターフォール」

風のバリアを解除し、今度は激流のカーテンを発生させミサイルを通さず地上へと押し流す。

「ふふん……ってやばっ！」

少し勝ち誇っていたフェイトだが、アトミック・レイの左手がチャージを開始しているのを見て慌ててその場から離れる。

ゴオオオオ！！

そして今フェイトがいた場所を、激流のカーテンをあっさり突き崩し正確無比に撃ち抜いてくる。

『パターンはおおよそあれだけか。さて、後はどう攻撃を掻い潜り防御を突破するか？』

「ぬうん！！」

アルトは先とは狙いを変え、今現在ヘカントケイルの左足を集中的に狙っている。

片足だけでもダメージを与え続け機能を失わせれば、少なくともこれ以上の被害の拡大は防げるし、相手の攻撃範囲も激減する。

作戦としては良かったのだが、すでに先の数十度の剣撃を合わせれば二百は超える程左足だけにダメージを与えている。

巨人から溢れる血も既に相当な出血となっており、足場が血でぬかるむ。

再び襲いかかる巨人の腕をかわすと、アルトの目にようやく変化が訪れた事を告げた。

腕が想定範囲より伸びてこなかったのだ。それはつまり「ついに片足取ったか……チェックも近いな」

そう、あの巨人ヘカントケイルがついに膝をつき倒れたのだ。
ヒュン、と宝剣に付着した血を振り払うとアルトは改めて剣を構える。

「打ち取らせてもらうぞ、召喚獣」

勝負の趨勢は決まった、そう誰もが確信できる状況。

- - それが

「待て！アルト・アヴァロンー！！これが見えぬかー！！」

突如この人外の戦場に響く場違いな声。どこか、とアルトが周囲を見渡すとそれは頭上から降ってきていた。

「ここだよ、アルト・アヴァロン」

召喚獣ヘカントケイルの肩に立つその男

「貴様は……レアル・アンドリユーー！！やはり貴様だったかー！！」

アルトが予想していた通り、この状況を作った張本人、西グラビアナ王国の頂点に君臨するレアル・アンドリユーーその人だった。

「久しいな、アルト。元気だったか？」

その妙に勝ち誇った顔、そして自分以外全てが虫けらとしか思っていない尊慢な態度、人格者のアルトを持ってしても好きになれない人物だった。

「ああ、お前の王国に比べて我が国は活気に満ち溢れているからね」
ギリッ、と歯ぎしりでもしそうな程口を噛みしめ怨嗟を飲み込むレアル。

「お前の国は広い領土を持つてはいるが貴様が暴君、暗君のため発展もできず常に苦しい状態、と聞いていたがこのような争いを仕掛けてくるようでは本当だったようだな」

アルトの治める国『アヴァロン』は理想郷の名に違わず、何代も続く優しく優秀な王によって素晴らしき発展を遂げていた。

しかし、その隣に位置する西グラビアナ王国は古くからの体制を維持するだけで国のエネルギーが発展に使われず、全て特権階級の人々に集中していた。

さらには、他国との貿易自体はあるが他国への移住は基本的に認めておらず、また法外な金額が要求されるため民は逃げ出すことも適わないのだ。

その状況を見かねて近隣諸外国や、海を越えた先にある大国も援助を申し出ても断り、絶対に領土へと踏み入れさせない。

こんな無秩序な国は国連によって統制され、しかるべき軌道に修正されるべきだが、かつて大国であったグラビアナという名前が国連の要求をはね続け政治が民衆の手に戻ることはついぞ訪れなかった。東グラビアナという国もかつては存在していたが、今の王族に対し反発した民衆、貴族により独立し領土の半分を獲得し、今は『ウルガ』という国に名を変えている。

だが、何故隣国であるアヴァロンを狙うのか？

それは一重にアヴァロンという国が眩しすぎたからであろう。

人の欲が強ければ強い程、隣に美しいものや美味しいもの、見上げるような才や財があることが許せなくなる。

――そんな下らない事がこの戦争のきっかけだったのだ。

その状況はさておき、何故裏に徹しているはずの黒幕が表の部隊に出てきたのか？

それは恐らく切り札のヘカントケイルが落とされたからに、間違いない。

たった1握りだけの才能である召喚士1人だけを、幸運にも抱えていた西グラビアナは召喚獣の力を使いアルト暗殺を企んだ。

普段王都にいるアルトには、お抱えの近衛円卓騎士団が控えているが、この遠く異国の地であれば護衛は限られてくる。

まさに暗殺のために狙われた状況だったのだ。

前々から準備していた内通者や、自国の軍を動員しついにアルトに傷を負わせる――までは成功した。

しかし、どういった訳かアルトは全快し更には切り札として持って

きたヘカントケイルまで倒される始末。

もはや、言い逃れできないこの窮地についてリアルは卑策を用いて表に表れた。

「これを見る！！この町にてかき集めたガキ共100人を！！」

そしてヘカントケイルの側の路地から連れてこられているのは、まだ年端もいかない少年少女の列。

それにリアルお抱えの兵が容赦なく銃口を突き付け、合図1つで子供達全員の命が散る仕掛けだ。

「卑怯な！！この町も、子供達も何の関係もないだろう！今すぐ子供達を離せ！」

アルトの正義感も、ここが戦場で、相手が人として道を踏み外した者が相手では届かない。

「無駄無駄、子供達がこれだけ居て兵も隙間なく配備してある！貴様がどれだけ迅く強かるうが、助け出すことは不可能！！残った兵が必ず子供達を殺し尽くす！！」

「怖い、怖いよママー！」「エーン、助けて……」「もう嫌あ……」

「助けてえー！！！」

子供達から発せられる、恐怖に怯えるその声にアルトは戦意を下げざるを得なかった。

「くっ……何が望みだ！！」

そして、屈服したアルトを舐めまわすかのようにたつぷりと見下した後リアルは告げた。

「お前の国だよ、国。だからお前がここで死んだならこのガキ共は無傷で解放しよう。これが条件だ、さあ、どうする騎士王！騎士王様よおー！！」

ヒヤハハと下品に笑い返るリアルに、アルトは答える言葉を持ち合わせていなかった。

『国を捨ててもこの子達が助かる保障はどこにもない……だが、断れば必ず命を散らす。――一体どうすれば！？』

アルトに苦渋の決断が迫られた。

宝剣

ガガガガガ - - -

空中機動兵器の右手から乱射されるマシンガンを、フェイトは風のバリアによって防いでいた。

「種が割れた手品程面白くないものはないんだよ、お前には人工知能AIが積んであるんだろうが、人間を甘く見るなよ?」

空中兵器アトミック・レイはマシンガンが効かないとみるや、再び足の部分からミサイルを発射しフェイトを狙う。

それを、先と同じようにフェイトは水の防御に切り替えミサイルを流し落とす。

そして - - -

「確実に次はレーザーがくる。そんなローテーションを切り替えるために必要な経験は機械知能じゃまだ足りない。だが、人間相手にそんなローテーションが通じると思うな」

自分が作り出した激流にと、ミサイルによって視覚が奪われているが問題ない。フェイトはそのまま魔法を詠唱する。

「アクアボルト!」

今まで下に向けて流れていた水が指向性を持たされ、更にはそこに電撃を飽和しながらアトミック・レイに向かって撃ちだされる。

アトミック・レイはレーザーのチャージを一時中断、即座に胴体よりシールドを展開する。

ビシッ!

アトミック・レイの電磁シールドに勢いよく撃ちだされた水雷ががぶつかるが、決して貫くことは出来ずにシールドによって霧散されていく。

だが、それも計算通りだ。

水雷が防がれている中、フェイトは更に追撃を仕掛けていたのだから

ら。

「フレアボム！」

フェイトの周りに合計4つの熱球が生み出され、それぞれが上下左右に撃ち別れアトミック・レイを襲う。

ここで、相手が機械という利点が活きた。本来不意打ちに関して人は思考を停止せざるを得ない状況の時、防御も回避も頭から跳ぶというのは決して珍しいことではない。

しかし、人口知能であるAIはただ忠実に防御プログラムを実行する。

「シールド、一点型から切り替え、全方位型で切り替えます」

そして、避けきれない熱球は全方位へ包むように展開されたシールドにより、本隊に触れる事無く爆発してしまった。

「ウインドスラスト！」

だが、フェイトは更に追撃をかける。今度は風の魔法において真空波を生み出し正面からぶつける。

これもアトミック・レイはプログラム通り正面にシールドエネルギーを集中させ防ぎきる。

「エアプレス！」

風と土の複合魔法により、空気が左右から結合するように圧縮し、圧縮内に対象を設置することによって空中であろうが問答無用でプレス機のような圧力をかける。

アトミック・レイのAIは決して攻撃プログラムには移行せず、再びシールドを左右に展開し魔法の直撃を避け続ける。

既に4種類も魔法追連を行ったフェイトに、もはや余力はないのか次の攻撃はこない。

アトミック・レイは防御プログラムから攻撃プログラムに切り替えた、その瞬間。

AIであってもこの追撃の意味を悟った。

そしてこれから訪れるものが、敗北という事も。

フェイトの真の狙いは、飛行魔法の解除であつた。

飛行魔法中は上級魔法が併用できない、飛行魔法が解けるか上級魔法が完成しないかのどちらかしか結果を生まないため、敢えて下級魔法や中級魔法だけで応戦していたのだ。

だが、それらは全て目眩し。フェイトはあの飛行兵器を撃ち落とすため、砲台となる場所を探していただけだったのだ。

そして、飛行魔法を解除したフェイトから紡ぎだされる魔法は勿論

――

「マグナムボルケーノ!!!」

詠唱破棄して尚上級の威力を保つフェイトの魔力量が生み出す、マグマの渦。

本来マグマの温度は800～1200と高温ではあるが、合金を用いられているアトミック・レイならば耐えきれぬ温度でもあるが、それはあくまでも物理法則の中の話である。

このマグマは魔法によって引き出されたものであり、フェイトが用いた火属性の魔法力によりすでに3000を超える高温をこのマグマは秘めていた。

アトミック・レイも一点防御のシールドにおいて防衛するが、今まで全て霧散させていたこの強力なシールドですら拮抗から一歩押されている。

いずれ押し切られるだろうとA.I.も判断するが、今シールドを解除すれば即座に落とされてしまう。

だからこそ、残存エネルギー全てを正面のシールドに回しガードしたが――

「だから機械なんだ。機械が人間に追いつくには1000年早いってーの!!!」

フェイトは魔法で押し切ることもできたが、既に次の行動移っており、アトミック・レイの真横へと飛んでいた。フェイトは機械のA.I.を完全に上回ったのだ。

キン――

澄んだ音を立て金属が一刀の下切断される。

一流の剣士において基本において奥義とされる『斬鉄』。

フェイトは鉄よりも強度があり、その全長から厚みもあるはずの飛行兵器アトミック・レイを、空を切るかの如く自然に二対のガラクタへと斬り離れた。

「遅くなりました」

そしてフェイトは待たせていた、ユキの下へと馳せ参じる。

「よきに、フェイト大義でありました」

「ハッ！騎士学校所属フェイト・セーブ、グランドプリンセス、ユキ・アヴァロン様より頂きし賛辞、今ここに千年刻む事を誓い、頂戴致します！！」

騎士学校1年生にして、グランドプリンセスより賛辞を頂いた事は以後彼の創る伝説の始まりの1ページとなるのであった――

一方、アルトは……

「さあ、選べ！後何秒かかる？ん？？なら俺が決めてやるよ後5秒だ――」

アルトよりもはるかに格下となるこの自己中心的なレアルは、優越感に震え興奮しきっていた。

「5――」

しかし、アルトは表情を崩さず考え続ける。

子供100人を人質に取られた絶望的な状況の中、打開策を必死に

考え見つけ出そうとする。

「4!!」

目にも見えない速度で子供を取り囲む兵を全滅させる。否、それでも兵が引き金を引くには半秒もかからない。兵も100人近くいるのにこの策は使えない。

「3!!」

自らの命、そして国を差し出す。否、目の前の子供達100人は守るべき命だが、国の民数千万を預かる身として断じてこの判断は許されるものではない。

「2!!」

結局最後に残るのは、引き算。人の命に順位はなく等しく大切だと言うが、その綺麗事だけでは政治も、国も治められない事を現実として知っている。

「1!!」

ならば、背負おう。せめてこの100人の命を散らすからには、この子供達が望んだ未来をいつか築こう。そしてこの100人以上の命をこの手で救い、それを以って償いしよう。

子供達よ、罪深き王を許せ――

アルトは目を見瞠き、覚悟を決めた。

そして訪れるカウントの終焉、レアルは恐らく身を隠し本国へ逃走した後私に対する悪辣な策を披露してくるだろう。

ここで奴の逃走を止めなければ、この子供達にすら申し訳が立たない。

レアルはここで絶対に仕留める。その決定をした瞬間に、視界の端から飛び出す影が見えた。

影は一瞬にて子供達を取り囲んでいる兵の半数程をその長身の槍にて蹴散らし、尚も暴れ続けている。

兵達は一瞬、方向外からきた乱入者に氣勢を持っていかれたが、そ

れでも邪魔になるのならばまず任務として子供達の始末に回ろうと再び銃口が子供達に向けられたが……

アルトが、その決定的な一瞬を見逃すハズが無かった。

乱入者が作ってくれた一瞬の隙と混乱を活かし、切り込んだのだ。

1人では全員を倒しきる事が不可能だったが、アルトに似たような実力者がすでに半数を倒し、時間も一瞬作ってくれたのであれば後は簡単であった。

子供達を決して傷つけぬよう擦り抜け、つつ敵兵を次々となぎ倒す。僅か1秒も経たずに、2人の男によって銃を持った兵隊100人が鎮圧された。

「なっ……ばかな、ばかなばかなばかな……！！！！一体全体どうしたというのだ……！！」

レアルの親衛隊でもあった兵士達は全て沈黙し、この場で立っていないものは、アルト、レアル、謎の旅人装束の男、ヘカントケイルのみとなった。

「驚いたぞ、お前がこの町にいるなんてな。青き……」

「おっと、その名前の由来、あんた知ってんだろ？……なら呼ばないでくれ。俺はその名前は捨てたんだ」

アルトは男が何者であるかを知り、そして名を呼ばれる事を拒否した男もアルトを知っているようだ。

「……すまなかった。だが、助かったのは事実だ。礼を言う」

「よせやい、俺は俺のやりたいようにやっただけだ。騎士王さんがいなければ俺がやったのは、結果が悲惨な目も当てられない大博打ってやつなんだぜ」

2人共お互いを見ている訳ではないが、それでも会話をしている。その2人が視線を固定しているのは……レアルとヘカントケイル。

「貴様何物だ！何故私の邪魔をする……無礼者が……おのれおのれおのれえー！！ヘカントケイルよ、奴らを踏み潰せ！」

レアルが命じ、ヘカントケイルが立ち上がるが左足が動かないのは脅威も半減だ。

「さっすが騎士王、召喚獣を1人で仕留めるなんざ伝説以上の化物だぜ、あんた」

あくまで笑いながらアルトに話しかける旅人装束の男は、どこか愉快気に酒のつまみに興じるかの如く真面目には見えない。

「礼を言うが、あの2匹は私が決着をつけねばなるまい。……目の前の子供達は救えたが、この町、私の部下、救えなかった命は今回の戦いで幾つもあるのだ」

旅人装束の男は、軽く肩をすくめながら肯定する。

「なら、遠慮なくやるんだな。俺があの子供達をさっさと避難させてやる。――20秒でどうだ？」

「10秒だ」

ヒュウ、と口笛を鳴らし旅人装束の男は消えるように速く子供達の所まで近づき担ぎあげ避難させる。

その間、ヘカントケイルは足元付近にいる子供達に狙いを定めその巨大な右腕を振り下ろすが、

「させん！！」

裂帛の気豪と共に振り抜いた宝剣が、黄金の光を放ちながら振り上げられ、巨人の手と交差し止める。

見ていた者はその光景を生涯忘れられないだろう。

50mからなる巨人、ヘカントケイルの右腕を剣1本、その身1つで受けきったアルト王の雄姿を。

「なんだと！？き、貴様！人間なのか！？？」

「ぬううおおおお！！！」

アルトが更に力を込め、拮抗していた力の天秤は傾き、ヘカントケイルの右腕を弾き退ける。

「へっ、やっぱり化物じゃねえか。いくらエクスカリバーだからって、それを振るってんのはあんたなんだから、あんたが化物なんだよ」
僅か10秒、それでも男は約束通り子供100人を戦闘区域外に運

び出し、攻撃の余波に備える。

「覚悟を決めろ。これがお前の選んだ物語なのだ。結末に後悔するな」

光が、アルトから光が放たれている。

人間に備わっているものとして、魔力と生命エネルギーの2種類が存在している。

本来、騎士とは魔法を極める者ではなく、剣や槍、斧等によって戦いを行う。

その際通常以上の威力を引き出すのが、この生命エネルギーに分類されるものである。

軽く使うだけならば、休息により回復もするが、多量に使う場合は最悪命に関わる場合もある。

だが、騎士はそのいざという場面において生命エネルギーを使う事は厭わない。

なぜならば、騎士が命を懸ける場面においては、自身の命よりも優先すべき『何か』があるからだ。

それは王であつたり、姫であつたり、恋人であつたり友人であつたり、――誇りであつたり。

今、アルトが生命エネルギーをエクスカリバーに注ぎ込んでいるのは、レアルがアルトの逆鱗に触れたからだ。

妻のユキに手を出し、国に手をだし、見ず知らずの子供達を人質にとったレアルをアルトは絶対に許さない。

「や、やめろ……そんなの……ほんとに、シャレに、なら、な――」

既に泡を吹きかけて、失神しそうなレアルだがアルトは絶対に許さない。

「覚悟を決めろと言ったはずだ。お前には気を失い全てを背負わず

に消える事は許されていないのだからだ！！！！」

アルトの雄叫びが、大地を、空を揺らす。

既に限界まで溢れんばかりに込められた生命エネルギーは、黄金の剣を更なる輝きで包み解放の時を待つ。

「や、やめてくれー！！！！！！！！」

「その罪、地獄まで持つていけ！！」

レアルが頭を伏せ、ヘカントケイルはその本能に従うままに危機を回避しようとアルトに迫る。

だが、それすら全て遅い――

彼の宝剣は輝きを増し、聖剣として目の前の敵を全て焼き尽くす。

「エクス――カリバアア――！！！！！！！！」

光が、全てを圧倒的に覆い、この町にて解き放たれた黄金の聖光は天を貫き、海を越えた先でも見られたと言われる。

それなのにこの圧倒的な光は一切の音を立てる事無く、静謐に輝きを増すだけだった。

そして、光が集束し晴れてくると、まるで天使がこの世界に降りてきたかの如く光がキラキラと舞い踊り、ダイヤモンドダストよりも眩く、レズブランド光線よりも神秘的に、虹よりも美しく輝いていた。

「終わった、な」

「――ああ」

いつのまにか隣に来ていた旅人装束の男に話しかけられ、アルトは短く答える。

「あれだけの生命エネルギーだ、しばらくは立つのも辛いだろうが我慢しな。召喚獣すら吹き飛ばしちまう無茶苦茶な威力だ。反動がない方がおかしいんだからな」

そんな男の言葉にアルトは、小さく笑って返すだけだった。

「私は私の『誇り』のために闘っただけだ。それでユキも……あの少年も納得してくれるさ」

「あの少年？」

旅人装束の男が分からず言葉を返すが、返事はなかった。

「ま、ゆつくり眠ってなつて。残党も今の光と召喚獣の消滅をみたら逃げ出すだろ。それにお前の奥さんも、今言つた少年つてやらも多分駆けつけて来んじゃねーかな？」

そして、旅人装束の男はアルトに背を向けこの場を去る。

「んじやな、騎士王。縁があつたら、また会おうぜ」

テロ開始から1時間後、騎士王アルト、騎士学校生徒フェイト、旅人装束の男、そしてゲート突破に死力を尽くしたレイとリードの活躍によって、無事終息を迎えた。

終息

周りの音が何も聞こえない。それでも暖かい光が体に染み渡っていることだけは感じられる。

まだ目の前が暗く、何も見えない、音を聞き取る事も、土の臭いを感じる事も、風に触れる事もできない。

それでも、体が何か暖かいもので満たされ、それが自分と世界を繋ぐための絆だと分かる。

行こう、私はこの暗闇の中にいる訳にはいけないのだから――

「う……」

目を覚ますと私を心配そうに覗き込むユキと、両手から私に光を流し込む少年騎士フェイトの姿が見えた。

「アルト、アルト？聞こえますか？私です、ユキです」

まだ瞼が重く、体も言う事を効きにくいが愛する者の呼びかけをこれ以上無視する訳にもいくまい。

「聞こえているさ、……ユキ。勝ったよ。――ただいま」

その可憐な瞳に浮かぶ一累の雫が、どれだけ心配をかけたのかが分かっている。

「おかえりなさい。アルト」

公然の場でないとユキは思っているのか、普段人前で呼ぶ時の敬称が抜け落ちてしまっている。

隣にいるフェイトはそんな一人の人間として、女として振舞うユキにきつと気付いているのだろうが、涙にも呼び方にも気付かなかつた振りを通して続けている。

君は立派な騎士なんだな。そう安息し、私もそれならば一人の人間として、男として愛する妻に騎士王ではなく、国王でもない、アルトとして言葉を返そう。

「ただいま、ユキ」

フェイトは治癒魔法を終えると、アルト達の邪魔にならないよう声が聞こえない、それでも2人に何かあった時に直ぐ駆けつけられる距離を保ち、辺りの警備を務める。

『あーあー、愛し合う人達ってなんであーも見てて羨ましくなるのかね。それに美男美女過ぎて見てたら惚気に当てられそうだし』
最もフェイトは義務を果たすと同時に、2人の甘い空気に当てられただけでもあった。

「やっぱ俺だけのお姫様を見つけよう。ウン、でいつか今日のお二人みたいな感動的でドラマティックなストーリーに出逢ってみたいな」

そんな妄想垂れ流し状態の独り言は、幸い辺りに人がいないため聴かれずに済んだ。

そして10分近く経っただろうか。2人はこちらまで近づいてきて「ありがとう。国を代表する王として改めて礼を言わせて欲しい。本当に助かった、どうもありがとう」

フェイトは慌てて膝を付き、恭しく頭を垂れアルトからの賛辞を受け取った。

「勿体なきお言葉。此度のアルト王の御活躍からすれば微々たるものですが、お褒めの言葉を頂き至極恐悦につかまつります」

そんな横からクスクスと忍び笑いが漏れてくる。……絶対にユキ姫だ。

「フェイト、出来れば私達は貴方と対等な関係を持ちたいのよ。貴方には騎士としての誇りもあるし、そう簡単にはいかないでしょうけど、私達はそんな堅苦しい関係でいたくはないの。今回私達の不始末を手伝ってもらったのは事実だし、貴方の貢献は誇張なく大きく優れたものだった。それに何より私を抱いたのは両親とアルト以外初めてなのよ?」

「ほう、ユキを抱いたとはどういうことかな？フェイト君？」

「えっ？！ゆ、ユキ姫？！そんなあれは緊急事態というか、半分ユキ姫から――」

「まあ！！女性の私から男性の貴方に抱きついたと？それは男性としての威厳も誇りも無いのでは？」

「な、なんでそんな話になるんですか！？というより――」

「そう、問題は何故ユキを抱きしめたか、だ」

「勘弁して下さいよ……」

この重たい戦場の空気を一時的とはいえ、吹き飛ばすための出汁にされたのは重々承知だが、そんな道化でも今はいい。

2人が笑い、俺も悪い気はしないから。

きつとこんな事今まで幾つも乗り越えてきたんだろうな。だってこんな時に笑いを思い出させてくれるなんて、よっぽど強い人じゃないと戦火を嘆いて立ち止まってしまっただから。

「それでフェイト、真面目な話に戻って済まないが今後について話させてもらって、構わないかな？」

アルトが幾分畏まって話そうとするので、フェイトは再び膝を付き拝聴しようと態勢を戻したが、ユキが両手を腰に添えフェイトを立たせたので、立って聞け、という事だろう。

何故かユキは上機嫌な笑顔のまま、困った顔をしている。器用な表情が出来る人だな、と思いながらもアルトの話を聞く。

「まず騎士学校ナイトオブブラウンドに行き今回の件について説明するつもりだ。残念ながら学校での講演の時間は取れないだろうから今回は見送らせてもらうつもりだ」

「えっ？もしかして今回来国されたのはナイトオブブラウンドにて講演されるためだったのですか？」

フェイトの問いにアルトが短く首肯し、ユキが補足する。

「国際親善も兼ねているのよ。それに校長がアルトと顔見知りでね、何年も前から呼ばれていて今年やっと来れたのよ。興味深い人材も

いるって聞いてたけど、もしかしてフェイト君？」

ユキが思い出している最中で思い出し、フェイトに試しに聞いてみるが、

「いえ、俺は魔法の力は隠して入学したので俺ではないかと……」

「そう、ちよつと残念」

やっぱり少女のような人だ、フェイトは思った。

「ウム、それでその後は国と国の話しあいになると思う。規模が規模だけに隠そうにも隠せないし、穏便に終わらせる事も難しそうだ。恐らく私達は直ぐ本国へ帰る事になると思う。――そこでだ、君については色々聞きたい事も話してみたい事もたくさんある。どうだろう？ 私が推薦するからこちらの国に来てみないか？ 騎士としての教育機関もナイツオブラウンドに劣らない施設もあるし、卒業後、もしくは卒業を待たずしてもいいから私の近衛騎士団に入団してもらいたいとも思っている。どうかな？」

アルトのこの提案にはフェイトは心底驚いた。

本場の環境、約束された栄光ある騎士団への入団、それに何よりアルトとユキに会いやすいという嬉しさ。それがこの提案に全て詰まっているのだ。

とつさに答える事が出来ない。人は宝の山に予期せず遭遇した時思考が固まり動けなくなるように、フェイトの思考も凍りつきそうだった。

「ね、私も大歓迎！ というより施設に入らず直ぐ入団したら？ 私の話相手を務めてくれると嬉しいし」

ユキからも後押しがされ、それに歓迎されている。

今この場で断れば将来全てを賭けても巡ってこないかもしれない、大チャンス。

この場に親や妹、先生や友達がいれば間違いなく『行け』というだろう。

第三者の視点から見れば破格の報償だ。けれど――

「ありがとうございます。お2人のお誘いはとても名誉で光栄です。

――けれど私には身分が過ぎた申し出、それに私はあの騎士学校で学びたい事があるのです。本当に申し訳ありませんが、辞退させて頂きます」

王からの申し出を断つたとなれば、世間からみれば大きな波紋を引き起こす事は確かだし誘ってくれた王と姫の面目も丸潰れだ。

下手したら不敬罪で投獄とか死刑とかもありえるかもしれない位、フエイトが今断つたのは失礼な事であった。

「フム、理由を聞いてもいいかな？」

しかし、アルトは気にした風もなく、ユキは少し残念そうに瞳を少しだけ伏せてこちらの続きを待つ。

「ハイ、私の夢は自分だけの姫を見つけ、その姫を生涯を懸けて守り抜く事なんです。――それには今私が持つ魔法の力ではなく、騎士としての力を求めたいと思っています。勿論アルト王やユキ姫に仕える事は至極の幸福となり得ますが、私は自分の夢を追いたいのです。そのために必要な事が、この地にあるナイツオブラウンドで学ぶ事だと思います。自分の育った国、育った地で確固たる自分を確立し、その後に然るべき時に姫と巡り合える。それが運命だと信じているからこそ、此度のお話を御断りさせていただきました」

アルトとユキはしばらく見つめ合ったまま、微動だにしなかったが、しばらくすると改めてこちらに向き直った。

「面白い、そういう考え方が嫌いじゃないよ。分かった、君は君だけのお姫様を見つけたすとい。私の横にいる様なおてんば姫が運命だと苦勞するぞ？」

「ちょっと？アルト今の言葉国に帰ったらキツチリ問い詰めますからね。……全く。でもフエイト？私達は貴方が卒業する前でも後でもいつでも歓迎するわ。入国って意味だけでも入団でも、ね。だからいつでも気軽に訪ねてきて頂戴。――貴方が来てくれる事を首を長くして待っているわ」

「その通りだ、我々は君を客人としてもてなす事を誓おう。いつでも構わない、君は大切な友人なのだから、いつでも訪ねて来てくれたまえ」

ああ――格が違うな。フェイトはこの日交わされた言葉を一言一句間違える事無く、ずっと覚えていいるだろう。

理想とする騎士と姫の姿をこんなに間近に感じる事ができて、フェイトは今日という日を言葉では言い表す事ができなかった。

そしてこの2人にはいつまで経っても適わないな、と思った。

それでもいつか――自分だけの姫を見つけ、将来を誓い合った後必ずこの2人に紹介に行こう。

それよりも前に何度かは顔を見せに行こう、きっと寂しがりなユキ姫も、友と認めてくれたアルト王もフェイトの来訪を心待ちにしているだろうから。

「ではこれからお2人は騎士学校に向かわれるんですね？騎士学校は東ゲートの方向にあります。――あ、そうだ。ちょっと用事を思い出しました」

2人をもうこの際バレているだろう飛行魔法を隠す必要はないだろうと思い、飛行魔法で送って行こうと提案したのだが。

「どうかしたのか？」

言葉途中での言の翻しは気になったのだろう。アルトが聞いてくる。

「いえ、今日この町に騎士学校の友人と魔法学校の友人が来ておりまして、その2人は恐らくゲート解放に向かったと思うんで探して行きたいのですが」

フム、とアルトは軽く頷く。

「なら東ゲートまで一旦飛び、そこで私達も探すのを手伝おう。こんな状況だ、人手がいるだろう」

確かに人手あればそれは助かるが、残党が紛れている可能性もあるし何よりアルト王達がここにいる事を知った町の人の反応が予測できない。

ファンが殺到するなら可愛いもので、町の現状と結び付けられれば最悪石を投げつけられるだろう。

そうなつては問題だし、外交問題が更に拗れてしまう。

「心配いらないよ」

そんなフェイトの不安はユキの一言で、かき消される。

「私達も人の心を持っているんだから、この町の人達に書面だけでお知らせして謝罪もしない、なんて事はしないの。敵がこの町で騒ぎを起こしたのはさすがにどうにもならないけど、少なくとも私達が騒ぎの種になってしまったんだから、頭を下げなきゃ」

「その通りだ。確かこの町には東西南北にゲートがあり、全ての人が東ゲートにいるとは考えられないが、それでも少なくとも東ゲートに集まっている人達には謝罪をするべきだろう。これはフェイト君が東ゲートで降りると言わなくても、我々が降ろしてくれと頼んだ。だから気にする必要はないよ」

アルトもユキも大人である以上に、一国の王と姫なのだ。その2人が決めたのなら、これ以上フェイトが何かを言うべきではない。

それよりも騒ぎの終息と、謝罪を速やかに伝えた方がいい。

「――分かりました、では飛びますよ！リリアウト！」

「――い、レ……。レイ、起きた？」

ふと目を覚ますと、そこは町の建物がなく代わりになだらかな道が

続く緩やかな丘に眠っていた。

「あ……あれ？ここ、どこ？」

キヨロキヨロと辺りを見渡してみるが、人がそこかしこに溢れている。

そして少し遠くに東ゲートが見える。ということとは

「町の外、東ゲートを少し行った所」

リードが説明をしてくれる。あれ？でも私は銃弾に貫かれて……
- そう思っただけ確認してみようが、痛みは弾がかすった場所や腿に受けた銃弾だけで、他に体を貫かれた感触もなく手で触ってもそれらしいものは見当たらない。

「レイ、気絶しちゃった後変な男の人が助けてくれた。その後は私の魔法でドッカンドッカン」

変な男が誰なのか分からないが、命を救われたことだけは分かる。死を覚悟し、本当に目の前まで死が迫っていた。

それを助けてくれた顔も名前も知らない誰かにレイは感謝をしていた。

「で、町の人と逃げてたら突然後ろが光って、光が収まったら召喚獣が消えてた」

「……召喚獣が？」

光の正体は分からないが、なんらかの手段によって召喚獣は消えたという事だ。

一体どんな手段なのか正直想像もつかないが、召喚獣という最大の脅威と恐怖が消えたことにより、皆逃げるのを止め、町に戻るかどうか逡巡しているのだろう。

「だからレイが目を覚ますの待ってたの。偉い？」

まるで子供のように自分の主張をするリードがとても可愛く、同い年なのにレイはリードの頭を撫でた。

「うん、偉い偉い。リード良くやったよ」

「えへへ」

ピアも昔はこんな風に撫でて、こんな風に笑ったものだ。 - やっ

ぱり、帰ったら真っ先に謝ろう。

そのままリードを撫で続け、その間回りから聞こえてきた事を総合するとやはり召喚獣が消えた事も確かだし、追手もないようだ。ようやく安心する事ができ、短くないため息を漏らすと同時に、風切り音と共に何かが飛行してくるのを確認した。

「……?! 飛行魔法! 3人いる、リード、気をつけて!!」

撫でるのをやめ、鞘に戻っていた自分の剣を確認すると上空を睨みつけ一瞬も目を離さないようにする。

「フェイト……」

と、隣から間延びした声が響いた。

フェイト? フェイト? ああフェイト? 空を飛んでるのがフェイト? 遠くてよく見えないが、あの赤い制服は騎士学校の物だ。自分も着ているのだし間違えようもない。

「フェイト?」

空中に止まった3人は、隣で手を振っているリードに気付いたようにこちらに降りてくる。

「確かにフェイトみたいね」

高度を降ろしてきて、ようやく顔が見えてきたので確信を持てた。ハテ? 横にいる男女もなんだか見た記憶がある気がする。知り合いではないがどこかで見た顔、それもすごい有名なだった気がする。そしてフェイト達3人は回りの注目に目もくれずこちらに降り立った。

「リード! レイ!! 無事だったか!!」

降りたと同時にかけよってきて、リードの手を握るフェイト。リードも子供みたいにはしゃいで、フェイトに手をぶんぶんと振られるままになっている。

やれやれ、と思いつつフェイトに遅れ続いてくる2人に視線を戻すと――

「！！！？？」

あまりの衝撃に顎が外れそうな程口を開けてしまった。この場に知人がいなくて良かった、フェイト達はレイを見ていなかったようだし不幸中の幸いだ。

と、とにかくその2人に見覚えがあったのは当然だった。

騎士を目指すならば、小学生でも知っている程の有名人。騎士王アルト・アヴァロンとランドプリンセス・ユキ・アヴァロンその人達だった。

「ふえ、ふえ、フェイト……ト？あれ……？」

まだ絶句が直らないが、それでも開いた口は少しだけ閉まった。それでこの2人と一緒にきたフェイトに事情説明を求めたが、

「おや、君達がフェイトの言っていた友人か。初めまして、アルト・アヴァロンと申す」

「同じく、ユキ・アヴァロンと申します。どうぞ、よしなに」

先手を打たれてしまった。……いや、そんな場合じゃない。騎士王とランドプリンセスに名乗らせておいて、自分が名乗り返さない等非礼にも程がある。

素早く膝を折り、地面に頭が付くほど深く頭を下げ自らも名乗る。

「ハッ、申し訳ありません。不肖、私騎士学校ナイツオブランド所属1年生、レイ・ハルトと申します。以後お見知りおきを！！」
決して頭をあげず、王達の次の言葉を待つ。

回りからもザザッ！！と膝を折り頭を垂れるものや、深く正座をし頭を下げる者等がいたが、皆一様に2人に礼を取っていた。

唯一の例外は立ったまま、辺りを見渡すフェイトだけだった。

子供っぽく見えるリードですら、この2人に対して礼を弁えているのだ。

「皆、面を上げなさい」

ユキ様に命じられ、ようやく面をあげた全員が2人に張り付かんばかりに注目していた。

「まず戦いの終わりを知らせよう。召喚獣ヘカントケイル、及び敵兵、敵兵器の沈黙を確認した。よってひとまずは安全宣言とする」その言葉に皆一様にほっとし、安堵の笑みを浮かべる。

召喚獣が消えたとはいえ、キチンと知らされるまではやはり不安だったのだ。

「それと同様に、今回の騒動は西グラビアナが差し向けた刺客が我々を狙った者だと判明し、首謀者及び実行者の処分を行った。……だが、私の不徳の致す所により、異国の、皆の故郷を踏みにじらせてしまった事を深く詫びる。――申し訳なかった」

アルト王が町の人全員に向け頭を下げ、王女もアルトに続いて頭を下げた。

あのアルト王が頭を下げたのだ。騎士王として例えられ、王としても清廉潔白を貫き、民心の理想の王たる王が自分達を相手に頭を下げたのだ。

それがどれだけの意味を持つのか、頭を下げたアルトも、ユキも、町の人も理解している。

……だからこそ、誰も言葉を発することができない。

アルト達が言葉をしゃべらなければ、私達はずっと喋れないままだろう。

そんな空気を察したかのように、グランドプリンセス・ユキが言葉を発する。

「皆には大変な迷惑をかけました。我々はこれより騎士学校に向かい、此度の騒動の元凶たる西グラビアナの処分をこの国と協議する予定になります。更に先の事にはなりますが、我々も騒動の元凶足る一部であるため、復興にかかる費用の全額負担、復興労働の派遣を提案するつもりであります。此度の戦乱に巻き込まれ、家族を、友人を、愛しき者を亡くした者達へのせめてもの謝罪とさせていたきたい」

再びユキが頭を下げる。

本来、一度でも王族が頭を下げるだけでも大変な事態なのだが、そ

れが二度となればもはやこの謝罪はポーズでもパフォーマンスでもなく、本当に悔み、追悼し、心からの謝罪だと分かる。

そんな心を示されれば誰だって思う。

そもそも戦争を起こしたのは西グラビアナの独裁で、アヴァロン国は巻き込まれただけ。

それでも民のために謝罪し、死者へ涙を供養する姿は、民衆が求めた理想の王族なのだ、と。

混乱というより、動揺が走って終わった国王と姫の謝罪はそこそこに切り上げられ、今アルト、ユキ、リード、レイはフェイトに抱えられ飛行魔法によって騎士学校を目指している。

勿論、レイはフェイトに聞きたい事が山ほどあったし、リードは特に何も言わないがきつと聞きたい事がフェイトにあるのだろう。

しかし、アルトとユキと一緒に掴まっているのであれば下手に口を開けない。

王達の前で世間話等出来ようものか！！

……そんな緊張が空気を重くしたのか、騎士学校に着くまで会話はなかった。とは言っても飛行魔法は早いので1〜2分で着いたというのも理由の1つなのだが。

既に日も沈み始め、校舎に残っている生徒は殆どいない。

フェイトは校舎の入り口付近に着地すると、校長室までアルト達を案内した。

「ありがとう、後は大人が解決する」

「フェイト、其なたの協力、誠に大義でありました」

と、2人はフェイトに改めてお礼をいい、校長室に入ってしまった。本来こんな名誉な事、膝つきで拝命するようなものだが、フェイトは敬礼だけで誉れを頂いていた。

- - いったいあの戦火の中何があったのだろうか？

そんな疑問がついに肥大化し、アルト達もいなくなったことにより、校長室の前でフェイトに尋ねていた。

「フェイト、一体どうなってんのよ？」

すると、フェイトは少し困ったような顔をして、

「騒ぎの中心があのだの2人で、西グラビアナの侵略ってのは理解したな？」

それにはレイもリードも頷いて首肯する。

「で、だ。さすがのアルト王も罨にかけられ負傷していた。そこに通りがかった俺が騎士学校の生徒と知り、協力を要請された。それで俺がユキ姫を護衛し、その間にアルト王が召喚獣ヘカントケイルを倒した」

「嘘っ!？」

思わず声が大きくなってしまい、リードとフェイトに「シーッ!」、と注意される。

「…………ごめん、それで？」

「ああ、その後はさっきアルト王が言った通り町の皆に謝罪と、ここの打ち合わせのために俺が護衛兼送迎した」

「…………」

大雑把だが何とか理解は出来た。いや、細かい部分はとてもじゃないが全く解決してないが、今これで満足しておこう。

明日以降、フェイトも自分も落ち着いてから改めて聞こうと思ったと、それまで喋らなかつたリードがフェイトに話しかける。

「フェイト？飛行魔法使えるって喋って良かったの？」

…………リードは前からフェイトが飛行魔法を使えるのを知っていた？魔法学校卒業レベルを持つ飛行魔法を使えるなんて特異なフェイトを知っていて、それでも普通に友達だったと？

確かにリードも天才派だとは思うが、フェイトはそれを通り越して特異と呼べる。

「ああ、もう吹っ切れた。これからは魔法を使える事を隠さないし、堂々と騎士を目指す」

レイは驚きで目を睜った。

魔法師を目指せば将来安泰確実なのに、フェイトはそれがいらない
といい、騎士を目指すと言っているのだ。

フェイトの物差しは、レイの物差しでは決して計ることが出来ない
とぼんやり理解した。

――しばらくして

「フェイト・セーブ。入りなさい」

と、校長の声が校長室から響いてきた。

「ハッ！」

フェイトは勢いよく返事をし、リードとレイに軽く目で合図してか
ら部屋へと招き入れられた。

「君がフェイトか、正直顔を見るのは初めてだが、私がナイツオブ
ラウンド校長、ライト・ローリングだ」

「ハッ！騎士学校ナイツオブラウンド1年、フェイト・セーブです」

フェイトは軽く膝を折り、頭を下げる。

「いや、そんなに畏まらなくていい。話しというのは私からではな
く、アルトからなのだから」

そう校長から言われ、態勢を戻し背筋を正す。

「フェイト君、今回の事で我が国への招待は辞退したが、それでは
この騒動の鎮静に最も協力してくれた君への面目が立たない。よっ
て君に褒美を検討したのだが、どうかね？」

フェイトは驚きで、目が点になりかけたが、直ぐに思考を戻し言葉
を探す。

「え、えー、あ。ハ、ハイツ！騎士王、グランドプリンセスより賜
りし賛辞すら身に余る光栄！これ以上の報償など――」

「フェイト、謙遜も行き過ぎれば酷き物となると知りなさい。あな
たは間違いなく私達のために貢献しました。これを断るのは逆に不
忠となります」

ユキの鋭く厳しい言葉に、フェイトは逃げ場をなくし、恭しく膝を折った。

「大変失礼致しました」

「ああ、ユキ、あまり苛めるなよ？・・それはそうと、これを渡そうと思う」

ふあさつ、と柔らかな衣ずれの音と共に目の前に差し出されたのは、アルト王が身につけていた空色、のような水色の淡いマントを授かった。

「これは湖の妖精が奇跡の水から織ったと言われる妖精のマントだ。これを君に授ける」

フェイトは差し出された、とても淡く、綺麗な色合いのマントに目が釘付けになった。

それはとても神秘的な物であることは間違い無く、魔力がふんだんに込められたこの世に1つだけの貴重品だ。

「確かに受け賜りました。アルト王、言葉に尽くしきれない感謝をここに――」

フェイトは黙礼にて、アルト王に全身で礼を尽くした。

そして、その横からふわりとした声が響く。

「私からは、其なたに騎士の称号を授けます。貴方だけの称号、それを今日から胸に刻み生き抜き、よりたくさんの人々を守る為に力が振るわれる事を望みます」

グランドプリンセスからは、正式に騎士の称号を授かった。だからこそ、第三者を含むこの校長室に呼ばれたのかもしれない。

「騎士の名は『赤魔騎士』。世界にたった1人しかいない、学生でありながら魔法を使いこなし騎士王とグランドプリンセスを救い出したのです。どうでしょうか？」

フェイトは感激で泣きそうだった。この2人はこの称号にありつたけの想いを込めて授けてくれた。

救ってくれた恩、今日この日知り合えた奇跡、そして永遠の友情と思い出を、全てを集約して付けられたこの称号は、フェイトの『誇

りだ。

「……素敵な、とても素敵な称号を、ありがとうございます」
フェイトは嬉しくて泣きながらやつの事で返事を返せた。

アルトは満足そうに頷き、ライト校長は誇りを感じ、ユキは

「……優しくフェイトを包み込むように抱き締め、涙が止まるま
でずっと温もりを与えてくれた。」

ディーバ

1週間前、とある边境の国ローウェンの町において西グラビアナという国が、戦争目的のためアヴァロン国、国王及び王女の暗殺を議論んだ。

この事件は瞬く間に世界中へと広まり、大きな波紋を呼び、未だ事件全貌の解明や西グラビアナ国の解体は済んではない。

それと同時期に、ある有名人も表舞台から姿を消した。

名はディーバ。至高き音色の歌姫と呼ばれ、その歌声は世界中に響き渡り、その歌声は世界中を魅了し、その歌声は世界中から求められた。

彼女は事件のあった翌日から公演の全てをキャンセルし、関係者はその対応に追われていた。

記者達への発表によれば、故郷が襲われたため心労が溜まり公演に出演できるコンディションではないため、と報道されたが、

実際には、歌姫は劇場からも、スタッフの前からも姿を消していた
- - -

「おつす、フェイト」

「おはよ、相変わらず早いな」

ここは騎士学校ナイツオブ라운드의正門前。早朝模擬訓練のため、フェイトは友人であるゲイトとペアを組み練習しようと思ったため待ち合わせていたのだ。

基本的に早朝訓練も、夜間訓練も個人の采配だが、現実騎士を目指すそうと思うのならこのように早朝も夜間も訓練に費やさねば騎士という華の職業に届くことは出来ない。

とはいえ、メジャーなのは素振りか走り込みだ。

早朝では頭が働きのくいので、無理に複雑な運動は難しいため武器

を振るう調整や体力作りに当てられる事が多い。

逆に夜間は日中の訓練に授業にでへトへトなのは間違いないため、軽い訓練、つまり素振りや瞑想の他に武器の手入れ、もしくは人目が減るため新技の開発や特訓等にも利用される時間だ。

しかし、フェイト達が早朝から行おうとしていたのは……

「もうあいづら来てるぞ、ストレッチしてたし俺より早かったぜ」
「うっそぉ」

フェイト達が待ち合わせに指定したのは朝の4時30分、友人のゲイトは律義に15分前に来る性格なのでフェイトもそれに合わせ12〜3分前の4時18分にここに着いた。
だが、相手方はそれよりも更に早い時間に来ていたということになる。

「いくら3人共寮だからって早すぎだろ……普通の朝練なら5時30分位からなのに」

あくびを噛み殺しながらフェイトとゲイトは校庭へと向かう。

この学校敷地は24時間開放されており、校庭の夜間照明や、事前に申請しておけば仮眠所も使える。

昔は夜な夜な新技開発に打ち込む生徒がいるあまり、朝になったら地面が挟れていたなんて話もある位だ。

ちなみに当直の先生も、気が向けば訓練に声をかけて付き合ってくれる先生もいるらしい。

夜間に解放されているからとはいえ、ここが犯罪の温床になった事は1度もない。

何せ怖い先生が常に睨んでいるのだ、元騎士やギルドに所属していたメンバーに立ち打ちできる者はそれこそ騎士か魔法師かギルドのメンバー位で、一般の不良生徒が100人徒党を組んでこようと勝てる相手ではない。

そんな雑談を交わしつつも校庭に辿り着くと、そこには朝の闇とわずかな光に照らされる2人の少女が目映った。

ピア・ハルトとレイ・ハルトだ。

名前の通り2人は姉妹で双子らしい。眩いばかりほのめく金の髪に意志の強さを表すような紅蓮の瞳。

ピアはショートでレイはロングヘアと髪形でも区別は付くが、顔だけではちよつと見分けがつかない程似ている。

もつとも、背丈も2人で異なりレイが高くスレンダーな体型に対し、ピアは小柄で豊満なバストを持つ。

2人共、フェイトの大切な友人だ。

1週間程前の事件をきっかけに、レイはこれまで妹を憎んでいた感情を清算し、ピアに頭を下げたという。

ピアの方は怒るでもなく、ただ嬉しくて泣いたらしい。どんな感情が2人の間にどれほどの期間存在していたのかは結局分からず仕舞だったが、姉妹仲が良ければそれ以上は何も言うまい。

「フェイトもゲイトも、遅いわよ！」

「こつちは退屈で2度寝しちゃう所だったんだから！」

フェイトとゲイトは顔を見合わせ、プツと吹き出した。ゲイト終始詳しくは知らないままだったが、レイから姉妹の仲が悪かったのよと聞き納得した後何もなかったかのように姉妹1セットで扱うようになった。

「全く、準備はいい？時間なんてあげないんだから、直ぐに始めるわよ」

「姉さん、んじゃ作戦通り行くよ！」

「おいおい、敵さん準備万端だぜ？フェイト、こつちの作戦は？」

「ない、やるぞー！」

そうして、早朝にしてはとても珍しい2対2の模擬戦が始まった。

- - -

「ハア……ハア……私達の……勝ちね」

「負けた……」

「ちくしょ……作戦ありと、……作戦なしって……卑怯だろ」

「ハア……ハア……遅刻する方が……悪い……のよ」

厳密に言えば遅刻でも何でもないのであるが、結果として姉妹の作戦に嵌ってしまいフェイトチームは負けた。

こんなに疲れている理由は、まだ朝の闇が残っている時間だったため相手を見失っては追いかけるという鬼ごっこ状態になったからだ。端的に言えばゲイトの武器のランスは重量系の武器にカウントされるもので、校庭を四方八方縦横無尽に走り回られればゲイトの持ち味が全く活かせず完封される。

加えて、フェイトも魔法なしでは体力的に平均値のため優秀生のレイは捉えきれず、逆にゲイトと離れた所をレイとピアに挟撃され撃破されてしまった。

「でも、いい運動になったわ。今日も学校頑張ろうつと」

およそ1時間近くも戦っていたためか、校庭には朝練のための人が集まってきている。

こんなに人がいては模擬戦は危なくなるので、早朝に集合したのだ。「さつてと、私達はシャワー浴びてから仮眠室に行くわ。フェイト達は？」

ピアが尋ねてくるが、実はこの後フェイトはゲイトの特訓に付き合う予定だった。

「いや、俺達ばてたからもうちょい休むわ。先行っててくれ」

と、ゲイトが代わりに答えた。

「んじゃゲイトも頑張りすぎないでね。フェイト、また後で」

レイはフェイトと一緒にのトレーニングスケジュールが組まれているため、後で一緒になるのだ。

1年間は個人の資質にあったトレーニングが取られるため、クラスの仲間や友人と会うのはこうして早朝、放課後に集まるか、座学の授業中だけである。

フェイトとレイは一緒だが、ゲイトともピアとも一緒にいられないのは4人にとって残念でもあった。

2人を見送り、ゲイトが立ちあがる。

「んじゃフェイト、始めるか」

「おう」

ゲイトがこうしてフェイトに頼むのは新技の開発だ。

フェイトはそんなに気にする程ではないと思うのだが、ゲイトは初日の絡んできた貴族のナイトや、レイ、ピア、フェイトよりも武器の扱いや実践力に劣る。

1年生の中で見ればそれほど劣っている訳でもないのだが、他の皆と肩を並べていざという時に備えたい、という気持ちが強いためフェイトはゲイトの心意気に打たれこうして付き合っている。

「さあーて行くぜ？男子三日会わねば活目してみよ！ってな」

「昨日もあったから、そんな爆発成長はないと思うけどな」

そんな軽口を叩きあいつつも、2人は周囲の朝練に混じって体を動かした。

結局2人はシャワーを浴びる時間すら惜しんで、訓練に費やし午前中のトレーニングに入る。

が、それは校舎中に流れた放送によって中断された。

「皆さん、おはようございます。生活指導のバイアス・セブンです。本日はトレーニングに入る前に各クラス毎にHRが入ります。繰り返しします、本日はトレーニング前に各クラス毎にHRが入ります。皆さん、速やかに各教室に移動するように。以上、爽やかな朝に爽やかな先生バイアスからでした」

最後の冗談は全校生徒がスルーしている中、フェイト達は首を傾げた。

「なんか事件か？」

隣のゲイトが声をかけてくるが、生憎見当がつかない。

「分からん、とりあえず教室で待つか」

そして教室に移動すると、先に待っていたピアを見つけ側に近付く。

「2人共随分遅くまで頑張ったみたいだね……汗臭いよ」

ウツ、と2人は息を詰まらせる。どうせ個人トレーニングだから、とシャワーの手間を惜しんだのが今日は裏目にでた。

「そんな鈍感なお2人さんでも、私は見捨てないから感謝しなさいよ？」

と、邪気のない笑顔で言われれば苦笑を返すことしかできない。

「そりゃどーも、ピアだって寝ぐせ残ってるぞ」

ウソッ！と絶句したように慌てて自分の髪を手櫛で直しつつ、カバンから手鏡を出して確認するが、髪の乱れは見当たらない。

「ピア、今はゲイトの嘘だ。ピアの髪は乱れてないから安心しろ」と、フォローなのか説明なのか分からない言葉を発すると、ピアはゲイトを睨みつけた。が、ゲイトはどこ吹く風と知らんばかりに顔を逸らしている。

「ゲイトツ！！バカ！！」

そんな雑談もそこそこに、担任である筋肉が服からはみ出そうな程マッチョなギルバードがやってきた。

クラス中が今日のHRについて興味を示し、入ってきたギルバードを注視するが、ギルバードは堂々と教壇の前に立ってからようやく話した。した。

「先日この学校から近くにあるトゴレスの町がテロの現場になった事は、皆の記憶に久しいと思う。」

そう、1週間前騎士王アルト、グランドプリンセス、ユキが標的にされ、召喚獣まで用いられた大規模な暗殺……というか戦争は当事者である騎士王アルトと、表上名前を伏せられたフェイトの活躍によって鎮静化されたのだ。

だが、フェイトが飛行魔法を使い回り、アルト王とユキ姫と一緒に行動していたことは町の住民から証言され、噂レベルではなく確信としてフェイトがなんらかの武功を建てたと、既に騎士学校では周知されていた。

その際アルト王からもらった妖精のマントや、授かった称号『赤魔

騎士』は一緒にいたレイとリードには知らせ、そこからピアとゲイトにも伝わっている。

最も、他に知っているのはアルト王とユキ姫、それに校長であるライト・ローリングだけだ。実際この他に情報を知っている者はいない。

それはともかく――

「そこに皆は知らないかもしれないが、とある有名人の目撃情報が出てな。保護のために我々教師が動員される事となった。名前や個人情報開示できないが、重要人物だ。それに先日戦乱が起きた地でもあるため、付近の我々に搜索保護命令が下った。よって今日の授業は全て休講とするため、各自で自習するように！以上だ」

そう伝えたと、ギルバードは忙しくなく教室から出ていってしまいクラス中が興味で歓談に移る。

「有名人だつてよ？誰だろ？」

「多分世界規模の人でしょ？目的は知らないけど、あの町の戦乱に花を手向けにきたのかも」

そんな友人同士の会話にフェイトは加わらず、聞くだけだった。

が、突然教室に闖入者現る。ズカズカとこちらまで歩いてくる人影は、何を隠そうレイだった。

「あんた達知らないの？つていうかピアも新聞位読みなさいよ……恐らく1週間程前失踪した至高き音色の歌姫、ディーバの事よ」

「……嘘！……！」

と3人同時に大声でハモってしまったため、大分声が大きくなっていった。

レイから鉄拳が飛び3人とも揃って拳骨を頂戴してしまった。

「声大きい！……全く、騎士学校の生徒は殆どが新聞を読んで無いかしら……？」

自分の行動が常識だと言わんばかりに腕を組み、思案するレイだが、間違い無くレイの方が変わっている。

新聞読む程時間がない生徒達ばかりなのだ。レイは中でも一際優秀な成績を誇っているためフェイト達より過酷な訓練をしているハズだが、一体いつそんな時間を作っているのだろうか？

「っていつかレイなんでこっちの教室にいるのさ？クラスの友達は何？」

「……う、うるさいわね！フェイト、後でシメルわよ？」

「姉さんこの前皆同じクラスが良かったって言ってたから、きっと寂しいんだよ？」

まさかの妹からの密告により、レイは更に顔を赤くして動揺する。

「ピア！？今はそんな余計なこと言わなくて……」

「へえ？レイもピアににて可愛いとこあんだな？もつとガサツで偉そうな……」

ズゴン！！

と、凄まじい音と共にゲイトが壁にめり込んでいた。

……手の動きが目で追えなかった。今のパンチ光速を超えてたんじや……

「フェイト、フェイトはゲイトと違ってバカな事を口に出さないよね？」

「っていつかゲイトどさくさに紛れて何私を引き合いに変な事言ってるのよー！！バカ！！」

怖い程笑顔のレイに、こちらも赤くなって辺り散らすピア。

……やっぱ姉妹ですね。

「さて、ここで俺から1つ提案があるんだけど？」

ゲイトも壁から救出され、レイもピアもある程度落ち着いた時点でフェイトが切り出した。

「何？自習を使ってまた模擬戦でもやる？」

「新技開発だよな？」

「折角ゆっくりできるんだから、この前の話し詳しく聞かせてよ」と、皆バラバラな意見だがフェイトは全て却下した。

「違う違うー！！せっかく世界の歌姫がこんな辺境の国に来てくれたんだ。俺らが先に歌姫を見つけて仲良くなるうと思う」

「ごめん、今日のトレーニングノルマ終わらせなきゃ」

「俺今閃いた新技を早速実践してくる」

「私は姉さんについていこ」

「待てーい！！！」

フェイトはナイス提案だと思ったのだが、この友人達は考えもせず即答で却下してきた。

「なんでだよ！？いいじゃん、歌姫ディーバ、皆だって名前も知ってるしその歌声にどれだけの人が集まってくるか知ってるだろ？」

「そりゃ……知ってるけど」

レイが少しだけ歯切れ悪く答える。実際ゲイトは周りの空気を讀んだだけだし、ピアはレイと行動したいだけに見える。ならば、レイを陥落すれば勝機が見える！

「俺の飛行魔法があれば一発だって、もう俺が魔法使えるのなんか皆知っちゃってるんだから今更隠す気ないし、な？な？？」

「……でも先生に見つかつたらどうすんのよ？飛行魔法なんか使つたらそれこそ一発でバレルわよ？」

レイの正論にフェイトは少し押される。だが、負ける訳にはいかない。

「どーせ処罰喰らうとしても俺だけだ、それにレイがそもそもディーバだって知らせてくれたからこそ俺が提案したんだ。俺が姫様を見つけるのが夢って知った上でその情報をくれたんなら、レイは責任を取らなきゃ」

今度はウツ、とレイが押された。レイはなまじ責任感が強いいため、責任、と言われれば弱くなってしまうのだ。

「な？レイだつてそんなニュース聞いていても立つてもいられなくなつたから、俺達のクラスに飛んできちゃつたんだろ？なら決定だな」

「飛んでなんか来てないわよ！」

反論がズレた時点でこの論争の勝敗は、フエイトに傾いた。

「ゴメンゴメン、じゃ決まりだ。早速出発だ、教師より早く見つけないとな」

立ちあがるフエイトにゲイトが続き、ピアも続いて立ちあがってしまつたため、レイも観念した。

「わかつたわよ、でも行くなれば先生に見つからない内にサツサと行くわよ」

最後には委員長ばりに皆をまとめ、4人は自習をほっぽり出して町に歌姫を探しに行く事となつた。

一方町では

ディーバは少しばかり変装し、実家のある場所ですつと立ちつくしていた。

歌姫ディーバの家は西グラピアノにより強制的に戦火に巻き込まれた、このコンコルチエにあった。

近所に住む人はディーバの両親の事も、ディーバの事も知つていたため両親が戦火に焼かれた事をディーバに手紙で伝えたのだが、それからというものすぐさま公演を全てキャンセルし帰国してきたディーバを持て余し気味にいた。

ディーバはこうして崩れた実家の前にずつと立ちつくすだけだが、夜になればいつの間にか姿を消し、また翌日に同じ場所に立ちつくしている。

当初心配して皆で色々話しかけたものだが、ディーバは一言も口を開く事はなく、それが1週間も続いたためとうとう心配して騎士学校に連絡を入れたのだ。

失ったものが大きすぎて、心の隙間が埋まらない。そんなことは身近な人の死を経験したものであれば、思い当たる経験でもある。

しかし、まだ18歳になったばかりのディーバにはこの悲しみを晴らす方法も、この苦しみを消し去る方法も、この憎しみの向く先を止める事も、この喪失感を一緒に想ってくれる家族も、全てが無かった。

悲しくても実感がついぞ湧かず、涙が流せなかった。

苦しくても受け入れて進む勇気は持っていなかった。

憎くても憎む相手は既にこの世には存在しなかった。

そして心の空洞を埋めてくれる、唯一の家族はもうこの世にいなかった。

「お母さん、お父さん……」

誰にも聞こえない程小さな声で、天に呟く。

言葉が漏れた所で誰に聞こえる訳でもなく、ただただ風に流され消えていく。まるで今の自分だとディーバは思った。

フェイト達は飛行魔法によりものの数分で町に着くと、早速搜索を開始した。

「まずは聞き込みかな？」

フェイトが提案すると、皆もそれに頷く。

「バラけた方が効率がいいかもな、それっぽい情報があったら携帯に連絡して合流しよう」

「そうね、なら私は東ゲートから辿ろうかしら」

「じゃ、私もお姉ちゃんと一緒に東ゲート」

「お前ら、人の話を聞け……」

ゲイトがガツクリと肩を落としたので、フェイトがフォローに入ることにする。

「全く、ゲイトがバラけた方がいいって言っただろ？折角4人いるんだ、東西南北のゲートに分かれりゃ丁度じゃないか。――って訳

で俺も東ゲートに行くぜ」

「オイッ!？」

フォローに見せかけた追い打ちだった。

「へいへい、分かったよ!俺ら友達だもんな、なら一緒に東ゲートに行けばいいんだろ!？」

「ゲイトは南ゲートよろしく」

「ふざけんな!！」

レイのからかいにゲイトが憤怒していた。

「という訳で冗談はそこそこに、ちゃんと東西南北で分かれる事、いいな？」

改めてフェイトが場を仕切り直してようやくパーティーは解散となった。

「俺が見つけて吠え面かせてやる!！」

と、フェイト以上の気合を入れたゲイトはいい兆候で、レイも普通にやってくれるし、ピアだって真面目になれば頼りになる。

「んじゃ俺は西ゲートから当たりますかね」

そしてフェイトはためらいなく飛行魔法を使い、西ゲートに飛んでいった。

道中風の魔法を併用して、町の声を拾いながら飛行していた。

言葉は元を正せば音の塊であり、音は空気中を振動して伝わるため風の魔法にて空気中の流れを操作し、自分に音が流れ込みやすくすれば聞き込みせずに見つける事だって可能になるのだ。

そんな中、フェイトが偶然拾った声が

「お母さん、お父さん……」

という、とても、とても小さく、今にも消えそうな切なさ、いや夢い呟きだった。

小さな声すぎてよく感情も情報も聞き分けられなかったが、ただ1つ言えるのは、

「あんな……胸が締め付けられるような声、初めて聞いた」

恐らく魔法を使っていなければ絶対に聞こえないような声。それでもその声はまるで劇場で一流の女優が演じているような、無意識に観客達を引き込むために練習を数十年続けたベテランがやっと発せられるような、胸に来る声だった。

「もしかして……」

そんな声を、もし『意図せずに出した』のだとしたら？それはあらゆる声を知り、あらゆる声の上をいく世界がその名を知っている――

「あそこか」

そしてフェイトはゆつくりと着地を開始し、帽子を目が隠れる程深くかぶり、ジーンズにシャツという軽装を装った人物へと近づいた。

この1週間変わる事なく繰り返してきた毎日。

今日初めて声を出せた、でも本当に小さく誰にも届かない声。

1週間経って、やっと変化した事がそんな些細なことだったなんて

――ディーバは自分が許せない。

声を出した事なんかどうでもいい、私は、誰でもできる涙を流したかった。

人は悲しいと涙を流す、という話のはずなのに私は涙を流すことができない。両親を失ったというこの世で一番悲しい出来ごとを前にして、涙を流せない私は一体なんだろう？

考えれば、考える程、ディーバは自分が怖くなってきていた。

闇の迷路、思考の霧、夢魔の空間、何もない場所。

そんな所にディーバの心は落ちていた。

「こんにちは、ディーバ姫。貴女の心の声を頼りに赤魔騎士・フェイト、お近くまで馳せ参じました」

横からぼんやりと落ちてくる音、不快な音。誰も、構わないで欲しい、私はこのまま消えたいのだから――
？

今なんて音が心に落ちてきた？心の声？私の、声？
さつき、天にたった一言だけ呟いた私の声を……聞いてきたの？
1週間心を閉ざし、立ちつくしてきたディーバが初めて、呼ばれた
声に反応した。

「こんにちは、ディーバ姫。貴女の心の声を頼りに赤魔騎士・フェイト、お近くまで馳せ参じました」

フェイトはディーバの傍まで来ると自己紹介を始めた。

ディーバは、近くからみるとその銀色の髪がまるで異世界からきたのでは、と思うほど吸い込まれそうなウェーブを打ちながらそよ風に揺られている。

それなのに、黒き瞳はまるで底なしの井戸を見ているかのように生気を感じない。

よくみると、髪も本来手入れされてこそ舞台で声を魅了する更なる武器として活躍するはずが、手入れがまったくされておらず枝毛や癖も目立つ。

整った顔立ちも、食事を口クに取っていないのか頬がこけ、女性的な魅力が欠けている所かむしろ暗く、無機質で不気味とすら印象付けられる。

ジーンズの裾についた糸屑も掃われた形跡がなく、不格好に付着している。

フェイトはレイから聞いた情報を思い出していた。

『故郷が戦火に焼かれた。そして……恐らく両親が親友か恋人か。誰かを失ったんだ』

フェイトが声をかけてから優に1分は経つが、ディーバはただただ崩れた家を見つめるだけでこちらに気付いた風は一切感じない。

まるで人形と話しているようだ。――そう、そんな感想すら抱き始めたフェイトは、ようやく表れた変化に目を瞠った。

ディーバが首を動かし、こちらを見たのだ。

随分と遅れたが、言葉が届いて良かった。そうフェイトが安堵したのも束の間だけだった。

「――」

？確かにディーバは唇を動かしてはいたが、何も聞き取れない。いや、唇が確かに動いてはいたが、口が開いた訳ではないのでこれでは読唇術を持っていたとしても分からない。

失礼は承知の上だが、フェイトはもう1度ディーバの言葉を聞き取ろうと頑張ってみた。

「申し訳ありません、ディーバ姫。私の不注意により姫の御言葉がよく聞き取れず。……大変申し訳ありませんが、もう1度御言葉の方、宜しいでしょうか？」

そしてフェイトは魔法をすぐさま発動し、集音に務める。

今度はフェイトの声がちゃんと聞こえていたためか、すぐにディーバは言葉を話し直してくれた。

「私の心の声が聞こえたってホント？」

そう、魔法を使ってやっと聞こえた。

心の声？実際ディーバの声はこれでは魔法なしでは聞き取る事が事実上不可能な位だ。

ただし、ディーバが唇を動かし言葉を発しているという事実は本人も認識しているのだから、心の声、というのがこの實際喋っている言葉とは考えにくい。

とすれば、先ほど上空で聞き取った言葉に違いない。察すると――

「父君と、母君の事……ですね」

フェイトは目を伏せながらもディーバに答えを返した。

ディーバはそれに頷き、フェイトにまた言葉を出す。

「あなたは？」

相変わらず普通にしてたら聞き取れない声だが、これで確信できた。あの、切なく、胸を締め付けた声の持ち主はやはり歌姫ディーバだ。

った。

至高き音色の歌姫と呼ばれるディーバが、何故こんなにも喋れないのか、それは心労の負担に間違いない。

ならば、自分の務めは――

「私は、貴女を苦しみから守りたい。それが赤魔騎士、フェイト・セーブです」

フェイトは姫に忠節を誓う義をこの場で示すため、ディーバに対して膝をつき頭を垂れた。

「姫様、私は姫様をお守り致します。――例え何が原因で何が起こるうとも」

フェイトは、目の前にいる無力な歌姫に忠義を誓った――

騎士って？

フェイトはあれから膝をついたまま面を上げる事をしない。

1分……2分……いや、5分程もしたところか、デীবバの方から声をかけてきた。 - 最も魔法を使わないと聞こえない小さな声に違いないが、

「あの……どうすればいいの？」

デীবバは困ったようにフェイトに尋ねていた。

デীবバの心に近づくため、騎士として忠誠を誓ったのだが、デীবバは騎士の手を借りる事に抵抗があるのかもしれない。

いや、騎士でなくても誰かの手を借りる事にもかしたら罪悪感や、後ろめたさを感じるのかもしれない。

親しい人を亡くした人は、きっと自分だけ救われることに拒絶を感じてしまうのかもしれないな。

そうフェイトは思い、デীবバに対して面を上げ言葉を交わす。

「デীবバ姫、私は誰かの手を借りる事が裏切りや救われたいという罪悪感になるとは思っていません。生きる者は幸せになる権利があるのです。そしてあなたはたった今出逢ったばかりですが、私という騎士が忠節を誓い、支えたいと思えた人物なのです。 - だからこそ、この手を取ったとしても、あなたは誰から疎まれる訳でもなく、ほんの少しだけ心の荷を預けられる御者のような者だとお考えただけだと、存じ上げます」

スラスラと淀みなく流れ出る言葉に耳を傾けていたデীবバだったが、ふと気付いたように首を傾げ、その頭にまるで疑問符が乗っているかのような表情をする。

……あれ？おかしいな？会話が噛み合っていない？？

そんなフェイトの違和感は、次のデীবバの言葉で決定的になる。

「あの……私どうしたらいいか、分からなくて……」

あの説得でもダメだったのか……とフェイトは落ち込みそうになる

が、めげない。

何と言つても今は耳を傾けてくれているのだ。心が鎖に囚われる前になんとしてでも、救い出さねば。

「デীব姫、騎士という者をそんなに大層に考えないで下さい。

確かに私は騎士として称号を授かりましたが、この称号は誰か傷ついている人を守るために頂いた称号なのです。もし、あなたが仮に歌姫でなくても私は手を差し伸べたでしょう」

デীবは、再びフェイトの話をキチンと聞いてくれたが、どうやってもまた疑問符が頭に浮かんでいるようだ。

……なんでこんなに会話が平行線なんだろう？フェイトがようやくそれに気付き始めた頃、デীবもようやくフェイトの間違いに気付いた。

「もしかして」

「あの、忠誠を誓われても私どうしたらいいのか……」

やっぱりそうだった。事は本当に単純に、デীবは騎士の誓いの後、どうすればいいのかが分からなかったのだ。

だからこそ、説得しても疑問符が浮かぶし、会話の食い違う。考えてみれば酷く単純で不謹慎だが笑いそうにもなってしまう。

「……失礼しました。姫？事は単純に、私の手を取って頂くか、御傍に仕える事を御許し戴く言葉を賜るか、等姫が私に対して何でもいいので、応えていただく事がこの儀式の焦点になります。ですから、あまり考えることも緊張なされることはありません」

そう、歌姫とはいえ騎士の世界に疎ければこういった作法が分からず、故に騎士と名乗られ忠誠を誓われても困ってしまったのだ。

ようやく、会話が噛み合ったのか、それともこんな小さな食い違いでお互いずっと勘違いしていたのが面白かったのか、本当に少しだけ頬を緩めこちらを見つめる。

「……私、今は声が出ないからあなたに言葉を贈る事ができないの。……だから、今はこちらで応えさせて」

そうデীবはフェイトに言葉をかけ、フェイトの手を両手で包み

想いが伝わるよう握りしめてくれた。

ようやく、意志の疎通が出来た所でふとフェイトは友人達を思い出した。

情報が出てきたら連絡する、という当初の約束は既に破綻していたが、本人と出逢えたのなら細かい事は気にしない事にする。

「さて、これからのことなんだけど、まずここで黙祷させてもらっていいかな？」

誓いの儀もすんだことだし、フェイトは口調を幾分砕いて話す。

騎士の喋り方を続けては心が傷ついている人の距離を埋めるのが、難しいと思ったからだ。

それに年は3つ上だったと記憶しているため、そんなに失礼だとは思わない。

ディーバは頷くでもなく、断るでもなくフェイトを見つめるだけだったが、フェイトはそれを肯とし名も顔も知らぬディーバの両親に黙祷を捧げた。

1分ほど黙祷を捧げた後、改めてフェイトは提案する。

「よかつたらこの町に俺の友人がいるんだが、会ってみないか？」
そう提案してみた。残念ながらディーバとは年代が違って皆幼いが、それでも自分が赤魔騎士等という称号や魔法を扱えるといった事を話しても驚きこそすれ、それで疎遠にもならず、特別扱いもせず、と心を許せるタイプの人間であることは熟知している。

だからこそ提案してみたのだが――

「ごめんなさい、今はあんまり人と会いたい気分じゃなくて……」
と目を伏しながら自信なさげに話す。――それもそうかもしれない、今魔法を使わなければフェイトだってディーバの声が聞き取れないのだ。それにこんな状況で改めて友達を何人も作れるならば、そもそもこんなに悩んでいないだろうから。

「ごめん、ちょっと考えが足りなかったみたいだ。それじゃあいつ

らに連絡だけしておくから、俺達は俺達で普通にどこか場所を変えて話そうか」

場所を変えるのは、気分を変えらるということだ。目の前に崩れた家があった状態で話しをしても、暗い気分を引き出す以外に役に立たない。

「……なら私の部屋でどう？ホテルに部屋を取ってあるからそこで話しましょう。貴方の事、騎士の事を聞かせて」

悪くない提案だ。忠誠を誓った騎士だからとはいえ、他人の心に踏み込んでいくのは気持ちの内側ではなく外を向いている。

だが、油断も出来ず、フェイトは何年かかってでもいいから、ディーバの心を解きほぐそうと心の中で誓った。

「じゃあ案内をお願いします、姫様」

姫様、というのをちよつとだけ軽い口調で言うようにしてみたが、反応はいまいちで困った顔を見せてくれる訳でもなく、まるでそれが当たり前だともいうような感じで先頭に立って歩く。

『もしかしたら、ここら辺に鍵があるのかもな』

フェイトは心にメモをしつつ、ディーバの後を追った。

ディーバはホテルと言ったが、どうもホテルというにはチープな感じがする。

木製の床に、木製のテーブル、ベッドのシーツも一般品とどう考えても歌姫の年収からすればチグハグな身の合わせだ。

ディーバは気にした風でもなく、機械的にベッドに腰を掛ける。

フェイトは部屋を見渡すと、水差しから水を注ぎディーバに差し出す。

ディーバは受け取ったコップから水を飲み干すと、息を吐き出した。

「どこか適当に座って」

と言われたが、ベッドは1つしかないし、必然座る場所はインテリアに程遠い木製のやたらと足が長い椅子に腰掛けた。

「うん、聞きたかったのはさつきも言ったけど、貴方の事と騎士の事について教えて欲しいの」

デীবバからリクエストがあったのは、先と同じ質問内容だ。自分の事も騎士の事についても悩んで話す必要は全くなく、考えを纏めずとも話し始めた。

「まず俺は騎士学校ナイトオブラウンド所属1年、フェイト・セーブです。とある事情により騎士としての称号赤魔騎士を頂き、こうして自由時間には町を歩いてみたりしています」

多少の脚色が入ったが、大きな問題でもなくデীবバは目で続きを促す。

「騎士というのは、そもそも国に仕える者を指します。この国、ローウェンではローウェン騎士団として所属するのが一般的な様に、各国とも騎士団を持っている国は自国に尽くします。とはいえ、誓う対象は国であったり、王であったり姫であったりと様々ですが、騎士たる証として決して裏切る事は致しませぬ」

その言葉に少しだけ警戒の層が溶けたような気がしたが、まだデীবバは説明を待っている。

「他には騎士として特定の主に仕える事もあります。多くは個人に見惚れて意志を貫き捧げるものですが、全体としてみれば多くはありません。それと同時に魔法師、という存在が騎士と同時に有名でもあります。魔法師は個人研究を除き、全て国の研究施設に入り、要請を受けた場合騎士とパーティーを組み討伐や調査に同行したりもします。……他にはギルド、というものがありますが、これは騎士や魔法師が所属する国に属さない組織としてなりたっています。正規の騎士や魔法師は所属することが出来ず、もっぱら個人主義の人物が多い事で有名ですが、稀に国から要請を受けて騎士団と共に大遠征に加わることもあります。――主な内容は賞金首となった人やモンスターの討伐、後は勝手ボランティアとしてやっている町の治安維持、大きく2点になります。これがギルドの活動になります」

フェイトの長い説明も、まるで今初めて聞くかのように子供の好奇

心さながらに注目していた。

一息つき、だいたいの説明が終わった所で、ディーバから質問があった。

「騎士学校って何？」

おつとこれも説明しなきゃだめか、と思い直し表情には決して出さずに説明する。

「騎士学校とは将来騎士を目指すための学校です。15歳から入学できる事は同じく魔法師を目指す魔法学校と大差ありません。騎士になるには倍率で言えば20倍程、今年800人入学しましたが、最上級生の5年生には40人残ればいい方だとも言われます」
倍率等には特に興味はなかったようで、次の質問を口にする。

「なんでフェイトは騎士になろうとしたの？」

「……俺は、自分だけの姫様を守りたい。それが夢だから、です」
ディーバに通じるのか分からないが、ディーバは目を伏しこちらをみることを止めた。

彼女が今何を考えているかは分からない。正直にこちらの夢がバカみたいで呆れたのか、それとも歌姫として地位を築いた彼女にとって他人の夢等十把一絡げなのか、判断はつかなかった。

そんな空気が重たくなってきたことをフェイトは察知し、ディーバに声をかける。

「外に出ましようか」

「で、フェイトはまた運よくも有名人にご縁があったと」

イライラを滲ませながら、レイが他の2人に当たる。

「ちつくしょく俺が絶対見つけようと思つてたのに……」

「あんたじゃ無理つて最初から踏んでたから大丈夫。それよりも、こつちに合流出来ないつてどんな理由なんだろ？」

ピアが思案顔になるが、レイが答えを出す。

「きつとご両親を亡くされたのよ。……故郷が襲われた、だけで公演をキャンセルするには少し弱い、実際にディーバがこの町に来ていた事から見てもご家族に不幸があつて慌てて公演をすっぱかしてきた、つてとこじゃないかしら？」

レイの推測が非常に的を得ていたもので、皆納得する。

「んでフェイトがたまたま見つけて、声をかけて姫の騎士になった、と。どんだけ羨ましい運命だ」

「フェイトつて私達と同じ年なのよね、たまに忘れそうにもなるけど」

「そりやイキナリ自習すっぱかして、町で歌姫を探そう、ですもん。あいつが同じ年なのはそういうバ力がある所が証拠よ。どんなに実力があつても子供なんだから大人の問題に首を突っ込みすぎても、手が届かない事もあるに決まってるのに」

「その通り、子供は子供で自習していればいい」

ん？3人の会話に不自然に割つて入ってきた人物がいた。

「私は自習、と言つたんだが、もしかして『実習』とでも聞こえたかね？それは失敬、この通り口が上手い方ではないのだね」

3人が冷や汗を流しながら、後ろから聞こえる声に振り向く。
正体は分かつていても、振り向かねばならない時はあるのだ。 - -
今がきつとその時だと思う。

「さて、フェイトもサボリか。それも性質の悪いサボリだ、大人の問題に首を突っ込むという、な」

汗が止まらない、プレッシャーが凄まじい。下手したら竜種に相対した時にはこの位のプレッシャーを感じそうな位重圧がかかる。

「ギルバード、先生」

「おまえら、明日朝イチで俺の所に出頭しろ。フェイトにも勿論伝えて、な。今フェイトの居場所を教えて捜索に協力するなら見逃してもやるが?」

まさしく飴と鞭で生徒から情報を巻き上げようとするギルバード。手法は間違つてもないし、このプレッシャーを前にしたら、いかに1年生最優秀のレイでもこの条件を飲んだに違いない。

だが、残念なことに彼らは――

「場所までは教えてもらってないので、教えることが、……出来ないんです」

庇う訳でもなんでもなく、事実として知らないのだから、こう言うしかなかった。

それにギルバードはニヤリと口の端を吊り上げると、3人を断罪した。

「じゃあ明日忘れずに出頭しろよ? 忘れたら――」

バチン!!

と、ギルバードが自らの両拳を打ち合わせ大きな音を立てた。

今日の前で起きた事をそのままいうのならば、あまりの高速に空気が圧縮され、拳を打ちつけた瞬間に、その空気が外に逃れるように弾けたのだ。

ようするに、拳と拳は触れ合ってすらいらないのにそれだけ大きな音が発生したのだ。

凄まじい腕力と、拳の振り抜いたスピードに3人は恐怖を覚えた。

「フェイトにもキチンと伝えるよ」

絶対に忘れるもんか、と3人は固く心に誓ったが、願いむなくフェイトは呼び出しを気付かずに結果バックレてしまったのは、また別のお話。

風が透き通っている――

春の息吹に相応しく草木は新緑で迎え、遅めの桜は未だ桜色の花びらを辺りにはなめかす。

小高い丘の上、春風のフルートとでも名付けるような風景がフェイトとディーバの目の前に広がっていた。

「どうかな？俺のお気に入りの場所なんだけど」

フェイトは飛行魔法を使い、この丘にディーバを連れ飛んできていた。

初めの方こそディーバは辺りを頻りに見渡し、景色を眺めていたが、ある程度時間が経つと飽きたかのように草むらにしゃがみ込んでいた。

『まいったな、あれきり声を掛け辛い』

ディーバは出逢った当初こそ、こちらとの会話にも興味を示してくれていたものの今はあまり会話らしい会話にならない。

原因が不明なだけに対処に困るのだが、外に出る事についての提案にも乗ってきたりしたのだから嫌われているわけでもないのだろう。ならば一体？

フェイトの方こそ思考の迷路に入りそうになるが、手前で引き返すと、そこで彼女がこちらを見つめていることに気づく。

「どうかした？」

「……ううん」

やっぱりなんか噛み合わない。初対面だからそんなに深い仲になれないのは承知だし、それでも何か決定的に間違えた覚えもないし、フェイトは早くもお手上げ状態だった。

とはいえ、会話をしなければ手札だけから判別できないので、情報を得るべく言葉を紡ぐ。

「ディーバは今までどんな事をしていたんだ？」

ディーバは少しムスっとした表情を見せたが、答えてくれる。

「歌姫と呼ばれて幾つもの国を回って、いろんな偉い人に聞かせて

きたわ。国王だって、大統領だって、貴族だって……」

「満足したの？」

フェイトの問いがあまりにも下らなく、そして無神経で、侮辱しているように思え、デীবは声を荒げる。

「満足して何！？あんな人達を相手に歌ったって褒めるだけで、何も得られない。私はお金が欲しくてやってるわけ、……じゃ……」

デীবの言葉は尻すばみにどんどん自信を失っていくかのように、言葉の力がなくなっていく。

「だってデীব、楽しくない思い出を思い出すのはなんで？俺はどんな事してたのか聞いただけ。楽しい事だっていいはずなのに、なんで楽しくない事を先に思い出しちゃうの？」

フェイトの言葉はもはや追求ではなく、確信した問いかけだった。

自分との会話の最中に何かあったのかは、分からないままだが、デীব間違いない今までの公演でその精神、心をどこかに置いてきてしまっている。

「だって、私は呼ばれて歌うだけで、歌うだけ……で、……他の事なんか知らない」

そう、会場の抑え方も、音響の設置の仕方、恐らくは観客の心も、知らない。

歌姫だが、歌姫ではない。まるで歌う機械のようにいつの日からか心が麻痺してしまったのだろう。

どこに行っても自分がチャホヤされ続け、怒られる事は一切なく、不平をいう人間は一言で黙らせる事ができる。……いつの間にか出来あがってしまった権力という力。

それが彼女の心を縛っているのだ。

「デীব、君のもっと小さい頃の話とか、聞かせてよ」

デীবは、フェイトが少しずつ怖くなってきていた。

フェイトは騎士だと言って自分に仕えると言った、それは自分より下という意味。

それが、話して欲しいだとか我がままを言ったり、そもそも自分に仕える者が自分の全てを知らないのが不満とで、ホテルに居る時から少しずつ不満がくすぶっていた。しかし、話してみたら今度はフェイトがこちらの胸を抉る。

- - 一体フェイトは何をしたいのか？それが分からなくてディーバは不安になってきていた。

そこに、もっと小さな時の話を聞かせて、と言われた。

フェイトが知っているハズもない、自分の幼少の頃だが知っていないのが不満に感じた。

それと同時に、自分でもいつの間にか触れなくなっていたパンドラの箱のような部分にフェイトは触れようとしてきた。

意識して思い出さずとも、記憶は何かがきっかけとして脳の記憶を呼び起こす。自分でも意識せずに記憶がどんどん溢れてきて覚えていないような事を思い出したり、嫌な思い出を思い出さなくなくて無理やり止めようとしても止まらないのと同じように - - -

ディーバは小さな頃を思い出していた。単純に褒められるのが嬉しかったあの頃、お金なんかいらなかったし、自分より小さな子供にお歌を聴かせる事が好きだった。

みんな喜んでくれたし、何より自分が生き生きしていた気がする。そんな時両親は決まって、『ディーバ、偉いな』と褒めてくれた -

- - -

そこまで思い出し、ディーバは今の自分に意識がシフトし、たまらず逃げ出した。

「ディーバ?!」

後ろからフェイトの声が聞こえるが、

「来ないで!!」

と拒絶する事しかできない。 - - そしてその拒絶は本来言葉にもならない程小さな音で、その事が更にディーバを苦しめる。

不格好に逃げ出すディーバを、ついにフェイトは追ってこず、ディ

ーバは自分のホテルのベッドへ飛び込んだ。

悔しくて、無様で、癩癩を破裂させて、小さな事でイライラして、誰かが下にいないと落ちつかなくて、両親を失ったのが悲しくて、それでも泣けなくて、声も出なくなつて。

ディーバは今の気持ちが整理できないまま、いつの間にか眠つていた。

空

翌日、フェイトはディーバの部屋を訪ねていた。

あれから、1日はそつとしておこうと思いディーバが走り去ってから追う事は無かったが、今日は誓い通りディーバを支えようとやってきたのだが――

「ディーバ？いるなら返事をしてくれ。フェイトだ」

来る前にディーバの家があつた場所も見えて来ていたので、すれ違つたとは考えにくいのだが。

「こりゃ、本格的に嫌われたかな？」

無理やり中に入るのは騎士としての矜持に関わるので、そんな無礼な事はできない。

天照の岩戸が開くのを待つかのように、持久戦を覚悟しフェイトは昼過ぎまで扉の前で待ちぼうけていた。

「う……ん……！！ん……？あれ？ここは、ホテル？」

一方ディーバはあれから死んだように眠り続けており、起きたのが昼過ぎだったのだ。

「なんか久しぶりに眠った気がする」

両親が死んだという訃報を受けてから飛んで帰ってきたのはいいが、それからは何をするでもなくただただ1日を無為に過ごし、何もしなかった。

自分が死にたいのか、生きたいのかも分からず、それでも空腹を満たすため食事を取っていた事は生に執着している事の証でもあったのでそれも本当は煩わしかった。

睡眠も同じようなもので、眠いから寝るのではなくただ何となく夜は眠った方がいいと思つたから眠っただけ。

いつそ心が機械であれば、本当に楽になれるのに、と何度も思つた

が神様はそんな願いを受け入れてはくれなかった。

それにしては、今起きた瞬間の充実感は1週間以来だ。

心が壊れたと自覚してからは、感情というものが一切復活する気配をみせなかったのだが、案外現金なものだ。

でも――

「声……きつと出ていないんだろうな」

独り言の要領で口に出している言葉も、全てが耳に入ってこない。

自分の耳が壊れたのならば、遠くから聞こえる人々の喧騒も、町を立て直す工事の音も、13時を告げる13回の鐘の音も聞こえないのだから。

「13回……13時!？」

デীবは心底ビクリしていた。今まで機械的に8時には起き、日課となつてしまつていた自宅を見つめる事を今日はすっかりと抜け落ちてしまつていたからだ。

「フエイト……?」

思えば昨日騎士と名乗る少年に会つてからだ、混乱したのも、イライラしたのも、眠れたのも、今不安なもの。

昨日初めて出逢つた時、騎士と名乗り知らない事を説明してくれた彼。

しかし実際彼はつまらない類の人間でしかなかった。国王とすら間近で話せる自分と違つて騎士団というのはただ貴族になれなかった、生まれの差が生んだ限界に過ぎない。

そんな犬に近い身分で、夢も子供の頃のまま、フエイトのランクはみるみる急降下していたのだ。

最初はマネージャーに近い位置だったものが、従僕に位置するとデীবの中では付けられていた。

それに不満が生まれ始め、自分の事を知りたい等とあまりにも度を超えた我がまを言うのだから苛立ち募る。

そして、何故か話してあげる気分になつて、話してあげていたとい

うのにフェイトはずかずかと踏み入った話しをしてきて、しまいは口答え。

だけど、それに何かが決られていくのが分かった。

機械になりかけていた私が話す言葉は、空虚なものになり果てていて、今思い返せばとても陳腐だ。

国王と親しいからなんだと言っただろう？何故私は自分の歌声の事を話さなかったのか？

そして、彼はパンドラの箱に触れた――

結果は、

「疲れちゃった」

ただでさえ考えられる頭の状態ではないのに、膨大な幼い頃の記憶が溢れて纏める事も考える事も口々に適わず、ただただ混乱してしまっただけは眠ってしまった。

疲れて眠る、それが健全な肉体、何気ない毎日そのものだった。

ただ眠るだけの日々に何の価値があるというのだろうか？それだけは、少なくとも理解できた。

「……とりあえず、何か食べようかな」

外に出て、パンでもかじってまた家を見に行こうと思着替えも、化粧も、髪をとかすこともなく扉を開ける――

「おはよう、寝ぼすけお姫様」

そんな、軽口が外の光から聞こえた。

扉が開くなり、フェイトは声をかけた。

「おはよう、寝ぼすけお姫様」

デীবはフェイトだと最初認識できていなかったようだが、認識した後は見なかったかのようにドアを再び閉じた。

「待て」

と思ったが、間髪で足を挟み込み扉を閉じさせないようにする。

「何？」

明らかに不機嫌を滲ませた表情で睨んでくるが問題ない。

「昼食でも一緒にどう？上手いオニオンスープを出す店があるんだけど？」

そんな気安い誘いをディーバは一笑に付す。

「世界の歌姫相手にオニオンスープって……私は……」

そしてディーバはハツとなる。

世界の歌姫？それは後から呼ばれたものであって、私は、私は――
「とにかく、お腹減ったんだろ？スープって消化もいいし栄養もあるし、気分を落ち着かせるには一番なんだぜ？な、ディーバ、行こう？」

フェイトがお願いするようにディーバを拝むと、ディーバはまだうるたえていたが、やがて溜息を吐きだす。

「分かった、行きましょう」

「やい！」

と、能天気な発言と子供みたいなはしゃぎ様が、ディーバの日常に加わっていった。

「美味しいでしょ？」

「……うん」

フェイトの作戦は唯一つ。ディーバを支えるには少なくとも対等以上の立場でなくてはならないのだ。

ディーバは全て聞かされた通りの知識しかない程子供である。

自分より年上であろうと、精神面では大人の世界に早く上がりすぎたせいで、確固たる自分を持てずステージに立ち続け、間違いを指摘してくれる人もおらず、結果ディーバが歪む原因を作ってしまった。

ディーバが両親の事を乗り越えられる可能性があるとするれば、この一点に尽きる。

すなわち、ディーバの子供という殻をぶち破り、ディーバを大人にする。

……最もフェイト自身15歳なので何がどうすれば大人なのか分からないが、それでもディーバが自分で乗り越えられる強さを身につけられたら、大人になったのではないかと思う。

そのためには、自分は型通りの騎士を演じていたのではディーバの心に届かないのではないかと思い、いつそ『友達』という立場になつてみてはどうか思った。

もしかすると、ディーバは友達らしき友達もいなかったたのではないかと思う。

本来ならば両親を失った状況で他に支えられるとすれば、他に近い肉親か、友達か、恋人位なものだ。

だが、その存在があるならばとくにディーバの心の頼りになっていただろうし、ディーバの近くにいるハズだ。

その姿がないからこそ、フェイトは仮説を立て、ディーバに『友達』というのを教える。

間違つた事を肯定せず、本当の意味でディーバを助けられるという存在を。

そんな事を昨日のうちに決めたのだが、ディーバは訝しげな目でこちらを射抜いている。

どうやら、もうスープを飲み終わり小麦パンに山羊のチーズを乗せたものを食べ終えたようだ。

「そつえば、あなた学校は？」

と、ディーバに痛い所を突かれた。正直意外だ、そんな所に気付くとは思わなかった。

「学校は、サボリ。ディーバが心配だったから」

正直に告白する。実際サボったら後が怖いので、学校には行きたい所だったがディーバを放っておくわけにはいかない。せめてディーバに回復の兆しが見えるまでは学校に行かないつもりだ」

「うん」

と、そっけなく返された返事に昨日の事を思い出してしまうが、どうやらちよつとだけ違うみたいだ。

恥ずかしげに視線を外し、そっぽを向くディーバは心配されていることに嬉しさを感じたのかもしれない。

『素直じゃないんだから』

そう思いつつ、フェイトも自分の分の昼食を食べ終える事にした。

「これから行きたい所があるから、付き合ってくれないかな？」

フェイトの問いにディーバは敢えて興味なさそうに視線を外すが、慣れてしまえばなんてことはない。

照れ隠しだと思えば十分に可愛い範囲だ。

「んじゃ行くよ、リリアウト」

昨日と同じように飛行魔法を使い空へと飛びあがる。

昨日と違って、改めて地面を見て感動した様子が少しだけ伺えたが、今日の目的は――

「んじゃ行くよ？寒かったら言うてね？」

と前置きをし、まだ分かっていないディーバを空の散歩に連れ出した。

「……………!!!!」

背中に掴まっているディーバから、何か文句らしき気配があるがフエイトは全部無視して更に速度を上げる。

ちなみに上空に行きすぎると、速さがゆっくりした感じに見えてしまったため精々が5階建てビルの屋上の高さ位で飛行している。

それなのに速度は飛行機並というのだから、その速度を初めて経験するディーバからすればたまったものではないだろう。

2人分を風のバリアで丁寧に包む上に、高速で飛行するため空気の風切り音がとても煩く、例え集音に回せる魔力があつたとしても意

味をなさない。

結果としてディーバの声は全く聞こえていない。

だが、それでも速度を緩めることなく更に加速し空を突っ切る。最初の頃こそ手で叩いてきたり、何かを叫ぼうとしていたようだったが、しばらくしたら抵抗を諦めた。

この風になるかのような散歩が果たして、ディーバの為になるのかと言われれば分からない。

でも、人間なんてちっぽけなものだ。空を飛ぶ鳥になりたい――
- そう願う人がいるように、人は地上に同じように生活し、同じような顔の人達に紛れ、同じような毎日を送っていれば心も縮こまってしまう。

それならいつそ、このどこまでも続く空の彼方を滑走し、空から見下ろして改めて分かる大地の大きさを認識すれば、自分がいかに小さいかを思い知れる。

フェイトが好きで、何度か同じように飛んでみてなんだか考える事がばからしくなった、という実経験を兼ねてたからこそディーバも同じように連れだしてみた。

本当に無茶苦茶だった。

行きたい場所があると行って飛んだのまではいい。昨日も経験したことだし。

でも、行きたい場所というのは恐らく空の事だったのだ。

フェイトは無遠慮に空を凄まじい速度で飛び始め、私は驚きでパニックを起こしかけた。

とりあえず降ろせと叩いてみたり、叫ぼうとしてみたり、地上が遠く意識も遠くなりかけたり。

でも、しばらくこんな無茶苦茶な状況が続くと、違和感があった。風が少しヒンヤリと伝わってくるが、あくまでも自転車で風を切っ

た時程だ。

それにもし、フェイトから手を離しても落ちる気がしない。……きつとどちらもフェイトの魔法なのだろう。

昨日はただギュッと掴まって目を瞑っているだけだったが、今日はこんな状況に晒され続けたせいかな余裕がある。

よし…… と思い、目をパチツと開くと――

ただ、ただ美しかった。

眼下には丁度町はなくなただ緑の丘が広がり、果てしない草原がどこまでも続く。

空の先の太陽も、眩しいとは思うが見つめているとその大きさと輝きに目を奪われる。

だけど、それより何よりも、空を自分が飛んでいるんだと思うと心が浮き立つ。

飛行機を使ってこちらに戻ってきたときは、鉄の箱に運ばれているとしか思わなかったが、実際自分で空気に触れながら飛んでいると、本当に気持ちがいい。

有名な詩人が川の流れや、空模様を謳ったものが世の中にはいくつもあるが、そのどれもがきつとこんな気持ちを表せるものは、ない。私は、今、飛んでいる。

難しい言葉は地上に全て置いてきて、私はただただ風を感じ風になる。

「気持ちいい」

それだけで言葉は足りた。

背中にいるディーバがいつの間にか、手を大きく広げこの空を感じている事に気付いたフェイトはランダム飛行を止め、ただただ加速を突きつめて空を飛ぶ。

「ほら、こんなにも空は広くて気持ちいい。地上の悩みが悪い事とは言わないし、きっとそれも大事だけど、囚われて動けなくなることだけは間違いだって俺は思うから」

きつと聞こえないはずの声をフェイトは口にだし、ディーバのためにだけに自由な空を飛行する――

やがて、ディーバが自分の肩を2度叩いた所でフェイトは空中で止まる事にする。

「ありがとう」

やっぱり集音しないと聞こえないので、今はその声が聞こえなかったが、唇の動きで気持ちも言葉も伝わる。

「こちらこそ」

やっと2人の心が擦れあつた瞬間を、フェイトもディーバもきつと一生忘れない。

「じゃあ戻ろっか？結構遠くまで飛んじやったから、戻るのも時間掛かるからさ。――！今度は、しっかり掴まってて？」

フェイトは意地悪な笑いを堪えて、ディーバにそう言つと、ディーバは首を傾げながらもフェイトにギュツと掴まる。

「行くよ？」

そしてフェイトは調子に乗って、ジェットコースターさながらに上下左右に振り回し、スクリーンまでつけて飛びまわり続け、ついにディーバから拳骨を頂戴した。

「サイッテー！」

こうして、最後の最後に悪戯が過ぎたせいかディーバは地上に戻ってから、フェイトに文句しか言っていない。

「ゴメンゴメン」

と、もう何度目になるか分からない謝罪を口にしフェイトは頭を下げる。

最も2人共分かっていたのは、どちらも本気で怒っている訳でもないし本気で謝っている訳でもない。

そこに存在しつつある、絆というものにお互いが照れつつ認め合っている――そんなくすぐったい感覚。

そんな感覚が悪くない、と思うからこそ2人は仲良く夕暮れの街を歩いているのだ。

「んーじゃああれ、買ってくれたら許す」

ディーバが提案したのは、ケバブの屋台だ。

実は昼食代もフェイトが出していたので、財布に不安が残るがそれでチャラにしてくれるというならば、断る選択は出来ない。

「ハイハイ、でもお金ないから1個だけね」

そして屋台のおじさんにケバブを注文し、待つ。

おじさんは手早く作り上げ、威勢良く「まいどっ!」と見送ってくれて何だか気分が良かった。

しかし、ホンのちよつとだけ目を離れた際にディーバは数人の男女に囲まれていた。

「ディーバさん!？会えて感激です!サイン下さいサイン!」

「ディーバさん体調悪かったんじゃないんですか?お体の調子が良くなかったら、公演よりも自分を優先して下さいね?」

「ディーバさん!でも次公演やるとしたら期待してますよ!復帰記念コンサートなんてすごいTV局の数が入りそうだし、俺らでもTVで見られますよ!」

「ディーバさん……」

1人1人に害意はない。でも、集団になれば善意が害意に変わってしまう事だつてあるのだ。

現にディーバは困り果てている。

今ディーバが声を出せないと知られればどれだけの波紋を呼び、ど

れだけディーバに影響があるか計り知れない。

フェイトは急いで集団をかき分け、ディーバの口にケバブを突っ込む。

「……っ!!」

本日何度目になるだろう、ディーバの声にならない悲鳴を無視してフェイトは観客を追い返す。

「ディーバが体調不良なのは新聞の通りです！ファンならあんまり困らせずに、今日はもう道を開けて下さーい」

暗にこちらが困っていることをアピールすることで、ただのファンだった彼らはスミマセンと声を揃えて道を開けてくれる。

「ディーバ、行くぞ」

まるでマネージャーの真似ごとをしつつ、ファンの囲いから脱出して適度にこちらに向けられる好奇心の目を振り切るように、何度も道を曲がり、ようやく全ての目から逃れることに成功する。

問題があつたのは、

「レディーの口に食べ物をつっ込むとかどんだけ失礼なのよ！あんな首にするわよ、首！」

と、ケバブを捨てるのも勿体なく、かといって自分の片手が塞がるのも嫌って、ついディーバの口に押し込んだのだが。

よく考えてみると、ディーバの手に持たせれば良かったのかもしれない。というか、途中から走る事になって、ディーバは口からケバブを取りだし手に持って走っていたし。

「ハア…… ホントあんだといると何もかもが無茶苦茶……」

「でも、楽しいだろ？」

そう純真な瞳でディーバを見つめると、ディーバも悔しそうに、そして恥ずかしそうにそっぽを向いて答える。

「楽しい……」

ようやくディーバから信頼を得られたのかもしれない。達成感にフェイトは自然と笑顔をこぼした。

デীবをホテルまで送り、自分は自宅に戻ると家の前に何やら人が待ち構えている。

「あれ？ゲイトにレイにピアじゃないか。どうしたんだ？ウチまで来て？っていうかどうやってここまで？」

何も知らないフェイトに次の瞬間容赦ない拳や蹴りや平手打ちが飛んできた。

「いつてえ！！？なんなんだよ！？急に！！？」

フェイトは事情が全く飲み込めず、情けない声を出す、3人の殺気は薄れることなく、尚濃く高まる。

「……待った、落ち着こう、っていつか落ち着いて下さいお願いします！事情を話してくれプリーズ！」

幾多の言葉を出してようやく届いたのか、拳を引つ込め代わり言葉を出してくれる。

「フェイト、あんた処罰は自分で受けるって言ったわよね？」

ん？と一瞬考えたが、それは昨日自分が町に連れだす口実として言ったことだった。

まさか……

「もしかして、先生に見つかった？」

「こつてりしぼられた。フェイトにもメールを出したぞ。お前も来るようにって」

「えっ？」

と慌てて携帯を探す、昨日から家におきっぱなしだ。

「悪い、家に置きっぱなしで……」

「バカア！！」

結局ピアから本日2度目の鉄拳をお見舞いされた。

ヒリヒリする頬をさすりながら、事情を聴くとどうやら今日フェイ

トが参加しなかった事ですさまじいスパルタ訓練を受けたそうだと、途中から洗礼の事を思い出したが、実際それに近い所だったらしい。」「って訳で明日絶対に、絶対に参加すること！！出ないと私達が――」

ピアが体を震わせて懇願する。

うん、確かにそんなしごき2日連続とか死んじやうかもしれない。そう思い、フェイトは首を……横に振った。

「悪い、ディーバの事が片付くまで俺学校に行かないから」

「うおい！？」

「ハア！？」

「フェイト！？」

3人共さすがに明日はフェイトが学校に行くと思っていたようだが、フェイトが断るには理由がある。

「俺、ディーバを守るって決めたんだ。それには昨日今日だけじゃ足りない。いや、本当は何もかもが足りない！だからお願いだ！明日は俺と一緒に学校を休んで、ディーバに会ってくれ！」

この提案には3人は心底驚いた。

まさか説得した側が説得に回るとは予想だになかった事態だ。レイが一応こちらに確認するように問う。

「私達がしごきを受けた事を悪いと思った前提で言ってるのよね？」

「当たり前だ。俺1人が本来受ければ良かったものを関係ないお前らに背負わせちゃって、本当に悪かった。だから今度こそ俺が処罰を全部引き受けるから、もう1度だけ力を貸してくれ！！」

言葉だけなら、まるでこれから世界を救いに行く勇者のようにも聞こえるが、実際は明日一緒にサボってくれという何とも低次元な叫びだった。

そんな提案に、ピアとゲイトは

「いいわよ」「いいぜ」

と、即答で返してくれた。

「な、なんで即答してんの！？」

1人取り残されたレイが2人を見つめ、助け舟を待つが2人は首を横に振るだけだった。

「レイ、フェイトは人を救おうとしているんだ。学校の1日2日、いや1週間休んだ所で人は救えない。フェイトの方がよっぽど見ている視野が広いんだ」

ゲイトが言葉にしたことにより、レイもフェイトの心意気を悟り、協力をすることにしぶしぶなった。

「全く……本当にフェイトと会ってからなんかトラブルばかり。

――ちゃんと後で借りは返さないよ？」

「勿論だ！サンキュー、みんな！！」

フェイトは頼もしい友人をサボリに巻き込み、明日ディーバと会うことについて色々と4人で考えることにした。

花見

翌日

「ディーバ？いるか？」

フェイト達4人は学校をサボリ、ディーバのいるホテルへと足を運んでいた。

ディーバが普段何時に起きているのかは分からないが、あんまり寝坊しすぎても生活のリズムを取り戻せないだろうと思い、フェイトは会えて朝から会いにきている。

ガチャ

今日は昨日とは違ってすぐに扉が開いたのだが……
バタン

すぐに扉はしまってしまった。

「待て」

ガチャ

と、フェイトはディーバの許可なく扉を開けるがディーバは扉を抑えているようで少しばかり抵抗を感じた。とはいっても男と女、それに騎士と一般人の差をみれば簡単に開いてしまう力差であったが。
「……………」

ディーバが何かを言っているようだが、聞き取れない。

「おっとすまない、魔法をかけるのを忘れていた」

そう言つてフェイトは自分を含めた4人に魔法を掛け、集音率を高めディーバの今やすっかり聞こえなくなってしまった声を聞けるようにする。

「すまない、ディーバ。もう1回お願いできるか？」

フェイトは本当は来る前から魔法をかけなければならない事を知っていたが、友人達にも実際目の当たりにしてもらった方が理解が早いと思い、敢えて魔法を使わずに対面させたのだ。

「誰？この人達？」

ディーバはそう言っていたようで、当然の如く昨日はいなかった三人にじとんだ目を向ける。

「初日に会った時に言っただろ？俺の友人のゲイト、ピア、レイだ。三人共いい奴だったのは保障するからディーバに是非会わせようと思ってな」

「宜しく、俺はゲイト・ユンだ」

「ピア・ハルトです。こちらは姉で」

「レイ・ハルトよ。宜しく、ディーバさん」

実際世界の歌姫相手に敬語無しというのは、無礼だと言う話が出ていたが、フェイトはあくまで友達として接して欲しいという事で敬語は無しだった。

「……ディーバです」

ディーバも幾分戸惑っているようだが、最初に会った時のように露骨に人を見下したりしないなら幸先はよさそうに見える。

「って訳で、今日はお花見に行きます」

「えっ？」

「準備はしてあるから安心して」

「ディーバ、その格好じゃ勿体ないよ？」

「弁当はその辺で買ってくから、財布忘れんなよ」

と、口々に勝手なことばかりいう初対面の三人＋一人にディーバはいきなり爆発してしまった。

「な、なんなの！ちよつと慣れ慣れしすぎじゃない！？」

ディーバの怒りも理解できなくはないが、フェイトは気にした風でもなくディーバに告げる。

「友達つてのはみんなこんなもんだぞ？お互いが気を使いすぎたらそりゃ友達じゃなくて、単なる仲間とかスタッフとかどちらかというと、他人に近いカテゴリーじゃないのか？ディーバの友達つてのは？」

敢えて挑戦的な口調にすることでディーバの対抗意識を燃やし、結果ディーバは自分の嘘に苦しむ事になる。

「そ、そう、よ！私の友達だってこの位フレンドリーだったわ！ -
- ちよつと久しぶりだったから調子狂っただけ、本当にそれだけよ
！」

実際ディーバに見えていない場所では、3人は目を丸くする思いだった。

あれだけ一人前に公演をこなし、世界の歌姫と呼ばれその歌声の響く名声はどんな片田舎にも届いている程の有名人なのだ。

……でも、実際の素顔は大人びたものでは決してなく、むしろ年齢から考えれば幼いとも言える印象でもあった。

「んじゃディーバの準備が出来次第出発だな。今日はいい天気だから、風が気持ちいいぞ」

「風が……」

ついこの前までは風が気持ちいいなんて、公演で演じた劇の中でしか考えなかったけれど、本物は格別だった。

「それじゃ、ディーバが着替えるの私達手伝うわ」

「勿論、男の子はこの時間を使って何をするか分かるよね？」

この姉妹は本当に息が合っていると思う。事前打ち合わせなしだろうが、アドリブだろうが必ず乗っかり意思の共有をしている。

この間まで喧嘩していたとは思えない程、急速に間を縮めているようだ。

「それじゃ俺達は弁当の買い出しだな」

「後で請求はするからな」

さりげなくフェイトは割り勘を提案して、女子2人にディーバを任せ買い出しに向かった。

「さてディーバさん。服とかは？」

「というよりまず髪とかちよつと手入れした方がいいし、シャワー浴びた方がいいかも」

「貴方達何？」

ここで下手を打つと、またディーバの勘違いが生まれるがレイはフ
イトから聞いていた通り対策を施してきたので問題はない。

「何って友達よ？フイトから聞いてるでしょ？でも勘違いしないで欲しいのは、私達はあくまで友達だからあなたの世話をする訳でもないし、服を選んだり髪を乾かすのを手伝ったりはしても、あくまで貴方の世話をするつもりはないわ。あなたが自分でやらなきゃいけないのよ」

レイはとても強気に出ていた。ちょっと強気過ぎたせいか、ピアは所在なさげに視線を動かしているが、間もなくディーバから返答があった。

「……友達ってどこからどこまでが友達なの？」

その質問はさすがに予想だにしていなかったが、レイは落ち着いて答える。

「……お節介やきの友達とか例外もいるけど、お互いが信頼し合つて、お互いが一緒にいて楽しいと思えばそれでいいんじゃない？」

「具体的な答えというのは賢者でも持ち合わせていないと思います。でもディーバさん、あなたは答えが無いと生きていけない程この世界を知らなくて、こんな誰でも知っている事すら知らずに生きてきたんですか？」

少し波状になりすぎたかな？と内心反省する姉妹だったが、ディーバは、

「……シャワー浴びてくる」

と言い風呂場へと入っていった。

その間にレイとピアは適度に部屋を漁って服を探したが、どれもパツとしない。

トランクに入っていた着替えは、どれも軽快さを重視したものでオシャレと結び付けるには難しいものがある。

とは言っても、今手元にある彼女の服はこれだけしかないし――

「こうなったら」

「やつちやいますか」

「……バツカみたい」

シャワーを浴びながらディーバは一人呟いてみる。今日も朝の寝起きが良かったように思える、きつと昨日フェイトが連れまわしてくれたおかげかな？と、自分ながらに考えたりもしていた。

一緒に空を飛んで、町中を無駄に走り回ったり。本当は自分と同年位の年代の人達が経験しているような、騒がしくて楽しい日常、というのを私は経験したことがない、

貧しかった家庭だったという事もあるが、それ以上に私は自分が褒められるのが好きだった。だから、歌の仕事だつてずっとずっと小さい時からこなししていたし、ライバルと言われた人達も自分の歌でひれ伏してきた。

友達になろう、と言って近づいてくるのは私に取りいつてあやかりたい者か、私を狙って来ているのか、どちらかしかみた事がない。どちらにも慣れてしまったため、友達という言葉はただのまやかしだと思ってしまうていたし、近づいてきた相手もそれなりに利益が取れたら追い払うまでもなく勝手に去っていった。

楽しい時間はいつもまやかし、いつしかその時間で笑っているのが仕事になり、笑いは張り付いて嘘になつていった。

両親は各国を飛び回る私に着いていくには、自営業の靴屋で忙しかった。

本当は私の年収だけで、3人とも1年間どころか10年は賄えてしまう程稼いでいた私からすれば、店をたたんで着いてきて欲しかった。

でも、お客様の事もあるし、なるべく多く顔をみせるから。と言って店を閉めることなく地域に密着して商売をしていた。

私にはマネージャーや専属のスタッフも何人もいたが、みんな心配するのは私の声だけ。

体調に気を配ってくれても心の負担や悩みを打ち明けるには、みんな

な遠すぎた。

そんな人間関係を続けていつて、結果は全てを失い、捨てた。誰も彼も両親が死んだと言っても、公演を優先し、私を見てくれる人は誰もいなかった。だから私は書き起きだけ残して、この国へと帰った。

スタッフとしても、一度公演に穴を開けてしまった以上私を連れ戻すには期間が短すぎるし、無理やり連れ戻すようなら人道的とは捉えてもらえず印象が下がる。

結果として、逃げた私を連れ戻すにはあくまで世間が落ち着くのを待つ必要があるため、猶予はまだあった。

その間に私は何をするでもなく、ずっと心を空にしていたのに……フェイトに出逢って3日目なのに、随分と変わった気がする。彼は騎士として、と最初に言ったが今はもつと近い位置にいる気がする。とっても強引でマイペース。でも、嫌じゃなくて、でも怒ったり。そんな不思議な気持ちが始まる。心が空っぽだった時より、よっぽど今の私は人間らしい。

「――バカみたい」

最初に呟いた時は今朝の状況に対してだったのに、今は自分に対して言っている。

両親のために涙を流したいと願ったのに、今はそれをほんの少し忘れて楽しいとさえ思ってしまったている。

そんな自分が本当にいいのだろうか？そんな自問自答を始めようとすると、頭にある言葉が響いた。

『デীব姫、私は誰かの手を借りる事が裏切りや救われたいという罪悪感になるとは思っていません。生きる者は幸せになる権利があるのです。』

誰から聞いたのか？――フェイト以外ありえなかった。フェイトはこんなにも早く救いの言葉を投げかけていてくれたのだった。

「幸せ……か」

久しぶりに浴びたお湯はとても心地よく、楔のように自分の中のドロドロしたものを洗い流してくれた。

シャワーを浴び終え脱衣所から出たディーバを迎えたのは、やたらと悪だくみをしていそうな金髪の姉妹だった。

「な、なに？」

さすがにこれだけ分かりやすい表情をしていると、ディーバだって裏があるとすぐに分かる。いやむしろ隠そうとしていない。

嫌な予感に身構えつつも、ディーバは2人から目を離さない。

「服を買いに行きましょう！！」

「ふ、服？」

「そ、長風呂つぱいから既にフェイト達も帰ってきちゃったけど、あいつらは場所取りに行かせたから気にしなくてよし。どうせ遅れるなら思いつきりオシャレしていかないと」

「服……ねえ」

確かにこちらに着く事を考えるばかり、普段着程度しかトランクには詰めておらず、オシャレを披露する場もない上にそんな精神状態でもなかったため、毛先程も気に掛けてはいなかったのだが。

「ピアはセンスがいいから安く、センスよく纏められるわ。しょうがないから今日だけはおごってあげるわ」

「おや？とディーバは思う。」

「友達ってそういう事はしないんじゃない？」

さつき教えられた通りに復唱するディーバだが、レイは簡単に首を横に振った。

「お節介やきは別っていったでしょ？それにディーバの方がお金あるんだから出してもらいたいけど、これは私達の出逢った記念ってことで私達が特別に出すの。アンダスタン？」

微妙な発音の英語を混ぜながらも、レイはディーバを納得させる。

「だからディーバが普段から着るような高い服はなし！予算外だから。んじゃ早速服屋にレッツゴー！」

「えっ？ちょ、ちよつと……」

ディーバの叫びむなしく、連行されるかのようにディーバは服屋へと連れていかれた。

「遅いな」

「遅すぎるな」

一方、待ちぼうけ状態のフェイトとゲイトは河川敷の桜の下で待っていた。

「支度に時間かかるから場所を取っておけとな。ってか桜ってそろそろシーズン終わりだから、そんな混まないよな？」

「全くだ、おかげで俺達は待ちぼうけ。しかも制服着てるからものすごい目立つし」

今日の4人は騎士学校の制服で来ていたのだ。実際騎士学校に連絡するような人はいないだろうが、サボりだと思われるのは100%だ。

「支度ってなんでそんなに掛かるかね？」

「女ってのはそういうもんだ、諦めろ。ってかフェイト妹さんいるんじゃないかったか？」

「ああ、いるな」

「妹さんも支度に時間掛かるだろ？」

「いや、置いてくといつもおどすから早起きして支度してる。……そっか、早起きしなかったら支度遅いな」

「……不憫な妹さんだ」

そんな雑談もほどほどに、しばらくすると桜の花びら舞う風に、一瞬のざわめきと息をのむ気配が混ざった。

「来たか」

と、フェイトが後ろを向くと

銀のウェーブがかった髪は、シャワーでも浴びたのかしなやかさを取り戻しており、目に張り付いた隈も落ちて元の白い肌は健康そうに見える。

だが何よりも、パステルグリーンのシフォンワンピースを着こなし、こちらに少しだけにはかむディーバの姿は、この若草と桜に囲まれた自然の中に調和するように悠然と佇み、とてもキレイだった。

思わず見惚れてしまい、そのはにかんだ笑顔が頭の大部分を占めていると、

「な〜に見惚れてんのよ、フェイト？」

「あれあれ〜?? フェイトってばこういうのに弱いのか?」

とディーバの後ろからこちらを睨したてる姉妹2人にかかわれ、ようやく我に返った。

「い、いや……」

まだ思考が回復しきっておらず、しどろもどろの言葉のつまりにディーバから声がかかる。

「フェイト? どうした?」

フェイトの側まで寄ってきて、こちらを見上げるように上目遣いをするディーバは、なんとも言えず可愛かった。

3つも年上なのに、こんなに可愛らしくなるなんて女の子というのはどこまでいつても反則だ、とフェイトは抗議したくなる。

「な、なんでもない…… いやなくはないか。 - - ディーバ、良く似合ってる。すごく可愛い」

「え」

と、今度はディーバの方が照れてしまったらしく1歩、2歩と後ろに下がって距離を取りそっぽを向いてしまう。

「し、知らないわよ! 口ばかり上手くたって仕方ないんだからね!」

と結局怒られてしまった。

「フェイト、ドンマイ」
ポン、と肩に手を乗せてきた被害0の友人を少し恨めしく思いながらも、ディーバを交えた花見が開催された。

「じゃあ遅くなったのは服屋に寄ってたからか」

「ピアに感謝しなさい。ピアだからこそ20分でコーディネート出来たのよ。私だったら2時間かかるわ」

「ゲッ、絶対レイの買い物に付き合いたくないな」

「あれ？レイ前武器屋に行った時はそんなに掛かってないだろ？」

「武器だからよ、目的の物も決まってたし。服は女の子に取って命なんだから」

「姉さん、姉さんのセンスは少し直した方がいいと思う」

「そうよ、レイが持ってきたのはちよつとボーイッシュ過ぎるわ。

レイだってキレイな髪を持っているんだから、もっと女の子っぽい服を選ばないと」

「私は……「女の子」って服が苦手なの」

「レイ今スカート履いてるじゃん？」

「制服だから仕方なく……」

「ピアの私服は？」

「私は普通だよ？ワンピース着たりパンツルックだったりスカート調だったり……気分次第ね。ディーバ今度服見にいこ？間に合わせじゃなくてシヨッピングに」

「いいわね、ピアと一緒になら」

「あれ？レイ仲間外れだ」

「フェイト、後でシメる」

流れで始まったお花見だったが、年が近い者同士仲良く、多少人見

知りしがちなディーバを途中途中上手く拾い上げ、会話に入れ穏やかな時間が過ぎていった。

「さーて今日の主役のお弁当タイム！！今日はなんと町で有名な中央通りの和風松竹梅弁当にしました！！」

「プラス何故かフェイト発つての頼みでケバブです。取り合わせについての苦情は全部フェイトに」

「変態」

「空気読みなさいよ」

「ありがと」

ん？と仲間内から妙な反応が返ってきたが、フェイトは気にせずにディーバに答える。

「いやいや、昨日の今日で同じものはどうかと思ったんだが好きなようですよ」

フェイトが流れるように答えると、訳知り顔で3人は頷く。

「まだ3日目だったのに、なんだこの空気」

「甘い、フェイトから蜂蜜がただよってくる」

「むしろ、私らお邪魔？」

そんなアホなことで、フェイト達をからかってきてもフェイトは笑って答える。

「ただだよ。な、ディーバ？」

「そうよ、たまたまよ。たまたま」

2人で息を合わせて否定したことで、よりからかわれる的となってしまったのだが楽しかった。

ふと、ディーバの横顔を盗み見てみると、気負った風でもなくレいやピアと話している姿が見受けられた。

やっぱり友達ならば女の子同士の方が打ち解けるのが早いようだ。とはいえ、会話会話の合間にほんの少しだけみせる表情がまだ吹っ切れていない事を思わせる。

「見惚れんのか？」

「ぼーっとディーバを見過ぎたせいか、目ざとくゲイトがこちらを見つけてくる。」

「んー、ちょっとだけ違うけど……これでもいいのかな、って」

「おいおい、フェイトの提案だろ？この花見？」

「いや、違くてさー俺騎士として支える、って誓ったけど実際は友達ってことでディーバに接してるし、みんなにもそう頼んでる。それが良かったのかな、って」

「フェイトは少し寂しそうに悩んだ表情を見せたが、ゲイトはフェイトの額に指を弾くと立ち上がる。」

「それでいいんだろ？……見るよ、姫さん笑えてるんだぜ。見かけだけでもいい、空元気でもいい、笑うことが出来る程には心が回復してきたんだから。もっと胸を張れよ」

「今度はフェイトの背中を強めに叩いて、そのまま用を足しに行ってしまった。」

「フェイト？」

「ディーバは会話から少し外れ、こちらにを伺うように視線を投げかける。」

「……なんでもない。それよりさっきまで何の話だったんだ？」

「料理の話。レイの料理が酷いって」

「ち、違うってば！味はちゃんとしてる！」

「でもね、まな板が5つもなくなっちゃたんだよ？木製じゃ材料ごと切っちゃうからって、合金のまな板を買ってようやく出来るんだから、酷いよねって」

「ああ、そりゃレイが酷い」

「うつつ……」

「アハハ、と笑うみんなだったが、やっぱりフェイトはディーバの様子に気がかった。」

「そっいえばディーバってケバブ好きなの？」

レイが何気なく聞いた質問で

「うん、昔よく母さんが……」

ディーバがハツとした表情を作り、レイもハツと気づく。話題は慎重に選んではいたはずだが、ホンの少し油断したし、思った他から結び付いてしまった。

「……」

戻ってきたゲイトも含め、言葉を発そうとするが言葉が出てこない。上手く気遣いつつ、この変に捻じれた空気をなんとか元に戻そうと考えた空白が良くなかった。

「ごめん、ちよつと抜けるね」

そう言つてディーバが席を立ち、背を向けてしまふ。

「あ……」

原因を作ってしまったレイが最もいたたまれなく、でもレイよりもディーバのフロローをみんなが考えていたのだが間に合わなかった。

「今日はありがと、じゃ」

そういつて立ち去ろうとしたディーバの左手を、フェイトの右手が掴む。

後ろを振り返るのが辛いとでも言わんばかりに、背を向けたまま頑なに動かないディーバを見てフェイトは反射的に手を伸ばし掴んだ。いいが、戻す魔法の言葉も思い浮かばずに結局はこう言うしかなかった。

「送つていくよ、ディーバ1人じゃ不安だからな」

頷きも否定もなかったが、フェイトはそれを肯として手を離さないようにしっかりと握りしめ歩きだした。

「今日は付き合ってくれてサンキューな。また明日な」

レイの責任ではないよ、そう伝えたかったが2人を同時に庇うことは不可能だった。

残された3人は何とも言えない空気の中、お開きの片づけをすることにする。

「姉さん、ドンマイ」

「レイ、気にすんな。レイが言っても俺が聞いてた」

「……ありがとう」

自分は心のコントロールが上手い方だとは思うが、それでも言葉で人を傷つけてしまった時の後味の悪さは格別だ。

ありがたい友人と妹を持って、レイは内心で喜んだ。

「また明日……か」

フェイトはそう言うてくれた。また学校で、ではなくまた明日、つまり、明日も会ってくれ、と解釈して欲しかったのだろう。……もつとも明日もサボってくれ、とも取れるが。

「後でフェイトに連絡しとかないな。明日の予定を立てないと」

「そうだね、今度は何をしようか？」

ゲイトとピアが明日の事に想いを馳せるが、レイとしては明日やることは決まっている。

「謝らないと」

3人と別れてから、しばらくの間フェイトとディーバの間には無言がただよっていたが、フェイトから会話のきっかけを作ってみる。

「今日はおめかししてくれたのに悪いな、あんまり褒められなかった」

先の出来ごとにはなるべく触れず、とはいえ全く触れないわけでもない微妙な聞きまわしに、ディーバは少しだけ疲れて言葉を返す。

「素直にさっきの私は悪かった、って言っているのよ？そんな遠まわしは却って疲れるわ」

と、毒を吐くように言うてくれたので遠慮なく入る。

「んじゃさっきの悪かった。レイもわざとじゃないんだ、そこんとこ許してやってくれないか？」

「別に怒ったわけじゃなくて……なんとなく思い出しちゃって、帰

りたくなっただけ。だからあんまり気にしないで」

その気持ちを作ってしまった事を謝っているんだが、とは決して口には出さなかったフエイトである。

それきり、会話もまた途絶え足音だけが町に響く。

しばらくそのまま進んでいると――

「ディーバさん？」

と、また町の人に気付かれた。

ああ、面倒事に巻き込まれるな、と予感したフエイトの想いは予想を上回って裏切られる。

「ディーバさん、その男性は？手を繋いで歩いていらっしやったみたいですが……まさか恋人ですか！？」

「えっ！？故郷の話とかつてもしかして嘘？あれもしかしてお忍びデートのためとか――」

下らない勘違いを言いかけた、中年太めの男性を遠慮なく殴り飛ばした。

「あまり失礼な事をいうな。にわかの子ハ―じゃ何も知らないだろうが、ディーバ様は本当に今心を痛めており、療養中だ。あんまりこの町にゴシップもどきがあるなら、来期以降この町はおろかこの国にもディーバ様がご来国しないこととなる。そうなれば、この町の責任となり国からは大分見放され資金援助に困るだろうな――分かったら無駄な詮索は止めて、とつとと道を開けろ」

そんな権力が微塵もあるはずもないフエイトは、まさに虎の威を借りる狐のように嘘八百で町民を黙らせ道を開けさせた。

少々尾が付きそうな騒動にしまったが、昨日から大通りを歩く度につきまとわれるのは勘弁なため実力行使に打ってでた。

後にする時もひそひそ声で噂話はされているだろうが、たかだか噂だと割り切って無視してディーバを送る。

ディーバの泊っているホテルに近づいた頃に、ディーバが口を開いた。

「さっきの……あんなにする必要はなかったんじゃない？」

と、少々行き過ぎた行いを咎めるように口を尖らせこちらを注意する。

「悪かった。だが、俺は何よりディーバを優先したいんだ。助けを待つ者であればそれも助けるし、悪意の無い者であればそれなりに善処もするが、さっきのは明らかな悪意を持っていた。……あんな邪推をするような奴を助ける騎士になつた覚えはなくてな」

後半は明らかにディーバに対しての弁明だったが、果たしてディーバは許してくれたようだ。

「……私のためだった、……それなら許す。でもあんまり派手にやらないで、殴られた方もきつと痛いだろうから」

「分かつてるよ、殴ったこっちだって痛いんだぜ？」

「そう」

前日とは変わって、言葉少なに別れたが初日が喧嘩別れだっただけに今日の中でも成果があつたと言える位だ。

「表面を癒すことは出来ても、心の奥の傷は中々治らないもんだ。

――難しいね」

そう思い直し、フェイトは明日のディーバとの出会いを夢想する。

「いつてえ。なんなんだ、あのガキ……」

殴られた中年男性は頬をさすりながら、ブツブツと文句を言いながら裏通りに入る。

とりわけ周りの視線は自分に集中しており、町の皆が自分を責めるように睨みつけてきたのは恐怖だった。

「俺が何したつていうんだよ」

ガンツ！と道端のごみ箱を乱暴に蹴りあげると、コロコロと転がり黒づくめの男の前へと転がっていく。

「面白い話を持っているな。どうだ、もっと詳しく話してくれないか？酒でも奢ろう」

「お、本当か！ああいいいいいぜ、話してやるよ。酒まで馳走になるなんて悪いな、あんちゃん」

黒づくめの男は静かに首を横に振る。

「こちら仕事なんでね、あんたの話はものによっちゃ世界を変えちまう力があるんだぜ？」

黒づくめの男は薄く笑うと、極上の獲物にありつこうと歩幅を速めた。

不穩

「ソクラテウス・フィール！さすがだったよ！」

そう呼びとめた男性は、目の前の銀髪長身の女性を呼びとめた。

「当然でしょ？私は歌姫なのよ」

そう自信たつぷりに答えるソクラテウスは髪を手で払いながら面倒臭そうだった。

「私が舞台に出て成功以外ありえない、そうでしょ？」

質問ではなく断定。余程の自信を持つていなければこんな言葉は口に出せないが、このソクラテウスという女性はそれだけの實力を持つていた。

「その通りだ、あの憎きディーバとかいう小娘が消えた以上、お前こそが世界の歌姫だよ」

男は満面の笑みでソクラテウスを褒めちぎるが、それは逆鱗に触れる一言であった。

「ディーバがいなければ？……あんな小便臭いガキがいてもいなくても私の實力は世界が知っている！――なのに媚びの売り方だけは一人前なあのガキは、それを實力と勘違いされて寵愛されて。本当に腹立たしい！！」

呼びとめた男性を置き去りに、控室へ足を乱暴に運びこの場から退場する世界で2番目の歌姫。

引き合いにだされるディーバは世界で1番で、引き合いに出させられるソクラテウスは世界で2番目だった。

何事でも1番と2番では大きく違う。知ってる人は知ってるが、単純な知名度では圧倒的に劣ってしまうのだ。

単純に世界で1番高い山は？と聞かれ『エベレスト山』と答えられる人は多くとも、世界で2番目に高い山は？と聞かれ即答出来るものは愕然と減るのが世の常だ。

なによりも、歌姫という称号は本来1人にしか贈られることなく、

くだらないマスコミがライバルと位置付けるため自分にも歌姫という称号が回ってきただけだった。

本来呼ばれていたのは――

「本っ当に腹立たいし」

毒付きながら控室に入るソクラテウス。

その控室の周りでは、公演のスタッフが囁いていた。

「やっぱり公演の出来も、お客様の反応も美蝶紀じゃ代役だな」

――

翌日、フェイトは再び友人3人とディーバの部屋を訪れようと思ったのだが、レイとピアを迎えに行った所レイは既に出発したのと、今はフェイト、ゲイト、ピアの3人だけだ。

「しかしレイはなんでこんなに早く出発してんだ？」

フェイトが当然の疑問を口に出すが、ピアは分かっているようで、「姉さん昨日のをあのままにしなくなかったんだと思う。だから皆が来る前に謝っておきたかったんじゃないかな？」

言われてみれば責任感の強いレイだ。むしろその線が一番濃厚でもある。

「でも、あいつ忘れてるかもしれないけど、魔法なしだとディーバの声聞こえないと思うんだけどな」

そこが問題なのだ。普通に謝りに行くのなら感心する所だが、今のディーバは言葉が極端に小さく、唇もあまり動かさないため集音魔法を使わなくてはディーバが何を言っているのかすら分からないのだ。

「ま、心配なら早く行こうぜ。時間は今日も有限だってな」

ゲイトが敢えて軽く言ってくれたことにより、こちらの空気はいい具合に弛緩する。

「だな、……つと部屋の前にレイがいないってことは部屋の中かな？」

今日は最初から全員に集音魔法を掛けてあるので、聞こえないということはない。

コンコン

扉を軽くノックし、フェイト達は扉の外で待つ。

- 中に人のいる気配と、話声が少しするので恐らくレイとディーバだろう。

「ハーイ」と出迎えの言葉と同時に扉を開けてくれたのは、レイだった。

「おはよ、相変わらず早いな」

「はよ、レイ抜け駆けはズルイぞ」

「姉さん大丈夫だった？」

相も変わらず気さくな3人に笑みを強めて部屋の中へ招き入れるレイ。

「うん、皆入って。ディーバが待ってるから」

そうして部屋の中へ入った3人は、ディーバが既に着替えていたことに気がついた。

服装自体は昨日と同じだが、何度見ても似合うので問題ないと思う。

「ディーバ、良い子にしてたか？」

もはやどちらが年上か分からない発言に、ディーバはムツとしてフェイトを睨む。

「私の方が年上なんだからね！フェイト失礼よ」

と抗議してくるが、あっさりスルーされてディーバはますます拗ねる。

「レイ？魔法を掛けるぞ」

フェイトが今のままでは不便だと思ったからか、レイに魔法を掛けようとするが、

「待って、私今日はこのままでいい」

レイからはまさかの言葉が返ってきた。

「姉さん？いくらなんでもそれじゃ会話できないんじゃない？」

ピアの不安も最もだったが、レイは首を横に振る。

「魔法は確かに便利だけど、私達人間は異国の間でも最初は言葉が通じずに、それでもコミュニケーションを怠らなかつたからこそ和訳して今じゃ言葉の違いをハッキリと分かるようになったわ。――それと同じ、言葉が伝わらなくてもさつきからコミュニケーションは取れてたわ、苦労はしたけど、ね？」

そう言つてディーバに顔を向けると、ディーバもコクンと頷く。

「だから私は今日は普通にコミュニケーションを取ってみようと思つてるの。とは言つてもディーバには苦労かけちゃうけどね」

苦笑しながらも答えるレイのそれは、とても意外なことで、誰も実行しなかつたことだ。

魔法があるから、それでディーバの声を拾えたことは確かだったが、そんなものがなくてもレイは自分なりに考えて真摯に向き合つている。

『これは負けたな』

フェイトはそう心から思つて、レイに憧れを抱いた。

「今日はどうするの？」

レイから問われ、フェイトは今日立てていた予定を全て崩して、こう答える。

「今日はディーバの発声練習にしようか」

ピクツ、と明らかに緊張に体が強張るディーバにフェイトは優しく告げる。

「別に歌つてくれとか、音程を取る発声練習でもなく普通の発声だ。俺達は魔法を使つてから聞こえるけど、レイには聞こえてないだろ？いくらボディランゲージである程度伝わつたとしても、限界があるしレイが疲れる。だからこそちよつとずつでもいいから声を出していこう、な？」

優しく、優しく肩に自らの手を乗せるように触れディーバに伝わる

よう、顔を覗き込み目を合わせる。

「俺が嘘を言ってると思うか？」

真摯にディーバを見つめるフェイトの目はあまりに近く、意識してしまったディーバはその瞳に一瞬の間吸い込まれてしまった。

そんな事は露知らず、そのままディーバの瞳を見つめ続けるフェイトに観念したように

「……………分かった、やってみる」

そう答えさせることに成功した。

「んじややってみるか、まずは、あ、い、う、え、お。だけでいいからやってみ」

「あ、い、う、え、お」

魔法を使っていれば聞こえるが、唇がそんなに動いていないし絶対に普通にやっていたら聞こえない。

「レイ、聞こえた？」

そう聞いてみると

「聞こえない、ディーバ？さっきも言ってたけど唇だけでもせめて動かしてくれないと、分からない」

意外に辛口な採点のレイだったが、ディーバは負けないうでもいうように、

「あ、い、う、え、お」

と、さっきよりも唇を動かして発音する。

「おっ」

もしかしたらこんなにスムーズに行くのは、既にレイが試してトレーニングした後なのかも、と思うと鳶が油揚げを攫う状態だが今は気にしないようにしておく。

「んじや今日はあいいうえおだけを1000回な」

「鬼」

「悪魔」

「スパルタ」

「人でなし」

ディーバも含め4人から一斉に突っ込まれてしまい、フェイトは苦笑いで返した。

それからは、適度に休憩を挟みつつ本当にあいいうえおだけを繰り返して発音させた。

唇の動きは単純で、舌や喉の動きによって音を決めるのだから唇をあまり動かせていないディーバには、ひたすらにこの動きをなれさせて大きくするのが目的だったからだ。

とはいえドクターストップならぬ、フレンドストップが度々掛かり、そのまま雑談に移るためディーバの気分転換にはよさそうだった。

お昼休憩では再びお弁当となり、今度は女性陣力薦の唐揚げ弁当になった。

唐揚げのどこが女の子らしいのかは審議したい所だが、鶏肉がヘルシーということで妥協ポイントとなった。

油で揚げたら結局カロリーは、という発言は暴力によってねじ伏せられたこともここに付け加えておく。

それからは練習もそこに、雑談ばかりだった。

騎士学校の話や、先生の話、それにディーバからも公演の話等を聞かせてもらい、時間はあつという間に過ぎ去っていった。

「もう日暮れか」

既に夕方の紅の空も沈み、時刻は間もなく夜に差し掛かる。

「それじゃ今日はこの辺りでお開きと致しますか。ディーバ、また明日な」

皆が名残惜しそうに立ち上がるが、ディーバはフェイトに声を掛けた。

「フェイト、ちょっとだけ残ってくれる？」

その言葉に友人達は気をきかせて先に部屋を出る。

フェイトはディーバに近寄ると、ディーバの言葉を待った。

「あのね、今日もだけど……昨日も、一昨日も楽しかった。私フェイトに会えて感謝しているの、本当にありがとう」

その言葉にフェイトは優しく笑いかける。

「俺だつてディーバといて楽しいさ。友達を紹介したのだからディーバが楽しくなればと思うのと同じように、あいつらも楽しんで欲しかったからだし、何より俺が皆と一緒にいて楽しいと思ったからさ。だからディーバは気にしないいい」

フェイトの優しい微笑みに、ディーバは満足したのか枕で顔を隠してしまう。

「また明日」

「ああ、また明日」

今日の終わりには大分口が開くようになってきているし、唇の動きもこなれてきているようだった。

精神的なもので、一時的にショックで閉ざされてしまっただけなのだから、時間をかければ治ると思っていたし、何より内的要因を取り除けなくても、外的要因から内的要因の改善に繋がるならばこんなに上手くいくことはない。

言葉が出ないという事をトラウマとして考えてしまっている場合、言葉さえ喋れるようになれば自然とトラウマは薄れていく。

今日の成果に満足できたフェイトは上機嫌で部屋を後にした。

夜――

夜闇に紛れ黒づくめの男が、ある寂れたホテルの一室を見上げる。

「歌姫さん、あんたがいると邪魔な人もいるって事を理解した方がいい。迂闊な事は書けなかったが、昨日の出来事は弁解の余地なくあんたの失脚だ」

くくつ、と喉をならす黒づくめの男は杯を月に掲げ乾杯をする。

「俺の仕事はこれで終わりかな？ いや、もう一仕事あるか。――精

々楽しみにさせてもらおうか」

翌朝

今日も何事もなく、ディーバと過ごして1日を終える予定だった所に朝にはけたたましい携帯の着信音が響く。

「もしもし」

とりあえず出てみると、

「フェイト?!新聞読んだ?」

と急を要する用件だったらしく、かなり焦っているレイからの電話だった。

「新聞?読んでないが・・・」

「だから読みなさいって言ったでしょ。・・・いい、ニュースにあるのはディーバのことよ」

「ディーバの!?!」

何故このタイミングでディーバの事が記事になるのかと、不吉な事を考えていると

「多分フェイト不味い判断したハズよ、記事にはディーバの恋人デートを邪魔され一般人を殴打と書いてあるわ」

「なんだって!?!」

そういえばと思う。一昨日そんな出来ごとを起こしたような・・・

「実際には騎士学校の生徒、としか書いてないけど学校サボってるのなんかフェイトとゲイトしかいないからすぐに分かるわ。写真こそ無いものの、証言の裏は町の人からいくつか取れたみたいでかなりあくどい記事になってる。」

フェイトは自分の浅はかさを呪いたくなるが、それで事態が好転するわけでもない。

「記事には主にそれが切り始めて、その後にディーバを中傷するの
がつらつらと書いてあるわ。憶測もいい所でいい加減だけど、最初
の見出しが事実でインパクトを付けてるから他の記事も、嘘のくせ
に長ったらしく書いて本当っぽく見せてるわ」

一体誰がこんな酷い事をするのだろう？ディーバは家族を失い、た
だ悲しんでいただけだというのに、何故こんなに酷い仕打ちを考え
つくのだろうか？

「――分かった、ありがとう。直ぐにでもディーバの所に飛んでい
く」

「了解、私達は今日はちよつと学校に行ってくるわ。本来ならあん
たが先生に掛けあう所なんだからね」

「サンキュ、本当にレイには恩ばかりだな」

「そういうならさつさと借りは返しなさいよね、全く――くれぐれ
もディーバにこの話はしないようにね」

「そうだな、今日は部屋で大人しくすることにしよう。ありがとな」
「はいはい」

そう言つて電話を切るレイだったが、今は何よりその存在がありが
たかった。

「急がなきゃ」

飛行魔法を使い、一刻も早くディーバの下へ――

コンコン

「ディーバ？いるか？」

ノックと共に声をかけ、呼び出してみるが返事はない。

――いや、人の気配が多いし話声もする。

これはおかしいと思い、部屋へ入ろうとするが鍵が掛かって入
ることが出来ない。

「……甘く見られたもんだ」

キンツ、と振り抜いた剣により鍵の部分を切り裂くとフェイトは部

屋へと入った。

「誰だ？」

そこにはディーバを囲むように大の大人達が5人もいた。

誰一人として見知った顔はいなかったが、それでもその大人達がディーバに対して何かを言い、ディーバは答えられないという状況であることは察しがついた。

そのうちの一人がこちらに目を向けると、一瞥し吐き捨てる。

「君が例の厄介者か、随分とディーバのイメージをダウンさせてくれたようだね。事によっては損害賠償を要求することを覚悟するといい」

「騎士学校の生徒なんて皆親に頼るしかない脛かじりだろう？大人の世界に首を突っ込むんじゃない」

一人が口を開けばそれに追従するかのごとく口を開く大人達に、フエイトは我慢の限界に来ていた。

「俺はあんた達に誰かと聞いた、俺はディーバの騎士フエイト・セーブだ。あんた達が誰であろうと、騎士である俺はディーバの意志を最も尊重し守る者だ。――故に敵対しようが切り捨てようが俺には関係がない」

フエイトが剣に手を置き軽く脅すと、それだけで皆一歩たじろぎ囲みが薄くなる。

『大人ってのはどうしてこうも醜いのか』

それだけ心に置きながらも、囲みを割ってディーバに近づく。

「ディーバ、おはよう。ここじゃ話し辛そうだし、場所を変えようか」

ディーバはただコクンと頷くと、フエイトに手を引かれるまま歩きだした。

「ま、待て。待つんだディーバ！こんな子供に付いていく必要はない！それよりも公演の事だが――」

その言葉でフエイトは理解すると、ディーバに小声で確認を取る。

「ディーバ？こいつらに今声が出ないってこと言ったか？」

その言葉にディーバは首を横に振る。

「なら言ってもいいか？少なくとも今のディーバには舞台に戻る声も、心も足りない。それならいつその事、1年でも2年でも離れた方がいいと思うんだけど……ディーバは、どう思う？」

フェイトはここだけは間違えずに言葉を表わす。

『最後の決断は、ディーバ自身が決めなくてはいけない』

周りの大人に流され、強制的に決められたのではなく、辛くても自ら考え自らで選ぶ取る。

フェイトはそれをディーバにして欲しかったのだ。

- -だが、ディーバは首を縦にも横にも振らず、ただ立ちつくしてしまふ。

それは今までの癖、自分の意志が介入する場所がなかったことへの諦め。それが染みついてしまった悪癖だった。

フェイトは急がせるつもりもなく、とりあえずこの場を収めようとする。

「今はディーバの体調が優れない、後ほど改めて正式に返事を出すから待っててくれ」

後ろの大人達はまだ何か言いたそうだったが、フェイトが騎士である以上暴力に訴えることもできずにただ悔しそうに舌打ちをするだけだった。

「ディーバ？大丈夫か？」

しばらく歩き、人目を避けるように新しく宿を見つけてチェックインする。

ディーバはあれから言葉を発することもなく、ただ人形のようにフェイトに手を引かれて歩くだけだった。

ようやく見つけた宿の部屋で、落ち着くことができたのかディーバはベッドに深く腰を下ろす。

「ディーバ、とりあえず一息つこう。ほら」

フェイトは水差しから水を注ぐと、ディーバに渡す。

コップを受け取ったディーバは、何かを考えた後水を飲み干すとようやく息を吐いた。

「ありがと…… フェイト最初に会った時もこうやってお水をくれたよね」

「ん？…… そうだな、そーいやすうだったか」

別段意識してやったことではないのだが、冷たい水は熱くなった頭にはいいし、何より隙間を作ってやることで息をつけるという理由でだ。

「ありがと、…… さっきの人達は私のスタッフだよ。公演を全部すっぽかしてきちゃったから、連れ戻しに来たんだと思う」

やはりそうか、と思うが今まで連れ戻しに来なかったのは場所が分からなかったのではなく、

「新聞に載っちゃったんだってね？ フェイトやりすぎだよ」

珍しく苦笑いで、フェイトを責める訳でもなくその責任の所在がフェイトにはないと庇われているようでどこか居心地が悪い。

「そっか…… 聞いたのか」

「うん、異国の地でバカンスだったね。国王の公演より自分の遊びや彼氏を優先させるあばずれだとか、中々酷い言われようだったみたい」

フェイトは急いで出てきたため、新聞を読んでいなかったがレイが心配したのはそれだけ悪意がある記事だったからなのだろう。

「レイから聞いてきたんだが予想以上に酷いな。…… ちなみにあいつらは俺のためにわざわざ学校に行って弁明してくれるらしい。 -

- 本当に俺には勿体ない位の友達さ」

珍しくフェイトが感傷に耽っていたため、ディーバはその珍しさ故にフェイトが気になってしまう。

「フェイトでも悩むこととか、落ち込むことってあるんだ」

「失礼だな、俺だって悩んだことはしょっちゅうあるし、落ち込む

ことだってあるさ。誰もが完璧じゃないんだ、だからこそ助け合うってことの意味は、この世界で何よりも価値があると思う」

短い付き合いだ、フェイトがこんなに真面目に話してくれたのは初日だけだ。

それだけフェイトも今回の事態を重くみて、ディーバに声を掛けてくれているのだろう。

「ありがと」

突然のディーバの礼に、フェイトは意味を掴めずただ何となく頷くだけだった。

「で、これからのことなんだけど」

今度はディーバから提案があった。

「私、休むことにする。――ううん、辞めることにする。もうね、

声も出ないし歌を歌えないなら引退しなきゃ」

「だめだ」

ディーバの考えた答えであろう結論を、フェイトは一蹴した。

「なんで！？さっきは私に決めさせてくれたのに」

ディーバの混乱も怒りも当然だったが、フェイトもさっきの一言で終わらせるつもりはなかった。

「休むことはいいけど、辞めることまで決める必要はない。声が出た時、歌をまた歌えた時に辞めてしまっていたらきつと後悔する。もう、自分はある世界じゃないから、と。それはディーバのためにならない」

フェイトは相変わらず先まで見て考えてくれているが、ディーバは納得できない。

「それはフェイトの考えでしょ？声が出なくなっているのは事実だし、その後歌を歌いたくなるかなんてフェイトには分からない！？なんで決めつけるの！？」

それはもっともな怒りで、もっともな問い掛けでもあった。

何故？それがディーバは知りたいのだ。

……フェイトはしばらく考えた後、言葉を選ぶように答える。

「俺はディーバの歌、好きだよ？ディーバを知ったのは確かに歌姫っていう名前が先だけど、俺はディーバの歌が好きになったんだ。

ディーバが世界で1番上手いなんていう地位がなくなっても、俺はディーバの歌を好きでいられる。……だからかな、俺は正論を並べるけど本当は俺の希望でもあったんだ。ディーバがまた歌ってくれる日が来る事を願うのを。……ごめん、完全に私情だった」

フェイトは頭を下げる。正論はとても正しいが、正論をいう人間が正しいわけではない。

世の中正論だけで動いているのならば、歴史は間違わないし争いだっておきない。

いつも正論を使う人間は自分に都合がいいように解釈し並べてしまう。今回のフェイトもまさにそれだった。

ディーバは立ち上がり、窓に手をかざすと空を見上げてフェイトに答える。

「そっか、フェイトは私の歌、知ってたんだ」

短く呟く声には、寂しさが混ざっていたことをフェイトは感じる。

「……知ってた。困っているディーバを助ける事とは関係ない思っただけ言わなかったけど、それは何より俺が君の歌に囚われていたからかもしれない。……本当に、悪かった」

再び、フェイトは頭を下げるがディーバから返事はない。

5分、10分と経過し、ディーバから言葉が出た。

「今日はありがと、自分の声のこと、考えてみるから今日は帰って

……大丈夫、フェイトには感謝してるんだから。だから……明日もちゃんと来て？」

涙声になりながらもフェイトにお願いをするディーバに、フェイトは無言で頷く。

「また、明日」

こんなに緊張する約束の言葉が他にあるだろうか？言葉だけならば
楽に発せられるものの、気持ちを考えるとそれはとても緊張を孕ん
だものになってしまう。

「また、明日」

震える声で答えるディーバは、最後まで窓の外を見たままで表情を
伺えなかった。

ゆっくりドアを閉め、その場を去るフェイト。

「なんで、かな。……なんで」

両親を失った時にすら出てこなかった涙が、今は溢れ、留まること
を知らないように床へと吸い込まれるように流れる。

「フェイト……」

呟いた声は無限の虚空を彷徨う如く、届く事は決して無かった。

悪名

フェイトは手持無沙汰になってしまったこともあり、またレイ達が学校にどう説明しているかも気になったため、学校に向かうことにした。

「さすがに今日手が空くとは思わなかったけど、レイ達にばっか頼ってたらバチが当たるな」

気になるのはディーバだが、明日まで待つてくれと言うならば今は友人と学校を気にするべきだと割り切り、しばらく振りに登校する。時刻は昼間近で、そろそろ昼休みに差し掛かる頃合いだろう。先生方も職員室に集まっているだろうし、ギルバード先生を探す手間も省けそうだと楽観視していた。

もう隠す事もない飛行魔法にて校舎入口に着地すると、職員室へと向かって歩く。

……すると、見覚えのある3人が廊下に立たされていることに気づく。

「レイ！ピア！ゲイト！」

3人を見つけ走って駆け寄るが、3人はこちらに気づいていても目を合わせてくれない。

良く見るとバケツを両手に持たされており、今は懲罰中なのだろう。それにしてもバケツ持ち位なら軽い罰だな、とフェイトは思ったが、近くで中身を見て啞然とした。

「ニトログリセリン？」

絶対に刺激や火気厳禁の爆発薬が、バケツ一杯に満たされていたのだ。

もし、誤って大きな振動を与えてしまったり、落とすものならそれは致命的な爆発を引き起こす。

思わず唾を飲み込む程緊張したが、やることは変わらない。この勇敢で友達想いの友人を助けるべくフェイトは職員室に飛びこむ。

「失礼します!!」

ガラッ、と大きな音を立て職員室に入室すると、様々な先生の値踏みするような、厄介者をみるような、なめつくような視線にさらされつつもフェイトは姿勢を正す。

「ギルバード先生に会いに来ました。先生はどこに？」

「待っていたぞ、フェイト・セーブ」

その筋肉隆々した肉体を持ち、威圧感を振り回す巨体を持つ男性こそ、探していたクラス担任であるギルバード先生その人であった。「お前の行動で我が校の品位は貶められ、奇しくも確保出来なかった私達教師陣にお叱りが来たよ。君はここまで全て考え責任を持つために出頭してきた、その解釈で間違いないな」

普段ルールにそれほど拘るようにみえないギルバードだったが、今回の件は余程の重大事だったのだろう。

射抜く視線は全く容赦がなく、生徒を見るというよりも獲物を見る肉食獣の目に近い。

しかし、フェイトは怯まない。怯む事はディーバの騎士になった時から、許されてはいない。

「俺はディーバの騎士として最善を考え、行動してきました。ディーバの事を考えれば結果は着実に出ていますし、ディーバも苦しみ、悩みつつも前を向く力を取り戻しつつあります。――ですから、今回の騒動の責任は全て結果で負う事にします！」

「バカモンが!!」

しかし、そんなフェイトの報告にも発言も全てをかき消すように一括で吹き飛ばす。

フェイトは動揺を隠しながらもギルバードから視線を外さない。

「いいか、フェイトお前はアルト王より騎士の称号を授かったが、まだ子供だ！誰かを支えるには人生経験も足りないし、判断も経験が足りない。だからこそお前では1人を支えるにも時間もかかるし、遠回りもするし、こうして迷惑をかける。それを自覚しろと言って

いる――！」

フェイトは驚いた。確かにギルバードは怒ってはいるが、どちらかというとならフェイトの事を心配した怒り方だ。

今はまだ早い――フェイトを評価していなければ出来ない発言にしか聞こえなかった。

だが、フェイトも引くわけにはいかない。

「経験が足りないのは自覚しています。まだ15歳で、学生ですから。でも、誰かを助けたいと思う気持ちに歳も経験も関係ない！大切なものは気持ちだから！」

「青いわ――！」

ギルバードが拳を振り上げフェイトの顔目掛けて振り抜かれる――誰もかそう思ったが、フェイトは逃げることも、防御することもせず、目を開けたままただ拳を見据える。

ピタッ、と本当に寸前の所で拳は止められ、ギルバードは拳を収める。

「どうやら、本気のような」

「勿論です」

否、フェイトは先ほどから拳すら目にくれずギルバードだけを見つめ続けていた。

だからこそ、その真剣さが伝わったのか、

「ならばお前の覚悟を示してみろ。経験より気持ちの方が大切だと言っただけ。ならばそれを証明してみろ」

話せば分かる、そうフェイトは思ってた安堵したのだが

「廊下に立っている3人、お前の事を庇っていたよ。だからこそあいつらを含めて4人で私を見事倒してみろ！」

――訂正、そういえばこのおっさん入学式初日もこんなノリだったっけ……

結局、ギルバード相手に4人掛かりでも倒せば見逃してくれるとい

う条件になったため、フェイトはザツといきさつを説明し、3人のバケツを先生に返す。

「ありがとな、皆。俺のために」

「昼飯1回な」

「私はココアもつけて」

「むしろ何故ここにいる？」

レイだけは、朝から電話で話していたためフェイトが学校にいるのが不思議でしうがなかったようだが、それも簡潔に説明する。

「……なるほど、しかし裏がありそうだな」

レイの意見はかなりの的を射ている。記事が掲載された当日の早朝にも関わらず、ディーバのスタッフがこの地にいたということが不自然なのだ。

フェイトは気付かなかったが、言われてみれば酷く不自然に感じる。

「記事を見て本当に朝一番で駆けつけたっていう可能性は？」

ピアがレイに確認するように尋ねるが、レイは首を横に振る。

「ないな、ホテルの場所が分かっていたのも不自然だし、元から示し合わせていたか、現地でディーバを監視していたかどちらかだろう。そのどちらにしてもディーバにこんな形でしか接触してこないなら、人間として最低だが」

吐き捨てるようにいうレイだが、フェイトもそれに賛成だ。

ディーバに友達らしい友達が最初からいれば、フェイトが関わらずとも良い方向に向かっていたかもしれないのだ。

「それはそれとして、問題は先生よ」

ピアは思考を切り替え、今日の前で立ちふさがる難題に目を向ける。

「そうね……ギルバード先生は強いわ」

見た感じそのままだが、あれだけの迫力と筋肉を持ちながら見かけ倒しということはないだろう。

とても騎士には見えないが、ギルドに所属していたという線は十分に考えられる。

「作戦はまたフェイトに任せる感じで大丈夫か？」

ゲイトが確認のため、皆に向けて話すが、皆同意したようにフェイトに向き直る。

「OK、校庭に出てルールを確認した後作戦を練ろう」

そうして校庭に向かい始めた4人だが、先に向かったギルバードを確認しようと思い校庭を見てもまだ姿が見えない。

「あれ？まだ着いてないのかな？」

廊下で少なからず時間を使っていたため、とつくに校庭に出ていてもおかしくはないのだが……

そう思っていたら、対戦相手兼学校の先生の居場所は意外な所で判明した。

「これより昼休みを使って、1年生の悪名高いフェイト、1年生最優秀レイ、他自分ギルバード担当クラス生のピア、及びゲイトの4人が私ギルバードと模擬戦を行う。興味のある者は見学をするように、以上だ」

……………

まさかの校内放送により、昼休みの模擬戦を宣伝していた。

「俺、悪名高い？」

「私の名が……」

「私通り名がないの地味かも」

「俺もそう思った。なんか事件でも起こすか」

「「やめてくれ」」

フェイトとレイが見事にハモって懇願するため、ゲイト達もしぶしぶながら納得しつつ校庭に向かうことにした。

「本当、なんであの先生は戦いが好きで目立ちたいんだよ」

わざわざ注目されたくないフェイトに取って、あの先生の行動は予測不能でもあり、突飛過ぎて頭が痛くなる存在だった。

「来たな」

校内放送していたにも関わらず、フェイト達より早く校庭に着いている早業に感心しつつも気は緩めない。

「先生、ルールの確認を」

フェイトはあくまでポーカーフエイスを崩さないように無表情を保つが、ゲイトとピアはやや緊張しているようだ。

「ルールは簡単、私を倒せばお前達の勝ち。勝てば今までの行動を多めに見た上で今後の歌姫ディーバとの関係はお前達に任せよう」その条件にホツとするフェイトを、次の言葉で絶望に叩き落とす。

「お前達が負ければ、ディーバ様の居場所を言ってもらい、然るべき手順を持ってディーバ様を保護させてもらう。その際の邪魔等は認めないため、懲罰室にしばらくいてもらう事になる」

「なっ！」

驚愕したのはゲイトだ。まさか軟禁されるとは思ってもみなかつたのだろつ。

あくまで手を引かせると約束させられるだけかと思っていたら、こちらは嚴重に監視されるという結果だ。

- - 負ければ後はない。

「いいだろう、その条件を飲む」

「いいの？」

すかさずこちらに確認を送るのはレイだ。昨日の1件もあるし、ディーバともつと仲良くなりたいたいと思っている彼女の意志も尊重したい所だが、今はフェイトがリーダーである以上フェイトの決断がぶれてしまつてはいけない。

「勿論だ、負けなければいい」

飄々と余裕を見せるフェイト。そこにギルバードから声がかかる。「戦闘のルールは何でもアリだ。フェイト、お前の魔法を使つても構わんぞ？」

騎士学校におけるイレギュラーな魔法すら認めるというギルバードには、絶対に負けないという自信がみなぎっていた。

「はっ、俺は騎士です。魔法は使いませんよ」

「ならば、私は一步も動かないで戦おう」

何があってもこちらにハンデをつけたいように見えるギルバードだったが、考えてみれば当然かもしれない。

本来1年生4人では、最上級生の5年生1人にも勝てないと言われる。それは技術であつたり、体力であつたり、ようするに戦闘経験値の量がものを言うからだ。

そんな5年生でも現役騎士に勝てないのだから、それと同格の強さを持つギルドに元所属していたギルバードを倒すのがどれほど無謀なのかが分かる。

本来イレギュラーな人材のレイとフェイトでも2年生位の実力しかないのだ。魔法なしでは勝ち目はない。

それでもフェイトは魔法を使わないと言った、それは侮りだと教えるためにギルバードはハンデを付ける。

つまるところそんな話だ。

「フェイト」

不安そうな目でこちらを見るピアには、いつになく不安が漂っている。

いつもなら勝ち気に染まる紅蓮の瞳も今は、消える間近の灯だ。

「大丈夫、作戦を立てよう」

フェイトはそんな不安が表立たないよう、平静を取り繕い作戦会議を始める。

「こちらは人数を活かして攻めよう。ピアは双剣のスピードと手数を活かして背後から連撃、ゲイトはランスの重量とパワーを活かして開幕から突進、俺とレイで左右挟撃をして一気に仕留める」

作戦は単純が故に仲間の戦力を削がず最大限に生かすような配置、そして初撃の僅かな緩みを突いて一撃必倒を狙う。

長期戦になれば経験の差が勝敗を分かつと判断したためだった。

「分かつた」

そう頷き構えるゲイトとピアを余所に、レイだけは不安のままだっ

た。

「レイ？」

気になり話しかけると、レイは不安からかそれとも思案したからかフェイトに異を唱える。

「フェイト、今からでも作戦を変えない？ やっぱり魔法抜きなんて意地を張らずに、フェイトの魔法を最大限活かす戦略にした方がいいんじゃない……」

そう、フェイトはチームワークを重視したためこの作戦にしたのだが、単純な火力でみれば3人が壁になっているうちにフェイトが上級魔法を唱える方が圧倒的に強い。

フェイトも恐らくそこまで考えたのだろうが、今回は挑発に乗った手前もあるし、こちらに気を使った結果か魔法を軸に据えようというのではない。

「大丈夫、いくらギルドでも騎士でも俺達の実力は低い訳じゃない。初撃に賭ければ必ず突破口が見える」

それはすでに堅実でもなく、ギャンブルに近いものをレイは感じたが、フェイトが方針を転換しないため最初の作戦で決定する。

「準備はいいか？ ギャラリーもそこそこ集まったみたいだな。 -

- 開始だ、いつでも来い！！」

そう開始を宣言し、ディーバを賭けた学校の争いが始まった。

「後ろから - - 連携！」

「正面突破だ！！」

ピアとゲイトが作戦通りに行動し、レイとフェイトもそれに遅れないよう間合いを素早く詰めて移動する。

決まれば一撃必倒だ、いくら達人でも4方向同時に捌く事はできな

いし、防御も不可能。

対しギルバードはレザーグローブを両手に装着し、直立不動でこちらを待ち受ける。

その仁王立ちたる迫力は、不動明王をも思わせ一瞬こちらに動揺を与えるがそれでも剣閃は鈍らない。

防御の構えも取らず、校庭の中心で不動の姿勢を貫く姿勢に校舎内で見物していたギャラリーから、思わず悲鳴が漏れるがそれは1年生か2年生のものだろう。

4年生や5年生はただ無機質に勝敗だけを見守っていた。いや、先が見えていたのかもしれない――

「ハアツ!!!!!!!!!!!!!!」

4人の裂帛した気合を乗せた渾身の一撃が、ギルバードに4方向から襲いかかるが、

ギン――――

まるで鉄同士が衝突したような音を立て、結果が訪れた。

4人の刃は全てギルバードの筋肉を切り裂くことができずに、表面を浅く切りつけただけに留まった。

「なっ!」

あまりのデタラメにフェイトも絶句する。

ピアの双剣、レイの騎士剣を集中させた筋肉の鎧でガードしたのだけでも既に超人的だが、正面から加速を乗せたゲイトのランスの突進すら弾き、フェイトは斬鉄を行うように手加減なく切り上げたが、唯一ギルバードが反応し動かし左腕の拳圧により軸や呼吸がずらされ、結果ただの斬撃へと成り下がる。

そして結果は、誰一人ギルバードの筋肉の鎧を突破出来ずに硬直を余儀なくされ、反撃を受けないよう離脱に転じるしかない。

だが、それすらギルバードの予想の範疇で、
「ハッツ!!!!!!!!!!!!!!」

と、メチャクチャに大きな声で叫ばれ三半規管が一時的に狂う。

『なんてことだ!』

本当に一歩も動かずに決着が付きそうだったのだ。

これだけの力の差を見せつけられれば、敢えて攻撃を行わなくても結果が分かる。

- - フェイト達の完敗だ。

これが立ちはだかる壁、なんと大きなものか。

ギルバードは一歩も動く気配を見せず、飛び下がるフェイト達に声の弾丸以上の追撃はしてこなかった。

一旦、下がり態勢を立て直そうとするフェイト達は一箇所に固まる。「魔法を使う」

自分の見積もりの甘さを反省したくなるが、負ければ失うことしかない。

ならば魔法を使い勝ちを拾う。

フェイトはこの時冷静なようで冷静になりきれていなかった。

友人達は少なからず動揺していたし、力の差に飲まれていた。

フェイトの魔法を使う、という一言を飲み込むには半歩呼吸が合わず、結果連携が遅れる。

指示待ち人間、とまではいかないがフェイトが魔法で何を狙うかを推測するには経験も付き合いの長さも足りていない。

それにフェイトは頭が回らずに、「魔法を使う」の一言で済ませてしまったのが間違いだったのだ。

フェイトは飛び退りながら考えていたのは、魔法の選択。

初級魔法では足止めにもならず、かわされるのが関の山、上級魔法や複合魔法は詠唱時間から言って間に合わない判断。

よって中級魔法の乱打によって隙をみつけようとし、そのための詠唱や魔法構築、属性や規模を選択し発動するまでを1秒以内でコンプリートしようと考える。

だからこそ、援護を頼みたかったのだがそれは伝わることなく、最悪の方向に転がる。

今まで不動明王のように直立していたギルバードの姿が消えたのだ。

- 正確に言えば消えたように見える程高速でこちらに接近したため見失ったしまった。

その間僅か0.5秒を切る速さだった。

フェイトが想像していたのは、魔法の発動後だ。

フェイトの詠唱速度は速く、魔法が潰されることがないため基本的に相手は魔法を避けるか、防御するか、二択になりがちで、それを見てから更なる追撃を行うのが常套手段だった。

もしくはやはり魔法発動阻止を狙ってこちらに接近するタイプ。

炎の竜や、竜巻、地割れ等発動されれば危険なものは、発動してからでは防御も何もが遅いため根本的に魔法を発動させないタイプも確かに存在する。

それでも、魔法を切り替えて詠唱を加速したり、もしくはそもそも間に合わない等があるためやはり魔法で勝つ事が多かった。

しかし、それは騎士フェイトではなく魔法師フェイトの姿でもあった。

どうしても詠唱している間は騎士ではなく、魔法師のそれになってしまったため魔法師としての戦い方をするのがフェイトの弱点でもあった。

全ての魔法師に言われる弱点、魔法を発動させてくれない敵。

魔法を無力化する、もしくは魔法を使わせない敵、それが魔法師の天敵なのだが目の前に見えるギルバードはまさにその後者であった。魔法発動の魔力の流れを読みこちらに高速で接近し、1秒すら与えてくれない相手では魔法師のメリットが活かせない、そして騎士として挑んでも先程返り打ちにあった。

- - - 手詰まり。せめて援護があれば1秒稼げて結果もまた違う

ものになりそうだった。

そんな幾多の考えすら無情に、ギルバードの速度を乗せた拳がフェイトの意識を刈り取るために打ち抜かれる。

『終わった――』

「ぐはあ――！」

フェイトが諦めた瞬間でも、諦めていない仲間はいたのだ。

何をするのか分からない状況でも、フェイトが落とされれば負けと踏んで今その身を呈してゲイトが前に出て庇ったのだ。

ギルバードの拳をランスでガードし、フェイトへの直撃を逸らそうとするが、ランスが拳で砕かれ、自身も宙に舞い上がる程の攻撃をくらいゲイトはリタイヤする。

「ゲイト！」

いや、今は諦めなかった友のためこの時間全てを活かすべきだ！
思考を瞬時に切り替え、目の前で拳を振り抜き硬直が残るギルバードへ中級魔法を打ち込む。

「アクアジェット！」

圧倒的水流と爆発で相手を押し流す魔法だが、ギルバード相手では文字通り足止めにしかない。

だが、距離を作っておけば態勢は整えられる。

「リリアウト！」

レイとピアを抱きかかえ空中に退避する。――空中ですら安全圏とは思えないが、地上にいるよりは時間が取れると思い、駆け足で作戦を伝え直す。

「スマン！作戦を直す、俺が上級魔法で方を付けるから時間を稼いでくれ！」

ようやく作戦を伝えることが出来たため、レイもピアも思考をクリアにし純粋に戦いに没頭する。

「OK」

「任せて」

重力魔法をオートで発動するようにし、レイとピアが空中から飛び降りギルバードへと向かう。

その間にフェイトは屋上に飛び、着地をした後詠唱を開始する。

上級魔法の時間稼ぎのため、遠く離れた屋上に着地するが安心できない。

遠距離技を持つてはいると思うが、それを使わせないためにレイとピアが奮戦してくれる。

逆にそれが邪魔でレイとピアの相手をするならばその間に上級魔法を完成させる。

こちらへ一直線に来るならば、いくらでも中級魔法で迎撃できる。

今度こそ、全ての方程式を完成させ上級魔法を詠唱する。

『強く、強くあるべき魔法――手加減は、いらない!!』

上級魔法を驚くべき速さで完成させたフェイトだが、校庭には予想を遥かに超えた状況が映し出されていた。

『レイもピアもやられた上に、遠距離技、生命エネルギーを打ち出すつもりか!?!』

既にギルバードはフェイトの予想を大きく越え、こちらへの迎撃を準備している。その両拳を合わせこちらに向ける様は、まるで砲台を連想させる。

アルト王のエクスカリバーは尋常ではないとしても、生命エネルギーを使う技は諸刃の剣として有名でもある。

強力な分反動も凄まじい、だが人によつては上級魔法に匹敵するとも――

しかし、今を逃せばもうチャンスは来ない。レイもピアもゲイトもやられた以上次の詠唱時間は無いものと考えられるため、ここで負けたらこの勝負、フェイト達の負けだ。

「負けられ――ないんだよおお!!!!」

フェイトが吠え、地上にいるギルバードへ向け自身最強の上級魔法を叩き込む。

「アルテマ・ライフ！！！！」

校舎5階からギルバードと1年生の模擬戦を見る双剣士と緋色のマントを羽織る騎士。

「あつけないな」

緋色の騎士は当初赤魔騎士として有名になった、フェイトの観戦のため覗いていたのだが、あまりにも稚拙で途中から飽き飽きとしていた。

1人がやられ、もう2人もあつという間にねじ伏せられた今、残りはギルバードとフェイトの2人だけだったが、フェイトは生憎屋上に着地したため見えない。

とは言ってもギルバードが拳から『氣導拳』を繰り出そうとしているのを見て、勝敗は決したと見て間違いない。

「クロ、戻るぞ」

昼休みを無駄にする訳にもいかず、興味を失ったものを見ているのもつまらないため、次の時間の準備をしようと教室に戻りかける。

「待った」

と、双剣士のクロが言ったと同時に、自分達の頭上が魔力で震えるのを感じる。

「これは……」

その規模に緋色の騎士は初めて、驚愕を示す。

「王宮魔法師……いや、国家魔法師クラスの魔力集束？この大気の震えは……」

言葉途中に、その大気の震えは現実姿を顕現する。

「アルテマ・ライフ！！！！」

屋上から轟く魔法名は、最上級生の彼女らの知識を持ってしても未知の魔法であった。

「氣導拳！！！！」

対し、地上にて生命エネルギーを圧縮させ、その光にて自分に向かう、青く輝く極太のレーザーのような魔法にぶつける。

「ぬおおお！？」

それはギルバードに生じた、初めての焦りであった。

この氣導拳は遠距離技でもあると同時に、ギルバードの二柱の奥義の1つでもあったからだ。

それ故威力に関して絶対の信頼を置き、今までの死線を潜り抜けた相棒とも呼べる技でもあった。

それが――

ぶつかつた瞬間、そのエネルギーの全てを喰らい尽くされ、こちらを押し潰さんとする裁きの光だった。

「まさか、これほどとは……」

ギルバードが知る上級魔法ならば、氣導拳で相殺できるものが多い中、フェイトが放つた上級魔法がランクが違う。

上級魔法を更に2ランク程上げなければ、ギルバードの氣導拳を軽々と消し飛ばす説明が付かない。

さしずめ数十人規模で完成する大規模上級魔法といった所だ。

逃げ出すには既に時間が残されておらず、まさか模擬戦において命を落とすとは思わなかったが、ギルバードは死を覚悟した。

ドゴオオオオ！！！！！！

その青き光は地面という地面を喰らうように決り、飲み込み、周囲を焦土に変えようと働く爆弾の如く暴れ回った。

校舎で見ていたギャラリーも、あまりの光量と爆音に窓から離れ伏せた位だ。

無論、最上級生の彼女らも例外なく身を伏せた。

やがて、砂塵が少しずつ収まり、光も音も落ち着いた頃にみなが思った。

果たして教師も、校庭に倒れていた他の１年生も無事なのだろうか？と。

恐る恐る校庭を見る騎士生徒は、言葉を失う。

校庭に真新しいクレーターが中央から端に渡るまで深く創られていたのは、もはや驚きを通り越し恐怖に近い。

勿論人影は見当たらない。

あまりの威力と味方すら吹き飛ばす規模と、それを放ったフェイトに皆一様に恐怖が刻まれた。

しかし、実際には。

「先生、俺の勝ちでいいですね？」

「あ……………ああ」

フェイトが短距離転移魔法を発動させ、間一髪の所でみんなを屋上に避難させていたので無事だった。

この最強の攻撃魔法に加え、冷静に仲間と教師であるギルバードを転移させたという状況判断力と、実力はもはや誰も口を挟めるレベルではなかった。

介入

「あれは一体……」

屋上に転移させられたギルバードは息も絶え絶えに、先の滅びの光を頭に巡らせた。

「あれは俺の最強魔法、アルテマ・ライフです。魔力に生命エネルギーも練り込んだ、まあ規格外の魔法ですかね」

「生命エネルギーを乗せたのか」

通常魔法はその魔力を集束、解放するだけで十分な威力を持ち、對抗するには同じ量の魔力や生命エネルギーが必要となる。

だが、先の一撃は上級魔法に加え、多量の生命エネルギーをも加えていたのだから、道理であっさりと砕かれるわけだ。

「――転移したのについては？」

「あれは試作型テレポーションです。両親が発明家なものでして、その試作品を使ったんですよ。短距離しか無理な上に、使いきりという正に試作品の範疇ですが。俺の視覚内に入る任意の人物を俺の側に転移させます。……もともと、冷静に考えればアルテマ・ライフより下の複合上級魔法でも十分に思いましたが、なんだかんだで俺も冷静になれていなかったようです」

上級魔法では相殺で終わるが、複合上級魔法ならば上級魔法2発分だ。上級魔法10倍以上の破壊力を持つアルテマ・ライフはやはりやり過ぎでしかない。

「しかし、ここは私の完敗だ。正直魔法の力を甘くみていた、ギルドに居た時ですらこんな戦慄は覚えなかった程だ」

やはり、この筋肉隆々とした先生はギルド所属だったらしい。拳を武器にしている時点で騎士ではないだろうと思っていたが、予想は当たりだ。

「いえ、俺の方こそ経験が足りないことを痛感しました。勝ちも勝ちですが、仲間はボロボロ、俺も判断ミスは相次ぐ、仕舞いにはと

んでも魔法を使うという誤判断ですから。……正直、自信を無くしますよ」

「それだけ負けられないという気持ちがあったのだろう？……今回は勝負に免じて見逃すが、経験不足を痛感したのなら、事が片付き次第学校に復帰しろ。お前には教えておきたい事がたくさんあるんだ」

そんなギルバードの申し出に、フェイトは肩を竦めて答える。

「終わったら戻りますよ。俺は騎士学校の生徒ですから」

結局レイ、ピア、ゲイトの3人は気絶したまま保健室で休むことになったので、フェイトも魔法を使った反動で疲れてしまったためそのまま早退扱いで帰宅した。

「ただいま」

とは言っても妹は学校、両親は仕事で家には誰もおらず、冷蔵庫からミルクを取りだしコップ一杯飲み干すと、制服を着替える気力も沸かず眠りに落ちた。

『ディーバ、大丈夫かな？』

浅い眠りだったため、夢を夢と自覚するなかでフェイトはディーバの事を心配していた。

様々な大人がディーバに群がる図は、とても滑稽で醜いものだった。あんな劣悪な環境にずっといたならば、ディーバの心が歪むのも少しばかり理解できる。

ディーバは金となる木程にしか思われていないことが、よく分かった。――あんな場所にディーバを戻したくない。

でも、ディーバの歌姫としての姿はとても憧れるもだったし、何よりもその歌声に痺れ、とても好きだった事も事実だった。

歌姫という仕事には戻って欲しい、でも周りの環境がディーバに優しくなっただけで、それは重し

叶わぬ願いは自らの理想を押し付ける形となるだけで、それは重し

にかなり得ない。

そんな自己矛盾を抱えながら、夢は続いていた。

「お兄ちゃん？」

妹が帰ってきたようだ。ソファでそのまま寝てしまっていたフェイトに気付き、声をかけてくれた。

「ん……アイリスか。おかえり」

「ただいま、お兄ちゃんうなされてたよ？大丈夫？」

「あ……ああ、大丈夫だ」

腰を浮かせ、立ち上がる。目の前にいる変わらない妹の姿に安心する自分がいる。

騎士学校に入学してから、自身や周りの変化が大きすぎて日常というものを見失いかけてしまうこともあったが、家だけは違った。

相変わらず両親は変な発明ばかりするし、妹は少しずつ学校に慣れてきているようで授業や魔法の話をしてくれる。

そんな日常に置いていかれた、ディーバが少し寂しいがまだ遅くはない。まだ……間に合うはずだ。

「今日は時間が出来たから魔法の練習を見てやるよ、今から始めるか？」

「うん！やった！」

まだ日暮れ前の夕方、庭であんまり大きな音を出すと目立ってしまうが今日くらいはいいだろうと思ひ、少しばかり練習の難易度を上げようか、とフェイトは考えた。

普段なら火と水をトレーニングさせることが多かったが、今日は土と火を練習させることにした。

複合魔法、相反する属性を除けば複合させることにより飛躍的に効果があがるものもある。

例えば水と風を組み合わせて、風の変異である電気を水に通せば飛躍的に攻撃力が増すし、火と土で組み合わせれば火に質量を持たせ

単純な防御を貫く矛ともなり得る。

一流の魔法師は複合魔法をアレンジする者が多く、そのアレンジこそが奥義ともなるのだ。

出来るだけ早く、有用で、汎用性が高い魔法を生み出すことは魔法師の人生における目標と言っても差し支えない。

妹は火と水を先天的に得意とする珍しい型なので、まずは片方扱いやすい火を主軸に魔法を教えてきた。

今日は一步前進させての練習だが、果たして結果は――

「熱土」

単純に地面に熱を加えて、それを飛ばす練習だがこれが上手いかない。

地面に熱が加わった時点で操作が2つに増えるのだが、その操作のコツが上手く掴めないらしい。

地面を飛ばそうとすると、熱が冷めていたり、逆に熱は保っているが地面を飛ばせなかったりと、今日の成果は上げられなかった。

「うーうー、ごめんね」

「謝ることじゃないさ、でも感覚を掴めるように練習はしておけよ」

「はい」

上手いかなかったことで、少し不機嫌だが宿題として出された事はキチンとこなすタイプなので、次に見る時にはもう少し上達しているだろう。

「さて夕飯は、手抜きでチャーハンでいいか」

「うん！お兄ちゃんのチャーハン美味しいから好き」

「んじゃ後はかき玉汁でも作って、野菜はキュウリの漬物でいいか」
ここ最近忙しくて、当番もサボりがちだったが今日は久々に当番を果たせそうだ。

「んじゃサクサク作るから材料出すの手伝ってくれ」

「はい」

……明日は何か事態が好転しますように。

「全く、あなたの記事には参りますよ」

「センセ、今後とも御贔屓に」

ローウェンの町にある裏通りの一角で密会する、スーツ姿の男性と黒づくめの男。

「後はもうひと押し欲しい所ですが」

「いえいえ、実はもう手を打ってありましてね」

「ほほう」

スーツの男性は興味深そうに目を細める。対し黒づくめの男はニヤニヤと笑みを崩さないままだ。

「とある筋の人達にリークをしてみたんですが、そりゃまあ殺到しましたよ。『歌えない歌姫』、なんてね」

「前にもらった情報は本当だったと？」

「ええ、追跡調査して判明しましたがね。本当にあの姫嬢は声が出ないようで、……そうなれば」

「美蝶妃が舞いますね」

「歌姫も独占しちゃあいけない、長く置けば誰でも飽きちまう。私らはそんな世間の方達のリクエストにお答えしているだけですよ」

「違うない」

はっはっは、と互いを牽制しあうように高らかに笑う2人。

「では、約束の金は指定された口座に振り込んでおきます」

「まいど」

そうして表へと帰る住民に、裏の住民は初めて素顔を見せる。

「端金なんかどうでもいいんだよ、バカが。所詮は盤上の駒にすぎない哀れな子羊か」

裏の住民は闇へと姿を消した――

翌日

昨日レイに言われた通り、朝の新聞には目を通してみるフェイトだったか……

「なんだ……なんだよ、これ」

絶句するしかなかった。

「歌えない歌姫！喉に抱えていた爆弾はついに破裂した！？」

信じられない記事だった。昨日といいでっち上げが酷過ぎる……

ディーバは心を痛め、あまりの痛みに声を出す事すら出来ない状態だったのに、掛かり付けの専門医という陳腐な言葉で嘘を脚色し、まるで事実かのように見せかける。

この記事唯一の真実は、故郷が襲われたショック、という一文だけだろう。

フェイトの脳裏には怒りを通り越して憎しみが沸き上がってくる。

「誰だ……誰が、こんな」

フェイトの義に照らし合わせてみても、これは完全なる『悪』だ。

悪意を感じるではなく、悪そのもの。フェイトは携帯を取り出し電話をかける。

新聞というものが権力という力ならば――

その後急いでディーバの宿に駆けつけた所、先日とは違う顔ぶれの大人がすでにディーバの部屋に入り込んでいた。

見るからに高そうな服に身を包み、下品な程宝石で脚色された男性。その顔にはのっぺりとした作り笑顔が貼り付けられ、心を見れば肥え太った豚にしか見えない。いや、豚に失礼か。

「あんた誰だ？」

ディーバの騎士である以上、相手がどんな貴族であろうが怯んではいけないし、礼を失したからといって謝る義理もない。

肥え太った男はこちらを一瞥すると、SPと見られる黒服の男4人がこちらに向かってくる。

「坊やが例の生徒かい？今ジェラルミン卿はディーバ様と大切なお話をしているのだよ、静かにしてくれないか？」

絶対に通さないとでもいうように、4人でフェイトの進路を塞ぐSP。

パツと見て分かる範囲では、銃を持っただけの護衛とは思えない。

- 騎士やギルドに成り損ねた者が、取りたてられた者かもしれない。

身のこなしが違う。ギルバード程ではないだろうが、最上級生の5年生か4年生程の力は持っていそうだ。

そんな4人に囲まれては、動くに動けずフェイトは様子を見守るしかない。

「ディーバちゃん、私は君を養子に迎えたいんだ。君も両親を失い孤独になりさぞ辛いだろう。だが、安心したまえ、私は君の家族になりたいんだ」

声も出せないディーバに対して何を身勝手な、とフェイトは思うがディーバは俯いたままだ。

昨日あれから何を考えたのだろうか？ディーバの表情には迷いが見える。

「ディーバ……」

言葉を出そうとした瞬間、4つの銃口がこちらの頭を寸分違わずに狙い撃つ。

声を出す事すら許されないこの状況、もしかして。

ディーバがこちらに向けられた銃口を見て、恐怖を表わす。

ディーバの目の前にいる肥え太った男はこちらを意にもかけずに言葉繋ぐ。

「おやおや、大切なお友達かな？でもね、今はディーバちゃんと大切なお話をしているから邪魔しないでくれるかな？ねえ、ディーバちゃん。君がいい返事をくれないと、おじさんちょっと不機嫌にな

「つちやうかもよ？」

「ガチャ！」

あからさまに音を立てこちらを威嚇するように拳銃の金属音を鳴らす。――これじゃ脅しじゃないか。

「君は今喋れない程精神的なショックが大きいんだってね？でも大丈夫、世界の名医と呼ばれる先生が君をきつと治してくれるから。だから何も心配しないで、この書類にサインしてくればいいんだよ」

「やめ――」

「ドゴツ！」

フェイトは一瞬何が起きたか理解出来なかったが、目の前の男に鳩尾を蹴りあげられたのだと理解した。

「チクシヨウ――なんて卑劣な。」

こんな状況、ディーバに見せられるわけがないのに……

そうは思っても、さっきの蹴りが始まりの合図かのように容赦なく蹴られ、踏みつけられ始めた。

「――！！！」

まだ喋ることの出来ないディーバだが、悲痛な心の叫びは伝わる。

やめろ！俺なら大丈夫だから、そんな紙破り捨てる！

そう言いたいのが、銃口が相変わらず至近距離で狙っている以上迂闊には動けずに、されるがままになってしまう。

魔法を使おうとしても、恐らく引き金を引く方が早い。部屋に飛びこんだ時から全開で戦っていれば、まだ状況はマシだったのに――後悔は尽きない、相手が暴力に出るか、その周辺の兵がどれだけの実力か、それを見極める判断力は15歳のフェイトには絶対的に足りなかった。

「――！！！」

ディーバは肥え太った男の袖を掴み、ペンを取りだすと名前を書き出す。

「やめる！」

叫んだ瞬間、とりわけ強烈な蹴りがフェイトの口に直撃し、口から血が出てしまう。

そんなフェイトを見ていられないかの如く、紙を差し出し終わらせてくれと願うディーバ。

いけない、そんな事をしちゃいけない！

そう思っても、今のフェイトはただただ無力だった。

「ほうほう、じゃあディーバちゃん早速だけど行こうか。オイ、お前らその辺で止めとけ、さっさと別荘に帰るぞ」

ようやく蹴りつけられる事が止み、男達は足早に部屋を後にするが、ディーバはこちらに何か一言だけ声を掛けて一緒に出て行ってしまった――

「チックシヨオオオ！！！」

独り取り残された部屋の中、パチパチパチ、と拍手を鳴らす者がいた。

「いや、素晴らしい、ディーバのあんな必死な顔を見たのは初めてだ。なあ、フェイト君？」

いつの間にか、ドアに寄りかかりこちらを見下す黒づくめの男が部屋にいた。

一体いつから来た？いくら怒りと悔しさが溢れていても、こんなに接近するまで気付かなかった訳がない。だが、現実には黒づくめの男はフェイトを見下しているのだ。

「君は最高のスパイスになってくれそうだと思ってね、申し訳ないが色々と動かせてもらった」

男がわざと含みつつ答える言葉は、想像する所1つしかない。

「お前が……お前がディーバの事を！！」

憎しみを込めた瞳で黒づくめの男を睨んでも、男は動じずに言葉を出す。

「僕はカロン。ディーバの純粋なファンさ」

「ふざけるな！！あれだけの悪意をさらして何が――」

「本当だよ、君には理解できないかもしれないが僕にとってディーバが全てなんだ」

どうかしている――この男はどうやら通常の思考を持っていないぶつ飛んだタイプだと分かった。

「何が狙いだ？」

「それは教えられないが、かわりにこっちを教えよう。さっきの男はジェラルミンと呼ばれる強欲な男だ。ディーバが舞台から落ちた瞬間にその欲望のはけ口としてディーバを欲しがった。落ちた歌姫はもう観客に求められない。だからいつ、どうやって消えても誰も興味を持たない。壊れた人形を誰も直さないのと一緒にね。だから大金をもらう代わりにこの場所をリークした。あいつはディーバの声が戻ろうが戻るまいが気にしないだろう。ただ愛玩人形が手に入った位にしか思っていないハズさ」

「ふっざけんな！！！！」

フェイトの怒号は廊下全てを震わす程に大きく、地震が起きたと錯覚する程だ。

「ふざけてはいない。よの中にはね、2番手というのが確実に存在するんだよ、世界の歌姫ディーバがいたせいで一番になれなかった日陰の妃がね。そういった者程闇が大きいんだ、実力を考えずただ自らの野望に飲まれる程小さな器なくせに、考えることは姑息でズルイ。おかげでホラ、この通りディーバは見事失脚しましたとさ」

「くっ！」

恐らくディーバは1人でいても誘拐されたかもしれないが、今は自分のせいで嫌な書類に無理やりサインしたのだ。

ディーバを放っておくわけにはいかない。

「いい顔だ、是非ディーバを助けてくれたまえ」

このカロンという男の考えていることが全く分からない。

ディーバを失脚させ、売り払い、それでもファンと言い張り、助け

るという。

……この男は一体？

「ノンビリしていいのかい？あの豚は飛行船を使うつもりだよ？いくら君でも分が悪いんじゃないかね？」

確かに気になるが、今はやはりディーバの方が先決。

助け出した後にこの男を問い正せばいい。

フェイトはカロンを一瞥すると、階下に向かって駆けだした。

「……………くくく、くあはははは！！！！こんなに上手くいくなんて、所詮子供だね。――ああ、ディーバ、もうすぐ君は僕の物になる。」

2人で一緒に永遠に生きよう」

黒づくめの服の内からあふれ出る狂気にフェイトは気付かぬまま、また間違える。

本当に危険なのはジェルミンではなく……

「アハハハハハ！！！」

この男だった。

禁呪

「どこだ!？」

宿の外に出て辺りを見渡してみるが、ディーバの姿も、黒服の姿も見当たらない。

「いや、奴らは車を使うはず、なら大通りの方か!」

予測を付け駆けだし始めたフェイトの視界に、見慣れた少女の姿が映った。

「リード?」

魔法学校に通うフェイトと同年の少女は、以前もこの町で再会したことがありどうやらこの町でよく見かけるようだ。

「リード久しぶり、久しぶりの所すまないがこの辺りをディーバ、

……いや歌姫ディーバか黒服みたいな連中が通らなかったか?」

言葉少なにこちらが急いでいることが分かつてはいるのだろう、けれどリードはゆっくりしや喋りを崩さずに、

「通りに行った、よ」

「そっかありがと」

確認が取れたことからフェイトは駆け足を早めてディーバの後を追おうとしたが、走りだした瞬間袖を引っ張られる。

振り返ってみれば案の定リードがフェイトの袖を引っ張っており、先に進めない。

「済まない、リード。今急いでいるから用事があるなら後に……」

「ううん、フェイトせっかち。私、手伝うよ?」

「リードが?」

そういえば以前この町が襲われた時もレイに協力をしてくれたみたいだし、リードも案外お人よしの類いなものかもしれない。

「分かった、ただ急いでいるからすぐに行くぞ」

「うん」

フェイトのダッシュには正直魔法学校の生徒であるリードが着いて

いくだけの脚力は無かったのだが、リードも然したるもので、自己加速魔法により重力をある程度操りこちらのスピードについてきている。

後ろを気にしないようにしつつも、気にしながら大通りに出るがデイーバ達らしき影は見当たらなかった。

「くそつ、どこへ……」

「フェイト、事情聞かせて、手助け出来るかも」

「あ、ああ」

フェイトはざっとデイーバが狙われている環境と、その狙ってきた相手についてリードに説明した。

「……なら、飛行船、使うかも。別荘なんてこの辺りに、無い」

「飛行船か」

確かにこの辺りは気候は安定しているが、別段リゾート地でもないため観光に向いているわけでもない。

そして飛行場は北ゲートから続く道の先にある。となれば

「北ゲートだ、北ゲートを出ようとする車のどれかにデイーバも乗っているはず。飛行魔法で追いかけるぞ！」

「フェイト、私、光学魔法で透明化できるよ」

「なんだって!？」

光学魔法とは火と風の応用魔法の一種でもあるが、その中に透明になれる魔法なんてものは現在登録されていない。

もし、登録されようものならこぞって覚える魔法師が多数殺到するだろう。

透明になれる、ということとは古くから隠密や犯罪に繋がるものが多く国家情報の流出に絡む案件すら出て来るに違いない。

最も過去に透明化魔法の実験は在ったらしいが、そのどれもが失敗しているそうだ。

風が吹いたり、雲が太陽を覆うだけで度重なるエネルギー調整が必要となる上に、こちらは見えていないのにこちらからは見えていないとはいけないという、現象に相反する矛盾を生みださなければな

らない、この世の理に背く行為だからだ。

単純に言えばこの世界では透明になれない、というルールが世界に設定されているからこそ誰も出来なかったものが、リードの力はそれを捻じ曲げルールの抜け道を作ったか、ルールを書き換えたという恐るべき発見をしたのだ。

驚くべきことだが、それでも今はディーバの方が優先。リードには今度色々聞けばいいだけのこと。

「分かった、リード頼む」

「うん」

そうして飛行魔法と透明化魔法という組み合わせにより、大空に姿を晒す事無く飛びあがった。

「北ゲート確認――いた！あの黒塗りの車か！！」

思ったより時間を取られていたせいか、見つけた車は今北ゲートを通過した所だった。

「他には車は見当たらないし、間違いないな。すぐに仕掛けるぞ」

「フェイト、ディーバにも、当たっちゃう、よ？」

「――そうだな」

タイヤをパンクさせるだけだろうが、最悪車が横転して大事故に繋がる可能性も無きにしもあらずだ。

「なら姿をみられていないアドバンテージを活かして、飛行場で俺が待ち構えて、リードが透明のまま潜伏してディーバを助けてくれないか？」

「いいよ」

「ありがとな、リード」

「ううん」

リードにあそこで会えた事は本当に僥倖だった。そうでなければ少なくとも運が絡んだ救出劇になっただろう。

「なら先回りだ、行くぞ！！」

そうしてフェイト達は飛行場へと先回りする。

「フアフアフア、ディーバちゃんは可愛いねえ。いや、これから先ディーバちゃんが私のためだけに声をあげてくれると思うと……いやいや堪らないな」

下卑た笑い声を抑えることもせずに、笑い飛ばすジェラルミン。

黒服に身を包む4人の元騎士は表情を変えず周囲を警戒し続ける。

彼らは今は国王の騎士ではなくこんな肥え太った貴族に雇われる犬のような騎士。

それは当初は屈辱だった。……しかし時が経つに連れ自らが何故騎士を選び、何故こうも墮落していったのかは思いだせず、ただただ日銭を稼ぐためだけに働く毎日。

時としては過去の仲間と顔を合わせる機会もあつたし、時としては剣を交え雇い主のために命を賭けたこともある。

ディーバを連れ去るような事柄も別段変わったことではない。他にも優秀な娘や、見目麗しき娘を連れ去った任務もあつた。

どの場合も取り残される側は絶望に沈んだ表情を見せ、怒りと憎しみでこちらを刺すように睨みつけるが、後に支払われる多額の金で表情を変えた親や、恋人の男達を何人も知っている。

今回のターゲットは身寄りがなく、今までのようなことは起こらないと思っていたが今回は少年騎士がついていた。

今までの男達と変わらず無力なのに視線に込める殺意だけは一人前、そして結局無力さを痛感し、現実には逆らえない権力という力にひれ伏す。

力は強ければ強い程抗えない、それは大人になれば誰もが通る道、避け得られない道、そう、それこそがこの世界の真理……そのハズが。

飛行場に到着し、飛行船のアスファルトの発着場まで車を回しジェラルミンを護衛するように車から降りると、あの少年騎士が目前に立ちはだかる様に立っていた。――いや、現実塞いでいるのだから。

どうやって？とは言わない。今自分達はジェラルミンの護衛なのだから、目の前に立ち塞がるのが誰であろうと排除するのみ――

「待つてたぜ、豚野郎」

フェイトは男達を挑発するように、普段使わない暴言ですら平気で振り回す。

「君は……誰だ？」

そしてジェラルミンはこちらを寸分たりとも覚えていないのだろう。奴の目にはあの時のフェイトは蠅以下にしか映っていなかったらしい。

だが、怒りは感じない。何故ならあの時の自分は、あの無力な自分はその存在と比べられてもしようがない程に惨めだったからだ！

「デীবバを、返してもらうぞ――！」

腰に差してあった鞘からホークルを抜き、戦闘態勢に入る。

今度は距離があるからか、4人の黒服は銃に頼ろうとせずに揃いも揃って騎士剣を抜く。

4対1、相手は今でこそ貴族の犬に成り下がっているが、元騎士であることは間違いない。現最上級生より強い相手が4人ともなれば、剣の実力では2年生程度までしか勝てないフェイトに勝ち目はない。だからこそ、待ち構えていた意味がある！

「アースシェイク！」

既に魔法を完成させておき、待機状態にしていた上級魔法を解き放つ。

土系統のアースシェイクは小型の地震を生み出し、範囲を指定する

ことでその空間だけはマゲニチユード6程を引き起こす。

だが、手慣れた騎士はこちらの魔法を既に知っていれば容易く突破してくる。

この魔法の弱点、範囲外に素早く跳躍で離脱することに――

だが、それこそフェイトの狙い通り。

「ディザスター――！」

今度は風の上級魔法である暴風によって、地から離れ踏み留まる事ができない、ただの人間を一切の容赦なく吹き飛ばす。

「うつ！？……おおお！！？」

4人は一斉に暴風によって吹き飛ばされ、身動きも攻撃もフェイトに届かないまま、遙か後方まで飛ばされ受け身も取れずに頭から地面に叩き付けられダウンする。

「な！何をしている！！貴様ら！早くこの賊を何とかせんか！！」

ジェラルミンは怒鳴り散らす、そもそも声が届くか分からない距離まで飛ばされた黒服に、それも気絶していれば声は届くはずもない。

よしんば届いたとしても戦うだけのコンディションには、程遠いだろう。

「くつ、貴様の目的はディーバか、なら下手なことをしてみろ、ディーバの命は――！！？」

突然ジェラルミンがふらついたと思えば、ディーバは何かに手を引かれるようにジェラルミンから離れていく。

「ま……て……」

よろよろと、それでも自分のものだと言わんばかりにディーバに手を伸ばす肥え太った男にフェイトは告げてやる。

「ディーバは俺の仲間が今、助けた。お前如きが縛っていい相手じゃないんだよ――！」

「ひつ、だ……だがこの誓約書がある限りディーバちゃんは……」

ジェラルミンが懷から出した誓約書は、突如燃え広がり、ただの灰となって地面へとこぼれ落ちる。

「見えんな」

フェイトか、それともリードか。たとえどちらであつても両方であつても、人の身を紙なんかで縛ることの理不尽さに怒り、誓約という理不尽を破棄する。

「た……ただでは済まんぞ！私に立てついて！貴様、騎士学校の生徒か、――許さん、許さんぞ必ず、ボフウォエー！！？」

ジェラルミンへ、怒りを込めた渾身の拳を打ち抜き頬骨ごと打ち抜く。

「黙れ、今意識があるかは知らんが権力には権力だ。……本当はこんなことで頼りなくなつたんだが、既に騎士王アルト・アヴァロンに今回の件について報告してある。そっちがその気ならばアヴァロンを敵に回すと知れ」

意外なことに、全力で殴りつけたにも関わらず意識があつたジェラルミンだったが、フェイトの言葉を聞きついに気絶した。

「終わった、ね」

すう、と透明化魔法を解除したリードがディーバのすぐ横に表れる。ディーバはリードが突然表れたことにビックリしたようで、口をポカンと開けている。

「終わったな、……ありがとなリード。おかげで迅速に片付いたよ。ディーバも無事でよかった」

時間にすれば1時間も経つてはいない、……しかし、あの時の絶望、引き離された孤独、フェイトという支え、友達を失つた喪失感、両親を無くし、声を失つたディーバに取つて2度目に大きな絶望だつたことだろう。

自分の身がどうなることも予想が付かず、フェイトはひどく怪我をさせられ、2度と会えないと覚悟した。

――けれど、フェイトは。……ディーバの騎士は駆けつけてきてく

れた。最初から怖い目に遭わなければいい、それが最善かもしれない。

でも、助けにきてくれた。あの時は間に合わなかったけれど、でも最後にはちゃんと間に合ってくれた。

それはきつとお姫様を助けに来てくれた王子様の物語のように、とびきりに輝く瞬間でもあった。

ディーバは自分の瞳に涙が浮かぶのを感じつつも、今はその喜びをフエイトに伝えたかった。

「――フエイト――！」

声が、――戻った。

声を失った歌姫、ディーバ。世間知らずで友達もいなくて、それでも大人の世界でずつと歌い希望を振りまいてきたディーバ。

どちらもディーバ。大人でもあり、子供でもあるディーバという友達、そして自分が支えると誓った歌姫。

その彼女がついに声を取り戻してくれた。

「――ディーバ――」

あまりの嬉しさに、こちらも涙ぐんでしまう。――参ったな、支える立場の騎士なのに。

「フエイト――！」

ハッキリと聞こえる、こちらを呼ぶ済んだ声。

どこまでも遠く、伸びやかに、喜びに満ちた涙声。ディーバが今生まれて初めて出した本当に嬉しいと思った声。

まるで雛が産声を上げたかのように、生命に満ち溢れた声と表情でこちらに駆け寄ってくるディーバ。

フエイトはそれをゆっくりと抱きとめようとして――

世界が、氷に覆われた。

「……………え？」

理解が追いつかない。

デীবは、デীবは今ようやく解放され、過去のトラウマさえも越えようやく生まれ変わったんだ。

そんな若雛のように無邪気で純粹に、こちらに駆け寄ってきたデীবは、永遠に触れ合うことができない氷の中に閉ざされている。

「……………デীব？」

なんだ？何が起きた？何が起きている？？

目の前に触れられそうな氷の壁、いや、自分が手を伸ばす事を恐れているからこそ触れられない氷の壁。

だって、デীবがコンナコオリノナカニルナンテ――

「フエイト！！」

大声で名前を呼ばれ、ハツと我に返る。

「フエイト、思考を止めちゃ、ダメ。これは、魔法。誰かの、魔法なんだか、ら」

「……………魔法」

ようやく頭が回転してきた。今日の前、デীবを閉じ込めているものは氷の檻のようなものだ。……………いや、出口がないし氷の箱の中に丁度デীবが入ってしまったっているようなことから考えれば氷の箱？

「……フェイト、これ、禁呪。『ディープフリーズ』、だと思う」

「……『ディープフリーズ』」

「おや？この魔法を知っている子がいるとはね」

ハッとして振り返る。つい先ほども味わったこの感覚、ディーバをジェラルミンに売っておきながら、ディーバを追えと言った謎の男

- - 名は

「カロンだよ。いや、よくやってくれたね、フェイト君」

「カロン……貴様」

どうやらこのカロンという男が『ディープフリーズ』を発動させたことは間違いないようだ。- - それにしてもこのタイミングで、なぜ？

「ふむ、やはり君は子供だね。……大人の愛については理解が及ばないらしい」

「何を……」

「僕はね、ディーバを愛しているんだ。狂おしい程に、その全て、魂まで手に入れても足りない位愛している。- - けれど、彼女は歌姫だ。皆が待っている、その歌声、その酔い、その美貌、その魔性、その神々しさに！！だから僕はずっと我慢していた……彼女が愚民の為に歌い続けている間は我慢しよう、と、ね」

何を言っているんだ？フェイトは視線を逸らすことなく、カロンを睨み続けた。

「それが、彼女の故郷が心無い者に襲われ、拳銃ショックでディーバは声を失ってしまった。……ああ、その時の僕の苦しみ、悲しみが分かるかい！？そしてその時思ったんだ、- - アア、ようやく僕の物にしていいいんだって、ね」

「……壊れている」

「そうかい？子供の君には分からないかもしれないが、これは愛なんだよ。よく束縛するような愛があるというが、温い。人間には大切なものを独占したい欲求が常にあるんだ、それは騎士である君も同じだよ？ディーバを独占したいからこそ騎士という立場を用いて

彼女に近づき、彼女を知り、彼女をもつと欲しくない、彼女を手放したくないと願った。……君と僕、形が違い手段が違っただけで願っているものの向きは同じなんだよ？」

「同じなわけがあるか！俺はディーバが再び自分の力で立つ事を望み、その時ディーバがまた足元を踏み外さないように、ディーバが知らなかった新しい心の強さを教えたかった！――それを貴様が！」

「違うね、君はディーバを渡したなくて今この場にいる。ジェラルミンは性格こそあれだけど、彼が抱えている名医は本物だ。声を取り戻すことも舞台に立つ事も彼の元の方が本来近道だったはず」
「だが、現実とは逆だ。たった今ディーバは声を取り戻した、お前が間違っている証拠だ！」

「おや？僕は追いかけると言ったはずだがね？論点がズレているよ。うだから正すけれど、僕は一重にディーバを愛しているだけなんだ。――だからこそ、君ならきつと物語の王子様のように助け出し、こうなると信じていた。そしてその瞬間のディーバこそ、天上の声、至高の表情、輝く躍動感！！そんなディーバが永遠に僕と共に在る。僕はそんなディーバがずっと、ずっとずっとずっとずっと欲しかったんだよ！！！！」

狂気に囚われ、すでに人の心無くした亡者に告げるには、フェイトは一言だけで十分だった。

「ディーバを元に戻せ」

「断る、ディーバは僕の物だ」

それが開戦の合図だった。

「アクアエチュード！サンダーボルト！！」

中級魔法2つでカロンを攻め立てるが、

「フィンブルヴェド」

3層に折り重なる波も、雷すらカロンを包む冷気により凍りつく。
「なっ！」

「無駄だよ、僕が使える魔法が3種類だけだが、全てが禁呪と呼ばれるものだ。上級魔法ですら弾くよ」

カロンを包む膜のようなものが『フィンブルヴェド』と呼ばれる禁呪なのだろう。防御魔法としてとても精度が高い。凍り易い水はともかく、雷まで凍らせるのは尋常ではない。

「これって防御だけじゃないよ？こっやって近づけば――！」

カロンがフィンブルヴェドを纏ったままこちらに突進してくる。

「くっ！」

左に避けて交わすが、確かにあれは攻撃にもなる。触れてしまえばフェイトも凍りつき戦闘不能は確実だ。

「マグナムボルケーノ――！」

すれ違いざまにマグマを打ち出してみるが、あの高温のマグマですら凍りつく。

……上級魔法ですら歯が立たないのは本当のようだ。

「理解したかい？止める手段がないならジッとしていたまえ、そうすれば見逃してあげるよ。……僕の目的はあくまでディーバだけだから」

こちらに興味を失ったかのように背を向け、ディーバの下へ向かうとするカロン。

「――ロックプラント――！」

地面が食虫植物の様にカロンを左右から大きく口を開け、飲み込む。なるほど、動きを封じるんなら凍らせても意味はない、か」

土の中、到ってダメージを受けていない様のカロンが冷静に分析する。

「……仕方ない、では禁呪3つ目を使わせてもらおうか。――コキユートス――！」

魔法名と同時に、白く凍てつく白光が打ち出され、そのレーザーのような光は地面をアッサリと吹き飛ばし、フェイトに襲いかかる。

「くっ――！」

間一髪避けることに成功したが、僅かに光に触れてしまったホーク

ルの先端はあつという間に砕けてしまった。

「なんだ!？」

「急激に冷えたものが温められると金属でも砕けるって知ってるかい?それと同じ現象だよ?」

「……戯言を」

今の外気は炎と同じ温度でもない。およそ気温22度程度で砕けてしまふならば、どれほどあの一瞬で冷やされたのか。だが、これで理解できた。禁呪は3つと言っていた。

1つは『デープフリーズ』。融けない牢獄。

2つ目は『フィンブルヴェド』。貫けない絶対の氷の鎧。

3つ目は『コキユートス』。魔王も凍らす狂気の光。

問題はどう攻略をすればいいか?

「フェイト、聞いて」

いつの間にか隣から聞こえる声にフェイトは振り向きそうになる。

「振り向かないで、気付かれたら、厄介」

「ああ」

リードは透明化し、フェイトの側にきていたようだが何か狙いがあるのだろうか?

「デープフリーズは、術者が倒れれば、解ける」

「本当か!？」

声を殺しつつ、なるべく唇も動かさないようにリードに聞き直す。

「本当、だから、カロンを、倒して」

「分かった。……他には?」

「フィンブルヴェドと、コキユートスは、両立できない」

「両立できない、か」

もしかしたら、あの氷の膜に秘密があるのかもしれない。――だとすればこちらの攻撃の手段は

「私の魔法と、私の足じゃ、足で纏い……ごめん」

「いいさ、むしろ方針が固まった位だ。感謝するよ、リード」

「……うん、離脱するから、遠慮、なく」

「ああ」

スツ、とフェイトの隣から気配が離れていくのを感じ、改めて前を見据える。

「作戦は決まったかい？」

「勿論」

どうやらお見通しのようだったが、それでもいい。

……後はどうやって奴のスキを突くか。

「フェイト君、僕も忙しい身だね。今からでも遅くはない。諦めて帰れば見逃そう。……これが最後の警告だよ？」

「随分と優しいじゃないか？そんなに勝つ自信がないのか？」

「僕は僕の残りの時間をディーバのために使いたいだけさ。それ以外は時間の無駄としか思っていない」

「時間の無駄……ね」

そこで、フェイトの脳裏に違和感が掠める。

『なんだ――今何か違和感が……？？』

「仕方がない子供だ。――じゃあ、始末するしかないよね！！」

カロンは目を細め、こちらへと駆けだしてきた。

「考えは後だ――ロックマウンテン！」

今度は大きな岩でカロンの進路を阻む。

「頭を使うようになったね、確かにコキュートスじゃないとこれは突破できない。――だが、君はコキュートスを甘く見過ぎだ。さっきのはデモンストレーションで手加減したが、今度は全力だ！！」
「ソクッ、とフェイトの背筋が未知の恐怖により電撃を受けたかの如く反応し、全力で空へと逃げることを本能レベルで選択する。

「コキュートス！！」

見渡せば、周りの飛行船ですら凍りつき、辺り数百メートルまで氷

の世界へと変貌していた。

「冗談……じゃない」

フェイトは禁呪の力を前に、必死に生きる手段の模索と、ディーバの命を助ける選択を迫られていた。

他がため

フェイトは空中に飛びながらも、コキュートスの威力に戦慄を覚えていた。

「なるほど、レーザー上に光を纏めるのではなく、フィールドに展開するようにコキュートスを放射したのか」

「ご明察、しかしよく避けたものだ。……大したものだよ、君はどうやらコキュートスが触れた個所までが一瞬で凍結するようだが、縦方向と横は必ずしも平行しているわけではないらしい。

現に地上ではおおそ半径300m程が氷の世界に包まれたが、地上から40m程離れた上空では氷の影響を受けていない。

単純に空には届かない、というのなら話は簡単だが……

「勿論、空中へも広げることが可能さ」

やはりそうか、とフェイトは感心する他ない。

とはいえ、コキュートスもフィンブルヴェドも、あの白い膜のようなものが絶対零度すら超える凍てつきをもたらすのだろう。だから視覚で感知できる範囲に気を配っておけば避けようはある。

「君はどうしてもコキュートスを使わせたいようだね……でも、君が空中にいるならば無理に相手する必要はない。ディーバを回収させてもらうよ」

「何!？」

どうやらカロンは何らかの手段を持ってディーバを運ぶらしい。 -

- 近づけたらダメだ。

「ロックプラント!」

「先と同じものは効かないよ!」

今度はフィンブルヴェドを横へ広げ、土がカロンを飲み込む前に凍結させ、無力化する。

「君も存外魔法に通じているようだが、相手が悪かったね。禁呪相手では魔法はランク下だ」

「くっ……」

もはや手詰まりに近い。相手の動きを封じる魔法も既に無力化され、攻撃は全て通らない。かといって近づいて剣技で応戦するにはリスクが高すぎる。

コキュートスを引き出しつつ、自分は避けて相手に魔法を打ち込む。それは針の穴を通すような繊細な業であり、自分の中で成功できる自信はハッキリ言えない。

フェイトが考えている間にも、カロンはどんどんディーバへと近づいている。

……もう後戻りはできない。

やるしかない、例え相打ちで終わろうともディーバの騎士としてこの命を懸けると決めた時から、命を代償の勝負をすることを！

「カロン！！見せてやるよ……俺の赤魔騎士としての誇りを」

「赤魔騎士の誇り？聞き慣れない騎士名だが、まさか学生の身分である君が騎士の称号を授かっているとはね……正直魔法を使えるという以外君の騎士としての才能はないようだが？」

「騎士になると願う者は、誰だって心の奥に強さを持っているんだ！それが分からないのならば、カロン！お前の野望もここまでだ！」

「……面白い、君に何が出来るのか。……さあ、見せてみたまえ！！」

「ああ、見せてやる！！アルテマ・ライフ！！！！」

フェイトは魔法力を極限まで高め、その魔力の渦に自身の生命エネルギーを流し混和させ極大の力を解き放つ。

「これはっ！？……魔力と……生命エネルギー？まさか！！」

カロンの驚愕はもつともだった。禁呪は魔法でもあるが、その内は自身の命を削る魔法でもあるからこそ、禁呪なのだ。

フェイトが放ったアルテマ・ライフは禁呪に近いというよりも、同じ禁呪としか思えない。

「フィンプルヴェドでは防御しきれない……迎え撃て！コキュートス！！」

カロンは自らを覆う白い膜を全て攻撃に変換し、フェイトのアルテム・ライフを迎え撃つ。

「潰せええ！！」

そして青き極光と、白き冷光が互いを蹴散らさんとはかりに衝突した。

「ぐっ！？」

先に悲鳴を上げたのは、カロンだった。同じ禁呪というランクではフェイトの魔法力、そして生命エネルギーには太刀打ちできなかったのだ。

「お、おのれええ！！コキュートス、我が命を喰い荒らしてでもいい！奴を止めるおおお！！！」

そしてカロンは自らの命を削り取ることにより、コキュートスの威力を上昇させる。

「バカが、この場を勝ってもそれだけ生命を削れば数日も持たないだろう」

「いいのさ……僕はディーバと共に死ぬ！そうさ、現世で一緒になれなくても、せめてあの世では一緒にいれればいい！僕は、僕は……ディーバを愛しているんだああああ！！」

そして、白き冷光は青き極光を押し返し始め、徐々にその光を削り取る。

「もう少し、……もう少しだ。コキュートス、もっと命を喰らえ」

「カロン、お前は……」

ついに拮抗が破れ、その瞬間に白き冷光コキュートスはアルテム・ライフを打ち破り、その術者であるフェイトへと迫った。

「これで……終わった」

カロンの視界全てが白一色に染まり、空すらも全てがカロンの屈服したかのように思えた。

「ああ……ディーバ、今行くよ……」

カロンは恍惚とした表情を浮かべ、足取りがおぼつかないまでもデイーバを閉じ込めたディープフリーズの檻へと一歩足を進めた。

「残念だけど、その一歩が限界だ。それ以上先はデイーバの騎士として踏み込ませるわけにはいかない」

倒したハズの敵である少年の声が聞こえる――いや、聞こえてもやることは変わらない。

既に自分にはもう魔力も生命力も残されてはいないのだ。

――もって数分、アルテマ・ライフを打ち破るただけにコキュートスに乗せた生命力は既に自身の限界を超え、今この歩みを止めてしまえば自分は中身のない人形と化してしまうことは自分でも理解していたからだ。

そして、その自らの衝動に従い更に一歩を踏み出した時、その足が切断された。

「――??」

それでも構わない、片足さえ残っていればまだ進める。

そう思い、カロンは残った右足を動かし前に進むが、その足すら失う。

いや、腕があれば這っていけるじゃないか。

そう思い、カロンは残っている両腕を使い前に這うように進むが、その腕も通してもらえない。

「なんで……なんで邪魔をするんだよ!!」

もう動かせるものは、口しかない。だから残ったそれで訴えかけるが、返ってきた言葉は拒絶だった。

「何度も言わせるな、俺はデイーバの騎士だ。お前みたいな狂人を通すわけにはいかない」

「ふざけるなよ、僕は、僕は……こんなにも……デイーバを愛しているの――」

開きかけた口から発せられる予定だった言葉は、ついぞ途切れたま

ま空気に吸い込まれた。

「お前のは愛じゃない、執着欲だ。愛は……こんなにも不幸にはならないし、一方通行でもない。俺にもまだ分からないけど……お前が間違っていることだけは確実なんだ」

白い霧が徐々に晴れていくなか、フェイトは目の前に横たわる一方通行な執着欲に塗れた狂人を、喰いとめることに成功した。

「ディーバ、今助けてやる」

カロンを倒し、ディーバを蝕むその氷も解けつつはあったが、急激に解けるわけではないらしい。

このままいけばディーバに後の後遺症を残すかもしれないと考えたフェイトは、自分の魔法でも氷を融かすことにした。

「ファイア！ボルケーノ！！フレア！！！」

初級や中級魔法では歯が立たず、上級火魔法も試したがイマイチ効果が実感できるほどまでにいかない。

「どうなってるんだ……？確かに融けてはいるが、もっと削らないと間に合わないかもしれないのに……」

途方にくれそうになるフェイトの横に表れたのは、リードだった。

「フェイト、終わった？」

リードは自身が戦力外であることを悟り、戦闘終了まで安全な場所まで退避していたのだが、戦闘が終わったとみて駆けつけてくれたのだろう。

「ああ、終わった。――終わったのに、氷が融けないんだよ」

リードは術者を倒せば融けると言っただが、このままではディーバが危ないかもしれない。

「フェイト、氷は、融けてる。――でも、中の人、急がないと危ない、かも」

「分かってる、分かってるんだ！でも上級火魔法のフレアですら効

果が薄いんじゃない。禁呪には禁呪じゃないとダメなのか？」

すぐるようにリードに助けを求めるフェイトだったが、リードは果たして

「フェイト、上級魔法を、重ねよう」

「上級魔法を？」

よく中級魔法まででは、2属性を混ぜて撃つことにより複合魔法としてランクが上がった攻撃方法がある。

だが、上級魔法は発動までが難しいためこれを1人で複合させることは困難を極める。

手っ取り早く威力を出したいがために、フェイトが編み出したのが生命エネルギーを混ぜた上級魔法、アルテマ・ライフなのだから。でも、2人いるならば

「リード、頼むぞ」

「うん」

どの魔法を使うかはお互い確認しない。この氷が生半可なものではないのならば、上級火魔法でも加減はいらないのだから。

「詠唱に10秒」

「了解、それに合わせる」

フェイトはほぼ詠唱破棄で上級魔法を使えるが、一般的な魔法師は上級魔法を詠唱破棄は出来ない。

それどころか、魔法学校1年生のリードが上級魔法を詠唱僅か10秒で使っていること自体が異常でもあるのだ。

フェイトは精神を研ぎ澄ませ、リードの詠唱を待つ。

耳を澄まし、リードの澄んだ声を聞く。

「……」

この澄んだ声？誰かに似ているような……？

フェイトの記憶の中でリードの声が誰かに重なり、その声が記憶に刻まれる。

『分からない？分からない……けど、――リード、君はいつたい？』
そんな夢現な時間は過ぎ、フェイトは現実を意識を集中させる。
リードの声も、リードの事も気になるが、今は、ディーバを助ける
ことに集中だ！
リードの詠唱が終節を導き、魔法という神秘が今具現する――
合わせる呼吸はいらない、今はただ己の感覚に従えばいい。きっと
リードも同じはずだから――
そして、2人の意志という名の歌が、一秒の狂いもなく重なる。

「レイズ――！」

火炎の火柱が竜巻のように唸り、禁呪であるディープフリーズの氷
を熱し、融かしとる。

その炎は清く聖なる炎であり、不死鳥の持つ炎がこれと同種では、
と考えられている神秘の炎だった。

炎は天へと返るように空へと集束しつつ、高く、高く昇る。

――やがて、炎は灰塵すら残さずに天へと昇り切り、地上には待ち
人たるディーバの無事な姿だけが残った。

「ディーバ――！」

フェイトはディーバへと駆け寄り、氷の呪縛からとけ地へと倒れそ
うな体を抱きとめる。

「ディーバ、……………息してる。ディーバ、息してるよ！ちゃんと
生きている――！」

フェイトは溢れる涙を止められずにいた。

初めて自分が忠節を誓った歌姫ディーバ。彼女を守るはずが幾度も
危険にさらしてしまい、一時は本当に取り戻せないかもしれないと
思ってしまったが、今彼女は自分の腕の中で眠っている。

「フェイト、良かったね――」

リードもこちらに駆け寄り、ディーバの眠った横顔を眺める。

「リード、リードがいてくれなきゃどうなるか分からなかった。本当に、――本当にありがとう」

「いい、フェイトが良ければ、それで、いい」

「俺――守れたんだな」

涙で顔をくしゃくしゃにしながらも、少年騎士であり、赤魔騎士でもあるフェイトは自分が守れた姫の体温を感じていた。

それから数日後――

デীবは直ぐに病院へと運ばれ、緊急検査が行われた。

急激な体温の低下によって、意識が危なくなっただとも言われたが、本当に幸運なことにデীবには後遺症も見られることなく、快復へと向かっているようだ。

後30分、氷の中にいたならば後遺症が残り、2時間程経っていたならば命の危険もあったと医者から言われた。

あれから俺は、デীবの眠る病室を毎日学校帰りに寄って確かめていた。

俺が学校に行っている間の警護はナイツオブラウンドの先生が交代で引き受けてくれている。

デীবを病院へ運んだ後、俺は学校へと事情の説明をするために行き、そこで全て話した。

デীবを狙う変な貴族がいたこと、デীবが禁呪に巻き込まれ命の危険もあったこと。

最初はギルバード先生が聞いてくれていたが、話が大きくなってきた次第から校長先生へも話を通すことになり、自身の無力さを痛感した。

幸いなことに学校からの処罰は無かった。世間からもこの情報については公表しないという話にし、ディーバの名誉が傷つけられる心配はなくなった。

それと同時に、連絡を取っていたアルト・アヴァロン王からも通信があり、ジェラルミンという貴族については目を光らせておく、とのことで借りを作った。

最も、向こうは気にした風でもないが本当に権力を頼り、借りた形になったため、俺は自分の小ささや子供加減を思い知らされた。

所詮自分は騎士という称号を得ても子供であり、政治的な部分や権力においては到底口を挟める次元ではなく、全てを自分で解決するにはあまりにも子供であった。

それからというものの、ディーバの看病には毎日顔を出すようにはし、それ以外の時間は学校にて授業を受けることにした。

元々の魔力に免じて騎士と名乗っていただけなので、この授業を受けていく過程で持って自分を高めていき、今後ディーバの時の二の舞は絶対に踏まないと誓った。

幸いなことに友人であるゲイト、ピア、レイも事の顛末を知った後もこちらを責めることなく、今までと変わらず友人で在り続けていてくれる。

リードには、あれから会う機会が中々持てずに会っていないのだが、野良猫みたいなリードだ。またいつかどこかひょんな所で出逢うに違いない。

そうして、ディーバの病室に通うこと6日目。

ディーバもようやく面会が可能な状態まで回復し、俺の面会が許可された。

白い清潔な病室、窓はあるが他にはベッドが1つあるだけで机の上に花が活けてあるがそれだけで、いささか殺風景にも見えた。

「よ、よう、ディーバ」

ディーバとは随分言葉を交わしておらず、どうしてか少し緊張してしまった。

…… 本当は責められるかもしれない、あんなことに巻き込んだ俺から距離を取りたいのかもしれない。

そう、思っている自分が少なからずあった。

でも――

「フェイト！ようやく会えた！！……ありがとう」

ディーバの最初の一言は、お礼だった。

「お礼？……なんで？」

訳が分からずにオウム返しのように聞き返すフェイトに、むしろ不思議そうに首を傾げながらディーバが言う。

「なんで……って、そりゃ勿論色んなことから助けてもらったからよ。私あんまり覚えてないけど、氷の中に閉じ込められちゃったんでしょ？あの変なおじさんからフェイトが助けてくれたことは覚えているんだけど、その後のことは騎士学校の先生から聞いたの。――

――それでフェイトがすごく頑張って私を助けようとしてくれて、最後にはその悪者をやっつけて私を救いだしてくれたんだって。――本当に、本当に嬉しかった。フェイト、最初に私と約束した通り私を助けてくれた、私の騎士なんだって」

その通りだが、本当に守るのならばこんな危険な目に合わせてはいけなかったはずだ。

今回後遺症や怪我がそんなにないのは不幸中の幸いだけで、本来ならばそんな必要もない日常こそが騎士として守るべきものだったのだ。

「俺は、ディーバの騎士だからディーバを絶対に助けるのは当たり前だ。俺が言いたいのはディーバを危険にさらして――」

「違うの！！……違う、そうじゃないの。……フェイトは胸を張っていいんだよ？私一人じゃ何も出来なかった、それに今学校の先生が警備に来てくれているけれど、誰もフェイトと違う。フェイトじ

やなきやきつと同じ目にあっても助けられなかった！フェイト、フェイトは自分を誇っていいんだよ？」

……誇っていいわけがない、どんなにディーバに慰められようがこれだけは誇れるわけがない。

「ディーバ、俺は今回のことで自分の無力を知った。俺が今回君の助けになれたことは多分、友達として心の強さを学ばせ、声を取り戻す手助けをできたことだけだと思う。……本当に、それだけだ」

ディーバから目を逸らすようにフェイトは窓際まで移動する。

そんな様子にディーバはなんと声をかけていいかためらっているように感じたが、次にディーバから発せられた言葉はフェイトが考えられるものではなかった。

「フェイト、私退院次第また復帰しようと考えているの」

思わず驚いて振り返るが、ディーバはあくまで冷静にこちらを困らせたくて言っているようには思えない。

「フェイト言ってたよね？私はまた歌姫として活躍して欲しいって

- - それでね、私なんだかんだあつたけど声が出るようになったし、また舞台に戻ってみようと思うの」

こちらを真っ直ぐに見据え、一切の迷いなくこちらに言葉を投げかけるディーバ。

そんなディーバに言葉を返すこともできずに、ただ見つめるだけになってしまった。

「だからね、フェイト……本当は貴方にも一緒に来てほしかったの。

- - 私の騎士として、一生を共に」

それはどういう意味……フェイトが理解するよりも早く、いや、理解して欲しくないかのようにディーバは言葉を続ける。

「でもフェイトは多分今回のことを自分中ですつと許せないままだつて、今気付いちゃったから。- - そんな私が傍にいたらきつと、苦しめちゃうよね？」

「そんなことない!!」

自分でも思わず大きな声が出てしまったため、ディーバを驚かせてしまったようだ、フェイトも言葉を止めるつもりはない。

「俺は後悔している、本当の意味で守れなかったことを。――でも、今はそのために力をつけるために学校に戻っているだけだ、だから

――」

しかし、その先の言葉は続けられなかった。

ディーバの瞳は嵐のように揺れることなく、そしてそれはフェイトとの別れを意味していたからだ。

「フェイト、私フェイトが私の騎士で良かったと本当に思うの。きっと他のだれが騎士になると言ってくれていても、こんな幸せな結末は迎えることが出来なかったと、本当に思う。……だから、言うわせて。フェイト、こんな無力な、こんなにも何も知らない私に仕えてくれて、本当に、――本当にありがとう」

ようやくディーバの嵐のような瞳が揺れ、そこから留まる事無く涙が雨のように降り続く。

「ディーバ……」

ディーバが決心したのならばフェイトが自分の我がままを貫くわけにはいかない。

ディーバはフェイトのためを思って、この決断をしてくれたのだ。フェイトがいつの日か、本当の騎士となつて、また誰か自分だけの姫を見つけその騎士となれるその日のために。

「フェイト、またね。離れても私達……友達、だからね」

自分がやっていたのは騎士ごっこだったのかもしれない。それでも、ディーバは救われたと言ってくれた。

ならば……キチンと、終わらせよう。結末は変えられたのかもしれない、それでも今自分が出来る精一杯がこの結末であるのなら、納得し、歩きださなくてはならない。

フェイトはベッドに座っているディーバに対し、膝を折り頭を深く垂れ、心のまま言葉を紡ぐ。

「私、フェイト・セーブは、至高き音色の歌姫ディーバの騎士として仕えられた事を一生の誇りとし、その生涯の一片を支えられたことを至上の喜びとし、その、未来へと踏み出す努力へと貢献できたことを生涯胸に刻む事をここに誓います！ - 歌姫ディーバの道行きに栄光あれ！歌姫ディーバの未来に……幸あれ！！ここに、我が騎士としての契約を終了したものと告げ、これより先は生涯の友として共に在らん事を誓う！！」

フェイトの騎士としての言葉を受け、ディーバは -

その世界中に染み渡る声で、世界中を魅了する声で、世界中から求められる声で

何よりも澄み、何よりも尊く、何よりも美しく、何よりも愛らしい声で

世界でただ1人のためだけに、歌を謳った。

その歌は今まで誰にも聞かせたことはない。

何せ、たった今思い浮かんだ詩を、たった今思い浮かんだメロディーに乗せ

ずっと前から思い続けてきた気持ちを、心を、魂を全て込めて謳いきった。

言葉が出ない。

フェイトは今までこんな気持ちになったことがない。

こんなにも暖かく、こんなにも優しく、こんなにも張りつめ、こんなにも心が高鳴り、こんなにも涙が出たことは、生涯一度も経験したことがなかったからだ。

言葉というものでは表せない、ディーバの気持ち、ディーバの心、ディーバの魂。

その全てに応えるには言葉では圧倒的に足りない。もしそれに応える術があるのならば、それは言葉ではない。

フェイトは面を上げ、立ち上がり、ベッドに座るディーバの右手を取った。

ディーバの全てに応えられるよう、その想いの全てを自分の手に込め伝えた。

「……うん、伝わったよ。フェイトの気持ち。……そっか、そんなに感動してくれたんだ」

感動。確かに一言で言えば感動かもしれない。

でもそれとも何か違う、この感覚を何と呼べばいいのだろうか？

「フェイト、ありがとう」

こちらに向日葵のような笑顔を見せてくれるディーバに、今後の不安は一切ない。

ならば、こちらも笑顔で応えよう。

「ありがとう、……ディーバ」

すると、ディーバの顔が不意に近づき、頬に何か暖かい感触が訪れた。

「……??……!!ディーバ?!」

それ以上の言葉は許されなかった。ディーバに抱きしめられ、フェイトは言おうとした言葉、考えた言葉全てを飲み込み、ディーバの気持ちを受け止めることだけを考えてた。

フェイトも両手をディーバの後ろに回し、お互いが抱き締める形となり、そのままずっと互いの体温と呼吸を感じ合う時間が、なだらかに過ぎ去った。

「ありがとう、私の大好きな人。……さようなら、またいつか、会

『える日まで』

準備中

「えっ？デイーバ行っちゃうの？」

病院から帰った後、フェイトはレイに電話をしデイーバが再び歌姫として舞台に戻る事を教えた。

「ああ、デイーバはそう決めたみたいだ。前にデイーバにはデイーバの歌が好きなんだ、って言ったこともあるからもしかしたらそれを意見の一つとして受け止めてくれてたのかもしれない」

「そう……ね」

いや、十中八九フェイトのその言葉に動かされたのだろう、とレイは想像していたが敢えて口には出さなかった。

「それで？電話してきたってことは、何かあるんでしょ？」

レイの察しの良さはとても助かる。本来頭の回転が速い方なのだろう。

「ああ、デイーバがこの国を発つ前最後にさ、またみんなで集まってワイワイやらないか、と思ってさ」

「確かにね。友達が旅立とうとしているのに、黙って行かせたらそりゃダメね。よし、早速計画を立てましょ。デイーバはいつ出立？」

「4日後って言うってたな」

「随分と急ね……何か心境の変化でもあったのかもしれないけれど、そうね……なら3日後、送別会をやりましょ。それで4日後一緒に見送りにも行つて」

「そうだな、日取りはそんな感じでいいか。んじゃレイはピアと出来ればリードとも連絡を取ってみてくれないか？」

「リード？リードもデイーバと知り合いなの？」

「ああ、そういう話は話そびれていたけどデイーバを助ける時に協力してくれたんだ。だから是非誘いたいんだけど、レイは連絡先とか知らない？」

「残念だけど私も連絡先は分からないわね……確か妹さんが魔法学

校に通ってるんじゃないかった？妹さんに頼んだ方が確かかもよ？」

「それもそうか、分かった、レイはピアとパーティーの概要を打ち合わせてくれ」

「OK、でも場所はどうする？どこかのお店を借り切るとか私達学生だから資金的にも難しいわよ？それに私達は寮だし……」

「んー、そうだ、俺の家ならどうだ？ちよつと歩いて時間かかるけど、広さなら十分だと思うんだ」

「へえ、フェイトの家ね。面白そう、1回は遊びに行ってみたいと思つてたしそれでいいわ」

「了解、んじゃ明日の夜また電話するよ。俺はこの後ゲイトにも電話しておく」

「了解、明日までにはプランを固めておくわ」

「おう、頼んだぜ」

「ハイハイ、受け持ったわよ。それじゃね」

「また明日な」

電話を終え、フェイトは予定を改めて確認した。

「4日後にはディーバは再び海外へ……か。寂しいもんだな」

ディーバにあの美しい声が戻り、心の傷も大分癒えてきてはいるのだろう。

実際失った家族は取り戻せないし、あの喪失感はそうそう埋まるものではない。

しかし、それでも新しく友達という存在を知ったディーバは、友達という仲間と絆を得て新たに生まれ変わった。

きつとこれから先、苦勞が絶えないだろうけれど今度は俺達が支えてやる。ディーバの御両親程じゃなくても、またこの国に帰ってくることを楽しみにさせてやる位には思つて欲しい。

そのためのパーティーだ。――頑張ろう

「よっし、燃えてきた！次はゲイトに電話だな」

そうしてゲイトにも電話をかけ、送別会の準備は着々と進行していった。

「本当に宜しかったのですか？デীব様」

そう清楚な病室で問い掛ける男性は、おおよその場に似つかわしくない風体の持ち主だった。

無骨で筋肉隆々とした威圧するように巨大な肉体は、初めて見るものが見れば怯えてしまうものを感じさせる。

しかし、ベッドの上に静かにたたずむ少女は特に気にすることなく会話に応じる。

「ええ、フェイトのためだもの。フェイトは私の心の傷を気遣って騎士でありながら友達でもいてくれた。でも、それは本来騎士としての在り方を望むフェイトの在り方ではないと思うの。それに、今回の件では迷惑をかけてしまって、フェイトにも心の傷を負わせてしまった。――だからかな、よく歌で歌われている時間だけが心を癒せる、という言葉に頼ってみたの」

入口付近でドアを見張るように背筋を伸ばす男性は、その答えにいささか表情を渋めながら答える。

「デীব様が今回の件について目を瞑るということによって、フェイトは救われた。正直な所我々は厳罰を設けるべき、という声が多かったのだが当事者であり世界の歌姫であられる貴女様の声を今回は尊重させていただきました。……もつとも、フェイト自身、厳罰等なくとも自身の無力さを痛感し学校に精を出して登校してきてはいますかね」

フェイトが真面目に授業を受けるようになったことに関してのみ、この男性は表情を緩めた。

「ギルバード先生？フェイトは優秀な騎士になれますか？」

デীবの問いは鋭くもあり、期待に満ちた問いでもあった。――しかし、嘘を付く訳にはいかない。

「現状を見るに精神的にムラがありそうな成長をしそうですが、優秀な騎士にはなるでしょう。……ただし、フェイトが何を持って生

涯を誓う姫とするか、があいつの将来最大の悩みになることは間違いないでしょう」

「そう……多分そうかもね」

フェイトはきつと自分から言わなければ、ディーバの騎士として着いて来てくれただろう。

フェイトは全身全霊を懸けて騎士としての職務を全うしてくれた。故に姫の方から生涯を共に、とプロポーズすればきつと受けてくれる。

――しかしそれは自分の甘えだ。これから先は自分の甘えを律して、自分で考え、自分で動かなくてはならないだろう。

誰も理由は教えてくれない、自分が何故歌を歌うのかも、誰のために歌うのかもこれから先は自分で考えていかなくてはいけない。

「フェイト……」

「……あー、これは独り言なのですが」

もしかして、今の呟きが聞こえてしまっていたのだろうか？ギルバードはこちらに背を向け決して表情を見せないよう、あたかも独り言を言うかのような姿勢で言葉を出す。

「ディーバ様はきつとフェイトが好きなのでしょうな。そしてディーバ様にそんな素晴らしく素敵な感情を芽生えさせたフェイトは、誇りを持っていいべき偉業でもあるし、同時小憎たらしい奴でもあるな。それにディーバ様の心の傷を癒すことが出来た事も十分、いや十二分の成果だったと褒めてやりたい所でもあるな。今後も我が校はディーバ様と良き関係を築いていきたいと考えもいるし、フェイトに何かしらの役をお願いしたいと考えてもいいな」

「それって……」

ディーバの問いに解答はもらえなかった。――それでいい。教えてもらったら、自分で考えられなくなるから。

「ギルバード先生、ちよつとお願いがあるんですが」

夜の密談は、こうして進んでいった。

翌日

昼間は普通に学校に通い、遅れた分の授業カリキュラムをこなしつつトレーニングに励む。

レイもカリキュラムの遅れがあるはずだが、フェイト程休んではないためとくに返上済みだ。

そのためレイと校内で話す機会はついぞ得られなかったため、結局この日も帰ってから電話で話すこととなってしまった。

「こんばんはーつと、レイ？」

「もしもし、私よ」

「いやいやピアかもしれないな。何せ双子だ」

「冗談はその位で、睡眠時間まで削りたくないんだから」

「へいへい、悪かったなつと。それでピアはなんだつて？」

「参加は勿論よ。それで飾り付けと贈り物をこつちで考えて用意することにしたわ」

「そりや助かる。さすが女の子だな」

「もう、そんな所で褒めないの。明日買い出しに行くからいるものがあつたらついでに買っわよ？」

「んじや料理の材料もお願いしていいかな？なんとゲイトは料理が出来るのだ！」

「嘘っ！？なんで男子が出来るのよ！？」

何故かもの凄く驚いているレイだったが、何に驚いているのかがよく分からない。

「ゲイト結構家事手伝いしてたらしくて、そこそ何でも作れるらしいから。買い出しリストにひき肉と鳥のむね肉、後サラダの材料適当にを追加でお願い」

……………あれっ？返事がない？

「おーい？レイ？」

「あ、ああ、ごめんね。…………えつとサラダの材料よね……………」

もしや

「レイ？材料は適当でいいんだよ？」

「……………」

あ、やっぱり。多分レイ、料理出来ないんだ。

「レイ？えーっと、もしかして料理できない？」

「うっ」

うって言ったぞ、今。

「やっぱりか。んじゃ材料も指定するから、それ買ってきてくれればいいから」

「…………助かる」

うーんまさか料理が出来ないとは。

しかし、あれだけ優等生なレイで普段から格好良いのにこの料理が出来ないという不器用さ。

これがもしかして

「ギャップ萌え？」

「変なこというな！バカ！……………全く、フェイトは料理作れるの？」
逆切れに近い切り返しだけど、別に怯むことはない。

「作れるよ。ゲイトみたいに凝ったのは無理だけど、普通の夕飯位ならそこそこ何でもいける」

「うう……」

凄く悔しそうだ。ヤバイ、ちょっと可愛いかも。

「大丈夫、レイは料理できないだけでしょ？妹は料理が壊滅してるからそれと比べたら全然マシだって」

「それフォローになってない」

何やため息が聞こえた気がしたが

「了解。それじゃ買い出しはちゃんとやるから、料理はお願いね」

「うん、じゃあ重たいかもしれないけど宜しくね。あ、そうだ。ちなみにピアも料理できないの？」

「私と同じよ。料理なんて挑戦したことないわ」

「そっか、ドンマイ」

「もういいわよ……それじゃ明後日ね」

「そうだね、明後日は放課後校門で全員待ち合わせで」

「分かったわ、それじゃおやすみ」

「おやすみ」

さて、おやすみと言ったはいいがやることは山積みだ。

家の片づけが何より重要課題だし、何よりリードがどうなったか妹に聞かなくては。

そんな訳で隣の妹の部屋をノックする。

「アイリス？いるか？」

間もなくドアが開けられ、鳶色のショートヘアの妹が出迎えてくれる。

「あ、お兄ちゃん。頼まれてたやつ？」

「そうそう、リードって娘。見つかった？」

「うーん、それがねー、名簿には名前があるんだけど出席してないみたいなんだよね」

「休みだったってこと？」

それは運が悪かった、と思っていたら

「違くて、先生に聞いたらリードちゃんって特待生らしいんだよね」

「特待生？」

ありえる話だ。1年生ながら上級魔法を使いこなし、既知の魔法ではない新種の魔法を生み出すあの実力は1年生で収まるものではない。

「先生からどんな知り合いかって聞かれて、兄が友達なんです。って答えたら少しだけ教えてくれて、リードちゃんは学校の授業受けるか受けないかは自分で選んでいい位の待遇で入学したんだって。本来なら魔法研究所にスカウトされる所、本人が学校に行きたいって言ったからいるだけで、扱いはVIPらしいよ」

「なるほど」

さて、それではどうやって連絡を取るか？少なくとも町に行けばまた会えそうだが、確実ではない。

「ま、なんとかなるか。んじゃありがとな、アイリス」

「あ、ねえねえ本当にディーバさんが家に来るの？」

家に招くとなった時点で家族にはディーバが来る事を知らせてある。最も今両親は研究に掛かりきりで、後数日は家に帰ってこないだろう。

一応メールには「サインもらっておくように」「あんまり散らかさないように」と家に呼ぶ許可はもらえたのだが、アイリスは一緒に送別会に参加する予定だ。

「本当だよ、なんで嘘を付かなきゃならんのだ」

「別に疑ってる訳じゃないんだけど、世界の歌姫だよ？緊張するなっていう方が無理」

両手をバタバタと振ってリアクションを取る妹だが、その目には期待が混ざっていることを知っている。

「ま、ディーバもそうだけど他の俺の友達とも初対面になるわけだ。

あんまバカやるなよ？」

「バカってなにさー！」

自分でからかっておきながら、よしよしとアイリスの頭を撫でてご機嫌を取る兄妹のコミュニケーションは、平和な日常そのものだった。

次の日もつつがなく過ぎ、いよいよ送別会当日となった。

この日は朝からソワソワとしてしまい、授業にあまり身が入らなかった。

昼になってもそんな感じで、一緒に昼食を取っていたレイから

「フェイト、落ち着け」

と宥められた位だ。

「レイは落ち着いているなー?」

「そりゃね、緊張する理由ってある?」

「なんとなく?」

「つまり空気で緊張していると、全くあれだけ実戦には強いのにね」
レイは普段から優等生なままで、こんな時でも取り乱さないのはメンタルがとても強いのだと思う。

「こういう時は予定を反復して落ち着くものよ。まず放課後校門に集合、その後フェイトの魔法で家に行って私とピアとリードで飾り付け、ゲイトが料理でフェイトがディーバの出迎え。それで大丈夫でしょ?」

ん?とフェイトは疑問を感じた。

「あれ?リードと連絡取れたの?」

宛てにしていたアイリスが空振りだったことは伝えたハズだが。

「買い出しの最中に会ったのよ。また野良猫追いかけてたわよ」

「またか」

昼間から野良猫を追いかけてまわして、一緒に猫みたいなリードを想像すると心が少しだけ楽になった。

「放課後校門前って伝えてあるし、連絡先もちゃんと聞いたからこれからは大丈夫よ」

「さっすがレイ」

「そういえばお昼おごってもらう約束っていつまで有効?」

ディーバに関わっていた時そういえば大分助けてもらったし、そんな約束もしていた気がする。

「いつまでだっついていいさ」

「そうね、それじゃ今度夕食ごちそうになるとしましょっかね」

「あれね?レイさん。ハードル上がってますよー?」

そんなしょうもない会話のおかげか、フェイトはいつの間にか落ち着きを取り戻していた。

「お待たせっ！」

放課後になってゲイトとピアが校門前にやってきた。

2人とはいつも朝のHRで顔を合わせているため、久しぶりという感じはしないがやはり一緒にトレーニングや授業をしているわけではないので、必然会話が少なくなりがちだったのだ。

「いやー今日の放課後空けるために、訓練前倒して頑張ったぜ」

「私だって双剣部の練習休んでるのよ？ゲイトだけ苦労したって話にしないでよね」

「分かった分かった、2人共忙しいのにサンキュな」

「友達のためだろ？」

「勿論、ディーバに会うの久しぶりだもん」

やっぱり根がいい友達なので、みんな嫌がることなく集まってくれた。

「それでリードにも会ったのよ。ゲイトだけ初対面だったけ？」

「ああ、なんか悔しいな、俺だけ知らないってのは」

「もうすぐよ、直に会えるから楽しみにしてて」

しかし、20分経ってもリードは来なかった。

「おかしいわね……姉さん電話してみて？」

「確かにね、ちょっと待って」

カバンから携帯電話を取り出し、レイはリードの番号を呼び出し掛ける。

RRRRR

おや？すぐ近くから電子音がするな。

フェイトが辺りを見渡すと、細い路地が目に入った。

「あ、もしかして」

そんなフェイトの呟きにレイは得心し、ゲイトとピアは首を傾げたままフェイトに続いて歩く。

路地に入った所で見つけたのは、はたしてリードだった。

「リード、また猫と遊んでたのか？」

その言葉を投げかけられ、こちらを振り向く金のストレートヘアの小柄な女の子。

どうやら待つのに退屈していた時に猫を見つけて遊んでいたらしい。時間を見なくなってしまふのは、もう癖なのだろう。

「ごめん、時間？」

素直に謝るリードだが、別に怒っていたわけではない。

「いや、大丈夫だ。とはいえあんまり時間もないものだからサクサク行こう。みんな集まって」

そう言つてまた元の校門前の方に進みつつ、チヨイチヨイっと手招きしてみんなを集めるフェイト。

「とりあえず初対面はゲイトだけか。ほら、自己紹介」

「そうだったそうだった、俺はゲイト・ユンっていうんだ。勿論騎士志望で同い年の1年生だ。君は？」

「私は、リード・ロード。宜しく、ね、騎士さん？」

「何で疑問形？」

レイがそう質問すると、リードはじーっとゲイトの左手にある箱に目が釘付けだった。

「……………ケーキ？」

「お、よく分かったな。チョコレートケーキ、割と自信作だぜ」

何故か違う意味で女性陣がゲイトに釘付けとなった。

リードは食べたそうに、レイとピアはゲイトのお菓子作りという料理スキルに完敗したかのように。

「美味しそう」

「後で切つてみんなで食べるからな、もうちょっとだけ待っててくれよ？」

「うん！」

こんなにイキイキとしたリード初めて見た。そんな的外れな感想をフェイトは抱いたが、

「さって、んじゃ行きますか。時間もないし、行つくよ」

フェイトは全員を飛行魔法で自宅まで運んだ。

皆を自宅に降ろした後、既に帰宅していたアイリスを紹介しパーティーの準備を始めることにした。

その後、フェイトは病室までひとつ飛びするとディーバを迎えにきた。

ディーバの病室前まで来て、いつも通りドアをノックする。

「ハーイ、フェイト？」

中からとても愛らしい声で応えてくれるのはディーバだ。

前もってフェイトがこの辺りの時間で迎えに来る、と伝えていたため普段聞かせないような愛くるしい声で迎えてくれたのだろう。

「やつ、ディーバ。――驚いた」

病室で待っていたのは、あの日と同じパステルグリーンのシフォンワンピースに身を包み、等身大のとても可愛くキレイな1人の女の子であった。

最近までは病院から支給された白のパジャマで過ごしていたため、余計に明るく眩しく見える。

「どう？ 似合う？」

きっと今日は歌姫ディーバ、ではなくディーバ個人として楽しみたいのだろう。

そんな気持ちが伝わってきた。

「似合うよ、ディーバ。すごく可愛い」

「ありがと。フェイト前にもこれ気にいってくれてたみたいだから、今日はこれにしたの。」

クルリ、とその場で一回転してみせるディーバはどこからどうみて

も年相応の可愛らしい女の子だ。

いや、ひよつとしたら容姿だけでもアイドルとしてやっていけそうな程可愛い。

「お姫様に目が釘付けになっているぞ、フェイト？」

と、横から無骨な声が響いてきたと思えば、担任のギルバード先生だった。

「あれ？今日はギルバード先生の当番の日でないのでは？」

今日は確かあのお爺さんっぽい、アンフォル先生だったと思ったのだが。

「アンフォル先生もいらっしやっているぞ。私は私用で来ていただけだからな」

はて、私用とは？いつの間にかディーバに頼られる先生にもなっていたとは知らなかった。

「ギルバード先生からフェイトの話聞いてる内に、色々話をするようになったの」

そうか、自分の話なら担任のギルバード先生が一番詳しいに決まっている。

それだけ自分に興味を持ってくれたのなら、素直に嬉しい。

「さて、邪魔者は退散退散。フェイト楽しむのもいいが、ハメを外し過ぎるなよ？」

普段あれだけリミッターを外している派手好きな先生から、注意をもらうなんてどうやら今日はトコトン騒げということらしい。

スツ、とフェイトは右手を差し出す。

本当は膝を付き、騎士としてエスコートしたい所だがディーバの騎士は引退してしまった。

友達として、異性をエスコートするにはこれ以上深くしてはいけな
いのがマナーのため、これで我慢するが――

「フェイト、なんだかムズムズしてる。目が子供みたいに我がまま

言ってるよ？騎士としてエスコートしたいって」

ディーバには見透かされてしまったようだ。……ってあれ？そんなに分かり易かったのかな？

「フェイトって良く見ていると本当に分かりやすい。まだまだ子供だよ？」

そういえばディーバの方が年上だったっけ。……でも、あの事件以来本当にディーバは変わったと思う。

助けに間に合った事がキツカケなのか、それとも声が出るようになったのがキツカケなのか、それとも入院してから変わったのか。

今でも始まりは分からない。けれど1つだけ言える事は、いい変化だということだ。

今みたいに誰かを良く見て、何を考えているのか想像して、それを言葉にして。

きつとそれは人と人が付き合う基本なのかもしれないけれど、ようやくディーバはそれを手に入れ始めた、今みたいに何も言わなくても分かってしまうように。

「……今日だけは特別だよ？」

そう言つて、ほんの少しだけ瞳が水面の様に揺れたが、ディーバは右手を下げてこちらに差し出してくれる。

今日だけは、特別。

とても甘い誘惑、とても甘い果実。

それでもディーバから差し出してくれたのならば、取らねばなるまい。

フェイトは差し出した右手を一度引っ込め、改めて仕切り直す。

片膝を床に付き、今度は右手をすくうように差し出して姫の手を取らせてもらう。

ニコリと微笑みかけられ、フェイトも笑顔を返す。

まるで幼い時にやったお姫様と騎士ごっこのように単純で、形式だけのものだったが、2人は幸せを感じていた。

目と目が通じ合う。

『エスコート、よろしくね』

『お任せ下さい』

言葉は知らない、歌姫の言葉がいないというこの関係は最高の贅沢に思えた。

「行きましょう、ディーバ姫。皆が待ち詫びております」

フェイトが立ち上がり、ディーバを病院という王城から連れだし、自宅というパーティー会場へとエスコートを始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4688y/>

騎士学校の俺と俺だけの姫様

2012年1月10日15時49分発行